

令和 6 年 度

授 業 概 要

言 語 聴 覚 学 科

学校法人 山口コア学園
山口コ・メディカル学院

Yamaguchi Allied Health College

令和 6 年 度

- ◇ 学校行事日程
- ◇ 年次別開講科目一覧
- ◇ 実務経験のある教員等による
授業科目一覧

令和6年度 学校行事日程

4月	日	月	火	水	木	金	土	
		1	2	3	4	5	6	4日 入学式
	7	8	9	10	11	12	13	5日 対面式・前期オリ
	14	15	16	17	18	19	20	8日 前期授業開始
	21	22	23	24	25	26	27	11日 内科検診・レントゲン
	28	29	30					

5月	日	月	火	水	木	金	土	
				1	2	3	4	2日 自治会総会・春レク
	5	6	7	8	9	10	11	
	12	13	14	15	16	17	18	
	19	20	21	22	23	24	25	
	26	27	28	29	30	31		

6月	日	月	火	水	木	金	土	
							1	
	2	3	4	5	6	7	8	
	9	10	11	12	13	14	15	
	16	17	18	19	20	21	22	
	23	24	25	26	27	28	29	

7月	日	月	火	水	木	金	土	
		1	2	3	4	5	6	7/22～8/2 前期定期試験
	7	8	9	10	11	12	13	
	14	15	16	17	18	19	20	
	21	22	23	24	25	26	27	
	28	29	30	31				

8月	日	月	火	水	木	金	土	
					1	2	3	5～9日 前期定期試験予備日(再試)
	4	5	6	7	8	9	10	8/13～9/13 夏季休業
	11	12	13	14	15	16	17	24日 臨床実習指導者会議
	18	19	20	21	22	23	24	
	25	26	27	28	29	30	31	

9月	日	月	火	水	木	金	土	
	1	2	3	4	5	6	7	17日 後期オリ・後期授業開始
	8	9	10	11	12	13	14	
	15	16	17	18	19	20	21	
	22	23	24	25	26	27	28	
	29	30						

	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4	5
10月	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		

18日

自治会総会・秋レク

	日	月	火	水	木	金	土
						1	2
11月	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30

2日

学園祭

	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6	7
12月	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

12/23～1/6

冬季休業

	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	4
1月	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

7日

授業再開

1/20～1/31

後期定期試験

	日	月	火	水	木	金	土
							1
2月	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	

2/3～2/7

後期定期試験予備日(再試)

	日	月	火	水	木	金	土
							1
3月	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30	31					

8日

卒業式

春季休業(～3/31)

言語聴覚学科

1. 基礎科目

科 目	単位		開 講 時間数	1年次		2年次		3年次		4年次		卒業要件	指定規則	
	必修	選択		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		教育内容	単位数
英 語 I (文 献 I)	1		15	15								4単位必修	外国語	4単位
英 語 II (医 学 英 語)	1		15				15							
英 語 III (英 会 話)	1		15	15										
英 語 IV (文 献 II)	1		30				30							
体 育 実 技	1		30	30								2単位必修	保健体育	2単位
体 育 理 論	1		30		30									
哲 学 I	1		15	15								4単位必修	人文科学 2科目以上	2単位
哲 学 II	1		15		15									
心 理 学 I	1		15	15										
心 理 学 II	1		15		15									
法 学	1		15		15							5単位必修	社会科学 2科目以上	2単位
関 係 法 規	1		30					30						
社 会 学	1		15				15							
教 育 学 I	1		15		15									
教 育 学 II	1		15		15							4単位必修	自然科学 2科目以上	2単位
生 物 学	1		30	30										
統 計 学	1		15		15									
情 報 科 学 I	1		15		15									
情 報 科 学 II	1		15				15					小	計	
小 計	19	0	360	120	135	30	45	30	0	0	0			

2. 専門基礎科目

科 目	単位		開 講 時間数	1年次		2年次		3年次		4年次		卒業要件	指定規則	
	必修	選択		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		教育内容	単位数
解 剖 生 理 学 I	1		30	30								5単位必修	基礎医学	3単位
解 剖 生 理 学 II	1		30		30									
解 剖 生 理 学 III	1		30	30										
解 剖 生 理 学 IV	1		30		30									
生 理 学 実 習	1		30				30					11単位必修	臨床医学	6単位
医 学 概 論	1		15	15										
病 理 学	1		30		30									
内 科 学 I	1		30				30							
内 科 学 II	1		30					30						
小 児 保 健 学	1		30				30							
精 神 医 学	1		30				30							
神 経 内 科 学	1		30				30							
耳 鼻 咽 喉 科 学	1		30					30						
形 成 外 科 学	1		30					30						
脳 神 経 外 科 学	1		15						15					
リハビリテーション医学	1		15				15							
歯 科 ・ 口 腔 外 科 学	1		30				30					1単位必修	臨床歯科医学	1単位
解 剖 学 実 習	1		30				30					3単位必修	音声・言語・聴覚医学	3単位
呼吸・発声発語系の構造・機能・病態	1		30					30						
聴 覚 医 学 概 論	1		30		30							7単位必修	心理学	7単位
臨 床 心 理 学	1		30	30										
人 間 発 達 学	2		30				30							
学 習 ・ 認 知 心 理 学	2		30				30							
心 理 測 定 法	2		30					30						
言 語 学	2		30	30								2単位必修	言語学	2単位
音 声 学	2		30		30							2単位必修	音声学	2単位
音 響 学	1		30				30					2単位必修	音響学	2単位
聴 覚 心 理 学	1		15					15				2単位必修	言語発達学	1単位
言 語 発 達 学 I	1		15	15										
言 語 発 達 学 II	1		15		15							2単位必修	社会福祉・教育	2単位
社 会 福 祉 学	1		30		30									
リハビリテーション概論	1		30	30								小	計	
小 計	37	0	870	180	195	255	195	45	0	0	0			

3. 専門科目

科 目	単位			1年次		2年次		3年次		4年次		卒業要件	指定規則	
	必修	選択	時間数	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		教育内容	単位数
言語聴覚障害概論Ⅰ	1		30	30								10	言語聴覚障害学総論	4
言語聴覚障害概論Ⅱ	1		30		30									
言語聴覚障害診断学	1		30			30								
言語聴覚障害研究法Ⅰ	1		30					30						
言語聴覚障害研究法Ⅱ	1		45							45				
言語療法総論Ⅰ	2		90							90				
言語療法総論Ⅱ	3		135								135			
失語症学Ⅰ	1		30		30							7	失語・高次脳機能障害学	6
失語症学Ⅱ(評価診断)	1		30			30								
失語症治療学Ⅰ	1		30				30							
失語症治療学Ⅱ(演習)	1		30					30						
高次脳機能障害学Ⅰ	1		30			30								
高次脳機能障害学Ⅱ	1		30				30							
高次脳機能障害検査法	1		30					30						
発達障害学Ⅰ	1		30		30							7	言語発達障害学	6
発達障害学Ⅱ	1		30			30								
言語発達障害学Ⅰ	1		30				30							
言語発達障害学Ⅱ	1		30					30						
言語発達障害治療学Ⅰ	1		30					30						
言語発達障害治療学Ⅱ(脳性麻痺)	1		30					30						
言語発達障害治療学Ⅲ(演習)	1		30						30					
音声障害Ⅰ	1		30					30				10	発声発語・嚥下障害学	9
音声障害Ⅱ	1		30						30					
嚥下障害学	1		30			30								
嚥下障害治療学Ⅰ	1		30				30							
嚥下障害治療学Ⅱ(演習)	1		30					30						
構音障害学Ⅰ(運動性)	1		30					30						
構音障害学Ⅱ(運動性)	1		30						30					
構音障害学Ⅲ(器質性)	1		30					30						
構音障害学Ⅳ(機能性)	1		30		30									
流暢性障害	1		30			30								
小児聴覚障害学	1		30			30						7	聴覚障害学	7
成人聴覚障害学	1		30		30									
小児聴覚障害治療学	1		30					30						
成人聴覚障害治療学Ⅰ	1		30					30						
成人聴覚障害治療学Ⅱ	1		30					30						
聴力検査法演習	1		30			30								
補聴器・人工内耳	1		30				30							
臨床基礎実習	1		40				40					15	臨床実習	12
臨床実習Ⅰ	6		240						240					
臨床実習Ⅱ	8		320							320				
小計	56	0	1920	30	150	210	220	330	390	410	180			

4. 選択・必修科目

科 目	単位			1年次		2年次		3年次		4年次		卒業要件	指定規則	
	必修	選択	時間数	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		教育内容	単位数
言語療法セミナーⅠ	1		30	30								4		
言語療法セミナーⅡ	1		30			30								
言語療法セミナーⅢ	1		30					30						
言語療法セミナーⅣ	1		30						30					
理学療法概論	1		15					15				8		
作業療法概論	1		15					15						
地域リハビリテーション学	1		30				30							
看護学概論	1		15					15						
薬理学	1		15					15						
救急医学	1		15					15						
栄養学	1		15					15						
地域言語聴覚療法論		1	15					15						
ボランティア論		1	15		15									
小計	11	2	270	30	15	30	30	135	30	0	0			8

	総科目単位			1年次		2年次		3年次		4年次		卒業要件	指定規則	
	必修	選択	総時間数	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		教育内容	単位数
基礎科目	19	0	360	120	135	30	45	30	0	0	0	19		12
専門基礎科目	37	0	870	180	195	255	195	45	0	0	0	37		29
専門科目	56	0	1920	30	150	210	220	330	390	410	180	56		44
選択・必修科目	11	2	270	30	15	30	30	135	30	0	0	12		8
	123	2	3420	360	495	525	490	540	420	410	180	124		93
				855		1015		960		590				

実務経験のある教員等による授業科目一覧 言語聴覚学科

科目名	単位数	時 間 数			
		1年次	2年次	3年次	4年次
生 理 学 実 習	1		30		
解剖学実習	1		30		
リハビリテーション概論	1	30			
言語聴覚障害概論Ⅰ	1	30			
言語聴覚障害概論Ⅱ	1	30			
言語聴覚障害研究法Ⅰ	1			30	
言語聴覚障害研究法Ⅱ	1				45
言語療法総論Ⅰ	2			90	
言語療法総論Ⅱ	3				135
失語症学Ⅰ	1	30			
失語症学Ⅱ（診断評価）	1		30		
失語症治療学Ⅰ	1		30		
失語症治療学Ⅱ（演習）	1			30	
高次脳機能障害学Ⅰ	1		30		
高次脳機能障害学Ⅱ	1			30	
高次脳機能障害検査法	1			30	
発達障害学Ⅰ	1	30			
発達障害学Ⅱ	1		30		
言語発達障害学Ⅰ	1		30		
言語発達障害学Ⅱ	1		30		
言語発達障害治療学Ⅰ	1			30	
言語発達障害治療学Ⅱ（脳性麻痺）	1			30	
言語発達障害治療学Ⅲ（演習）	1			30	
音声障害学Ⅰ	1			30	
音声障害学Ⅱ	1			30	
嚥下障害学	1		30		
嚥下障害治療学Ⅰ	1		30		
嚥下障害治療学Ⅱ（演習）	1			30	
構音障害学Ⅰ（運動性）	1			30	
構音障害学Ⅱ（運動性）	1			30	
構音障害学Ⅲ（器質性）	1			30	
構音障害学Ⅳ（機能性）	1	30			
流暢性障害学	1		30		
小児聴覚障害学	1		30		
成人聴覚障害学	1	30			
小児聴覚障害治療学	1			30	
成人聴覚障害治療学Ⅰ	1			30	
成人聴覚障害治療学Ⅱ	1			30	
聴力検査法演習	1		30		
補聴器・人工内耳	1		30		
臨床基礎実習	1		40		
臨床実習Ⅰ	6			240	
臨床実習Ⅱ	8				320
言語療法セミナ－Ⅰ	1	30			
言語療法セミナ－Ⅱ	1		30		
言語療法セミナ－Ⅲ	1			30	
言語療法セミナ－Ⅳ	1			30	
理学療法概論	1			15	
作業療法概論	1			15	
地域リハビリテーション学	1			15	
看護学概論	1			15	
地域言語聴覚療法論	1			15	

1 年 次

基 礎 科 目

◇英語Ⅰ（文献Ⅰ）

◇英語Ⅲ（英会話）

◇体育実技

◇体育理論

◇哲学Ⅰ

◇哲学Ⅱ

◇心理学Ⅰ

◇心理学Ⅱ

◇法学

◇教育学Ⅰ

◇教育学Ⅱ

◇生物学

◇統計学

◇情報科学Ⅰ

言語聴覚学科

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	英語 I (文献 I)					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	上田 由紀子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 義務教育・中等教育で学んだ英語の読解力を定着させ、更なる発展をはかるため、精読や英文和訳に限らず、大意把握や速読などさまざまな英語リーディング活動や英語構文把握の練習を行う。医療現場で使われることの多い英語を扱った教材を用いる。					【到達目標】 ・一定の長さの英語文書に対処する読解力と構文理解力と語彙力を養成する。 ・受け身の読解ではなく、アクティブに読む力を付ける。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション & Unit 1 前半 : 手紙文・履歴書の定型、内容把握				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。手紙文の形式を理解できる。					
2	Unit 1 後半 : 命令文についての文法問題解釈				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。命令文の形式を理解し、命令文を作文できる。					
3	Unit 4 前半 : 身体構造・内臓を説明する語彙と長文内容把握				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。脳と聞き手の仕組みを英語で理解できる。					
4	Unit 4 後半 : 疑問詞の応用				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。whichを使った疑問文を理解し、作文できる。					
5	Unit 7 前半 : 症状を説明する語彙と長文内容把握				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。症状を表す語を英語で理解できる。					
6	Unit 7 後半 : 動名詞についての文法問題演習				段落ごとのテーマを意識して一定量の英語の文章を読み、理解できる。辞書を活用できる。動名詞を使った文を理解できる。					
7	試験									
8	試験返却と解説と本学期の学習のまとめ				試験のポイントを理解し、自身の英語学習に生かすことができる。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	医療と看護の総合英語(三訂版)				笹島 茂(著) 山崎 朝子(著)		三修社			
参考図書等										
成績評価方法	1. 授業参加度(20%) 2. 宿題等(10%) 3. 定期試験(70%)				履修上の注意		・教室内で行うリーディングを中心とした言語活動に積極的に取り組んでください。 ・何らかの英和辞書(冊子か電子辞書あるいはスマホのアプリ)を毎回持参して下さい。			
					実務経験紹介					

科目 区分	基礎	履修形態	必修	科目名	英語Ⅲ(英会話)					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	尊田 望 (Sonda,Nozomu)						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 初級上から中級の下程度の学習者(英検準2級前後、TOEIC400点前後)を対象とし、中級の下から中程度のレベルを目標とする(英検2級程度、TOEIC 500点程度)。中学校程度の英語を復習しながら、様々な状況における実用的な英語会話能力を養成する。正確な発音や文法よりも、コミュニケーション能力の養成を重視する。読む・書く作業も若干含む。					【到達目標】 基本的な自己紹介ができる。日常的なトピックについて簡単な会話ができる。社会的な事柄や問題について自分の意見を簡単な英語で述べることができる。					
授業の主な要素 * Warm-up * Conversation * Vocaburary exercise * Grammar and drill exercise * Graded Readers * Communication game / exercise on a given topic * Summary										
回数	項目			内容				宿題		
1	Getting acquainted & Family 自己紹介・家族			会話演習・語彙ゲーム・Mind game or 家系図				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Travel)		
2	Travel Abroad 海外旅行			会話演習・語彙ゲーム・国名クロスワード・国旗				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Food)		
3	Food & Eating 食べ物と食べること			会話演習・語彙ゲーム・Restaurant game & placing orders				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Movies,TV & Music)		
4	Movies & Music 映画と音楽			会話演習・語彙ゲーム・movie viewing & listening exercise				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Love & Romance)		
5	Love & marriage 恋愛と結婚			会話演習・語彙ゲーム・Romance score game				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Japanese Culture & Geography)		
6	Culture & places in Japan 日本の文化と地理			会話演習・語彙ゲーム・Japanese story game				語彙リスト・Graded Reader 感想・英文エッセイ(Global Coomunity)		
7	Global Community 国際社会			会話演習・語彙ゲーム・“Where is Matt san?” & global community building				試験の準備		
8	Final Exam 期末試験			英語会話						
教科書 参考 図書等	書籍名			著者			出版社			
	English Four Skills and Three Pillars of Meaning, Fluency and Accuracy Second Edition			Nozomu Sonda			One World International			
成績評価 方法	●授業内演習=20% ●宿題=20% ●プレゼンテーション=20% ●期末試験=40%				履修上の 注意	欠席の場合は教官に相談して下さい。 辞書を持参すること。				
					実務経験 紹介					

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	体育実技					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	前期	授業形態	実技
担当	兼行 剛士						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 新体力テストの中から室内で実施できる6種目を測定することで個々の運動能力を知り、その後の活動の中で改善と向上を図る。球技(ソフトタッチバレーボール)やパラスポーツを協力しながら行い、「するスポーツ」の楽しさを体感しながら体力の向上と相互理解を深める。「支えるスポーツ」の視点から、リハビリテーションとの関りが強く、またアスレティックトレーナーの分野でもあるストレッチ・各種トレーニング・テーピング等の基本的な実践方法を修得する。					【到達目標】 ・個々の運動能力の現状を知り、実践の中でその改善と向上を図る。 ・他者と協力しながら、個々の運動能力に応じて「するスポーツ」の楽しさを体感し、体力の向上を図り相互理解を深める。 ・「支えるスポーツ」の視点からストレッチ・各種トレーニング・テーピング等の実践方法を修得する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション 新体力テスト「反復横跳び 握力 長座位前屈 立ち幅跳び 上体起こし					体育実技のねらいと内容を理解する 正しい測定方法で正確に測定を行う				
2	20mシャトルラン 測定結果の集計・評価 球技(ソフトタッチバレーボール)					測定の結果を集計・評価し今後の活動に活かす 他者と協力し安全に球技を楽しむ				
3	コーディネーショントレーニング① 球技(ソフトタッチバレーボール)					動きの調整力を高める運動を、その目的を理解しながら体験する				
4	ポッチャ 球技(ソフトタッチバレーボール)					手軽にできるパラスポーツを体験しその楽しさと実施方法を知る				
5	ストレッチポールによるストレッチ 球技(ソフトタッチバレーボール)					用具を使用した柔軟運動のやり方を体験し理解する				
6	チューブトレーニング 球技(ソフトタッチバレーボール)					用具を使用した筋力トレーニングのやり方を体験し理解する				
7	コーディネーショントレーニング② 球技(ソフトタッチバレーボール)					動きの調整力を高める運動を、その目的を理解しながら体験する				
8	ゴールボール 球技(ソフトタッチバレーボール)					手軽にできるパラスポーツを体験しその楽しさと実施方法を知る				
9	スポーツマッサージ 球技(ソフトタッチバレーボール)					マッサージの基本的なやり方を体験・習得する				
10	コアトレーニング・ピラティス 球技(ソフトタッチバレーボール)					体幹トレーニングの効果を理解し、基本的な動きを体験・習得する				
11	テーピング① 球技(ソフトタッチバレーボール)					テーピングの効果を理解し基本的なやり方を体験・習得する				
12	テーピング② 球技(ソフトタッチバレーボール)					テーピングの効果を理解し基本的なやり方を体験・習得する				
13	球技実技 (多種目:学生企画)					集団スポーツに参加し楽しむことで、スポーツ活動の資質や能力を育てることに興味を持つ。				
14	球技実技 (多種目:学生企画)					集団スポーツに参加し楽しむことで、スポーツ活動の資質や能力を育てることに興味を持つ。				
15	球技実技 (多種目:学生企画)					集団スポーツに参加し楽しむことで、スポーツ活動の資質や能力を育てることに興味を持つ。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	特になし									
参考図書等										
成績評価方法	出席状況 授業への興味・関心・意欲・態度 安全への配慮 協力の姿勢					履修上の注意	運動のできる服装と体育館シューズで参加すること ピアス・ネックレス等は安全上禁止する 爪の長さに配慮すること 水分補給の用意			
						実務経験紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	体育理論					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	杉浦 崇夫						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 本講義では、健康の保持増進のための身体運動の意義を理解するとともに、健康の保持増進のために運動を実践する際に必要な基本的考え方ならびに具体的方法について理解修得することを目的とする。					【到達目標】 1.身体運動時のからだの変化を説明できる。 2.健康の保持増進を目的とした身体運動の効果について説明できる。 3.健康の保持増進を目的とした身体運動を実践するための具体的方策を立案できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	ガイダンス					運動の功罪について、トレーニングがからだに及ぼす変化についてプラス/マイナス両方の影響について理解する。				
2	身体運動時のエネルギー産生					ATPの再合成経路である ATP-CP系、乳酸系、有酸素系の特性ならびに運動との関連について理解する。				
3	呼吸器系と運動					運動時の呼吸器系の変化とトレーニングによる変化について理解する。				
4	循環器系と運動					運動時の循環器系の変化とトレーニングによる変化について理解する。				
5	骨格筋の基本的構造 筋線維タイプの特性と運動					骨格筋の基本的構造、筋線維タイプの特性ならびにトレーニングによってどのように変化するかを理解する。				
6	発揮張力に及ぼす要因ならびに収縮様式と筋力					筋の収縮力に及ぼす生理学的メカニズム、筋の収縮様式ならびにその特性について理解する。				
7	筋萎縮と筋肥大					筋萎縮と筋肥大のメカニズムさらに萎縮の予防策について理解する。				
8	運動時のエネルギー基質					運動時の栄養素についての知識を修得し、 持続的パフォーマンスを高めるためのスポーツ飲料の組成について				
9	エネルギー消費の算出法					RMRとMETsを理解し、エネルギー消費量を算出することができる。				
10	肥満と運動					生活習慣病としての肥満の成因ならびにその予防策について理解する。				
11	骨粗鬆症と運動					生活習慣病としての骨粗鬆症の成因とその予防策について理解する。				
12	動脈硬化と運動					生活習慣病としての動脈硬化の成因とその予防策について理解する。				
13	糖尿病と運動					生活習慣病としての糖尿病の成因とその予防策について理解する。				
14	運動処方(有酸素運動)					健康保持のための有酸素運動の必要性和実施の具体について理解する。				
15	運動処方(無酸素運動)					健康保持のための筋力トレーニングの必要性を理解し実施の具体について理解する。				
16	まとめ									
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	現代栄養科学シリーズ18「運動生理学」					池上 晴夫(著)		朝倉書店		
成績評価 方法	期末試験と授業態度で評価する。					履修上の 注意	欠席が4回以上の者には単位を与えない。			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	哲学Ⅰ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	村瀬 ひろみ						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 近年、科学技術の発展とともに、医療をめぐる技術にも大きな変化がある。また、疾病の構造が変化し、従来の「おまかせ医療」では通用しなくなった。そのような激動の医療現場では、さまざまな利害が衝突し、また、価値を伴う判断を迫られることになる。そのような場合に、判断の根拠となるものが「倫理」である。本講では、生命や医療にまつわる生命倫理学の立場から、さまざまな医療環境における問題を考える力を養う。					【到達目標】 ・医療の歴史が大枠で理解できる。 ・人権、患者の権利について、歴史的な視点から理解できる。 ・生命倫理学の誕生について、理解できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	バイオシックスのあらまし、オリエンテーション (受講上の注意とルール、何を何のために学ぶか)					倫理学とはなにか、今後どのような意識をもって臨めばよいかを理解する				
2	疾患構造の変化とパターンリズム					従来の医療のあり方についてどのようなものかを知り、批判的な検討ができる				
3	患者の権利の誕生 (人権と患者の権利)					患者の人権がどのように誕生し、それをどのように守るかについて、制度やしきみが理解できる				
4	人体実験と生命倫理学 (第2次世界大戦と、医療)					第二次世界大戦における医療の負の歴史について学び、医療者としての責任責務について、十分に理解する				
5	高度先端医療と生命倫理					20世紀以降、高度先端医療が発展したことの功罪について、検討し理解する				
6	コ・メディカルと医療倫理					チーム医療について学び、その重要性について理解できる				
7	総括					今までのまとめをするとともに、疑問点やポイントについて理解し、説明できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	プリントを配布します。									
参考 図書等	医療倫理学の方法 原則・ナラティブ・手順					宮坂道夫		医学書院		
成績評価 方法	定期試験					履修上の 注意	講義形式ではあるが、積極的な参加を求めます。講義を受けるときの注意事項は第一回で詳述するので、理解して講義に臨むようにしてください。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	基礎	履修形態	必修	科目名	哲学Ⅱ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	村瀬 ひろみ						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 哲学Ⅰに引き続き、医療をめぐる倫理的な問題について哲学、倫理学の視点から考える。Ⅰでは主に総論的な視点を学習したが、このⅡでは、実際に医療現場で起こっていることをひとつずつ検証しながら、話を進めていく。生、性、死に関する具体的な倫理学を通して、職業倫理についての基本的要素を養う。					【到達目標】 ・生命誕生における生命倫理学的問題について、理解できる。 ・先端技術の推進派、否定派、様々な立場を理解する。 ・死について、考えることができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	生と性をめぐる生命倫理学・・・人工妊娠中絶 (日本の中絶をめぐる制度と法律、優生学)					前期の総論を踏まえて、生殖に関する制度法律の歴史を学び、理解する				
2	生と性をめぐる生命倫理学・・・人工妊娠中絶2 (キリスト教世界における中絶と、世界)					人工妊娠中絶について世界の動向や、考え方が理解できる				
3	生と性をめぐる生命倫理学・・・出生前診断					優生学という考え方を批判的に検討し、出生前診断などの技術を理解できる				
4	生と性をめぐる生命倫理学・・・高度生殖医療 (高度生殖医療の種類と実際)					高度生殖医療における倫理について理解できる				
5	生と性をめぐる生命倫理学・・・高度生殖医療2 (代理母、代理出産の現状と未来)					高度生殖医療をめぐる問題点について、子どもの権利とともに理解できる				
6	高度生殖医療についてのビデオ視聴					実態を理解し、患者やその家族の心情や苦しみに寄り添うことができる				
7	生命倫理学まとめ					生命倫理学の今日的な課題について、積極的に情報集める能力を身につける				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	プリントを配布します。									
	医療倫理学の方法 原則・ナラティブ・手順					宮坂道夫		医学書院		
成績評価 方法	定期試験					履修上の 注意	講義形式ではあるが、引き続き積極的な参加を求めます。質問シートの活用をしてください。			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	心理学 I					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	恒吉 徹三						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人のこころを理解する基礎的な視点について学ぶことを目的とする。特に、個人差や社会への適応とかかわる領域を取り扱う。その際、身近な題材も講義の中に取り入れることで、心理学を身近なものとして理解し、臨床現場での対象者の理解に生かせるように学んでいきます。					【到達目標】 ・心理学の基礎的な概念や理論について理解し説明ができる。 ・心理学の中でも特に個人差のかかわる領域に関する概念やその研究方法について理解し説明ができる。 ・臨場的な場や日常的なことに関連付けて心理学的な概念を理解し説明できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	心理学とは（心理学の特徴、歴史、データの収集方法）：レポート①					心理学の歴史の概要、初期の主要3学派の特徴、基本的な研究方法について理解し説明できる				
2	心の発達① （アタッチメント理論を中心に）					発達の基本的な捉え方、乳児の研究手法、アタッチメントの基本概念と研究方法、個別スタイルの特徴、共同注意、心の理論について理解し説明できる				
3	心の発達② （エリクソンの理論を中心に）：レポート②					エリクソンの個体発達分化の図式（漸成的発達論）について各段階の特徴を理解し説明できる				
4	動機づけ （動機づけの種類とその意味づけ）					動機づけの概念、行動との関連、動機づけと葛藤について理解し説明できる（マズローの欲求階層説、自己決定論も含む）				
5	感情の理論、パーソナリティ理論 （特性論と因子論およびいくつかのパーソナリティ理論）					・感情の生起メカニズムやその理論、及びパーソナリティ理論とそ分類について理解し説明できる（特性論と因子論、ビッグファイブを含む）				
6	知能 （古典的理論と現代的理論）：レポート③					知能の理論と知能の発達段階における特徴について理解し説明できる（ピアジェの発生的認識論、多重知能理論含む）				
7	ストレスとメンタルヘルスケア （基本モデルといくつかの理論的立場からの説明）					ストレスの基本的な概念と援助理論の基本的な理論について理解し説明できる（ストレスの発生メカニズム、防衛機制を含む）				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	はじめて出会う心理学(第3版)					長谷川寿一・東條正城・大島尚 他著		有斐閣アルマ		
参考 図書等	アイデンティティの心理学*					鑑幹 八郎		講談社現代新書		
	*関心に応じて読んでください。									
成績評価 方法	1. 授業内レポート(30%) 2. 試験(70%)					履修上の 注意	授業内レポートを3回実施します。これは、授業で学んだ内容を、自分がどの程度説明できるかを確認するための振り返りレポートです。 (平常点:30点=10点×3回)			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	心理学Ⅱ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	小野 史典						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の心の働きを科学的な視点から概観する。特に人間の知覚的および認知的側面に焦点を当て、我々の生活場面における心的メカニズムを論考する。					【到達目標】 心理学の基礎的な知識と共に、日常生活における様々な心的営みに対して科学的な観点から考察する能力を修得することが目的。					
回数	授業内容					学習目標				
1	効果の確かさ					心理学における心の働きの解明する代表的な研究法について理解する				
2	知覚					人間の知覚における基本的な仕組みを理解する				
3	認知					人間の認知に関する代表的な研究とその知見について理解する				
4	発達					人間の発達に伴う認知の変化について理解する				
5	学習					心理学における学習の基礎とその考え方について理解する				
6	記憶					心理学における記憶の考え方と代表的な知見について理解する				
7	動機					動機づけに関する基本的な考え方とそのメカニズムについて理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	テキストは用いず、講義資料に基づいて授業を行う。									
	講義中に紹介する。									
成績評価 方法	1. 試験(50%) 2. 出席(50%)				履修上の 注意	自分なりの講義ノートを作成し、それを試験に活用されたい。				
					実務経験 紹介					

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	法学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	小林 友則						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 いかなる仕事においても、また私生活においても、意識するか否かを問わず、法と無関係でいられることはない。そこで法学では、法が社会をどのように規律しているかを学ぶ。 授業では生活・仕事において関わる可能性が高い法制度を素材として、いかなる趣旨の下、どのような規範が定められているかを学ぶとともに、法による規律の結果がどうなるかを考える。					【到達目標】 ・法システムがどのような形で社会を規律しているかを理解する。 ・法システムによる規律の結果がどうなるかを考えられるようになる。 ・生活・仕事において関わる可能性が高い法制度の内容を理解する					
回数	授業内容					学習目標				
1	試験					法がどのような形で社会を規律しているかを理解する 法規範の使い方を理解する				
2	法システム内の法律や権利					法システムがどのような法律や権利を内包しているか理解する				
3	契約制度					社会において人と人々が相互の関係を自律的に構築していくための法制度を理解する				
4	代理制度					他人を通じて関係性を構築するための法制度を理解する				
5	瑕疵ある意思表示を規律する制度					望む形とは異なる契約が締結された場合にどのような規律がなされるかを理解する				
6	著作物および個人情報の保護					著作権法および個人情報保護法が社会をどのように規律しているか理解する				
7	不法行為制度					法的な権利・義務関係を時間の経過をもって変更する法制度を理解する				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	18歳からはじめる民法〔第5版〕					潮見佳男 他編著		法律文化社		
参考図書等	適宜紹介									
成績評価方法	期末試験の結果で評価する					履修上の注意	2024年度は前期に開講いたします。			
						実務経験紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	教育学Ⅰ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	佐々木 司						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 教育の原理的な面を、教育の意義、人間の発達と教育、学校教育の課題などから広範に理解することにより、教育学の基礎を身につける。					【到達目標】 ・医療・福祉・保健分野における教育の意義を理解する。 ・人間の発達と可能性に及ぼす教育の影響について理解する。 ・学校教育の課題や制度的変容を理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	講義についての説明、アイスブレイキングの技法…講義、グループワーク					授業概要、授業における到達目標、授業計画全体を俯瞰したうえで、個別の授業の意味や意図を知ろうとする見方を身につける。				
2	新しい教育課題…講義					変化の激しい時代において、何が現代的な教育課題として生まれ、それに対してどのような改善策、改革案が考えられているのかを知る。				
3	人間の発達と教育…講義、グループワーク					人間の成長・発達とは他の動物とどのように違っているのか、人の成長・発達を支援するとはどのようなことなのかを理解する。				
4	教育推進の基本的方向…講義					医療・福祉・保健分野における教育の意義、求められている方向性、注意すべき諸点について学ぶ。				
5	学校という制度…講義					学校という馴染みのある教育機関について相対化して捉え直すことで、教育の意味や意義、学校の利点と問題点などを考察する。				
6	社会教育のしくみと課題…講義					地域社会で行われている教育、学校と社会との連携・融合について学ぶ。コミュニティ・スクールなど、地域の教育力を活かした取り組みについても理解する。				
7	進路指導と生徒指導…講義、グループワーク					学校の教師が行っている進路指導・生徒指導を、医療関係者に応用しながら、ものの見方、考え方を高める。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	やさしく学ぶ教育の原理					佐々木 司・熊井将太 編著		ミネルヴァ書房		
	適宜紹介									
成績評価 方法	1. 提出課題(30%) 2. 試験(70%)					履修上の 注意	・毎回、ノートをしっかりと取り、その日のうちに復習すること。			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	教育学Ⅱ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	佐々木 司						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 教育の方法や技能の基礎・基本を、医療現場で働く者にも求められる重要なスキルとして捉え、教育の方法や各種技能を身につける。					【到達目標】 ・医療・福祉・保健分野に応用可能な教育方法の本質と技法を理解する。 ・指導案の作成過程を通して、他者に学習を促す際の要点を理解する。 ・模擬授業を行うことによって、授業者としての課題と改善点を知る。					
回数	授業内容					学習目標				
1	授業についての説明、「教育の方法」を学ぶための心構えと具体的方法・・・講義					医療分野への応用を意識しながら、教育の分野ではどのような教授方法、学習支援方法等が用いられているのかについて、基礎的事項を習得する。				
2	教師の職務と責任・・・講義、グループワーク					教師の職務と責任を理解するとともに、それを医療分野に応用するために、どのような見方、考え方をすればよいのか。また、他者から学習意欲や肯定的な反応を引き出すにはどうすればよいのかを学ぶ。				
3	教育方法の基礎・・・講義					教育には、いくつもの方法、技術が埋め込まれている。そして、それら教育方法は、時代とともに変容してきた。教育の方法には、いかなるものがあるのか、それらは何を意図しているのかについて理解する。				
4	授業の構成要素と発問の組織化・・・講義					これまで学校において数多く受けてきた「授業」を、時間、流れ、構成要素、教師の行為等の面から分析・考察することにより、ものごとの内面、背景、意図を実感できるようになる。				
5	指導案の作成・・・講義、グループワーク					授業の計画書である指導案を作成する過程において、授業を行う者（教師）は何に配慮して授業を計画しているのか、また、それを踏まえて、授業を受ける側（生徒）は、どのような態度で授業に参画すればよいかを学ぶ。				
6	「模擬授業」をやってみる・・・グループワーク					「模擬授業」を実際に行ってみることで、教えること、思考をゆさぶることのおもしろさと難しさを体験する。できるだけ指導案を見ずに授業を行うことで、自分のものにしようとして授業を行うことを体験する。				
7	まとめと省察・・・グループワーク					行った「模擬授業」と、そのための準備として計画作成した自身の指導案を見つめ直す。また、他者が行った授業と比較して、どのような改善を加えれば、他者を学び、成長へと向けられるのかを考察する。				
教科書	書籍名					著者				
	やさしく学ぶ教育の原理					佐々木 司・熊井将太 編著				
						出版社				
参考図書等	適宜紹介									
成績評価方法	1. 提出課題(30%) 2. 試験(70%)					履修上の注意	・毎回、ノートをしっかりと取り、その日のうちに復習すること。			
						実務経験紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	生物学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	山本 芳実						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 生物学は20世紀後半に非常に大きな展開を見せ、今世紀は生命科学・生物科学の時代といわれるまでになった。食料・医療・環境などをめぐる様々な諸問題を理解し、対処するためには、生物学の基礎知識が必要である。生命誕生以来現在まで絶えることなく続く生物の世界の成り立ちと生命活動を支える精妙な仕組みについて、基本的な事柄を中心に解説し、現代生物学の考え方や基礎知識を習得できるようにする。					【到達目標】 ・現代生物学の概要を理解する。・専門教育に必須な生物学の基礎知識を習得する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	細胞：細胞の構造と機能					細胞の構造と機能について理解する。				
2	代謝とエネルギー代謝					異化と同化、生体におけるエネルギーの流れを理解する。				
3	細胞分裂と生命の連続性					体細胞分裂のメカニズムと多細胞生物の形成について理解する。				
4	減数分裂と遺伝					減数分裂と遺伝のメカニズムを理解する。				
5	遺伝と遺伝子					多様な遺伝現象と遺伝子の役割を理解する。				
6	DNAと遺伝子					二重らせん構造とDNA複製機構を理解する。				
7	タンパク質1					生体物質としてのタンパク質の構造と機能を理解する。				
8	タンパク質2					セントラルドグマ：細胞でタンパク質がつくられるメカニズムを理解する。				
9	組換えDNA技術からゲノム編集まで					人工的にタンパク質をつくる、また細胞を改変する技術を理解する。				
10	ゲノムとは					ゲノムプロジェクトとは何か、また新しいゲノム観を理解する。				
11	発生と分化1					多様な受精と発生現象を理解する。				
12	発生と分化2					発生のしくみを理解する。				
13	進化と系統分類学					種概念、進化の実態を理解する。				
14	進化論					ダーウィン進化論と中立説について理解する。				
15	ヒトの進化					ヒトを進化の産物として理解する。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	特に定めない。 (興味があれば、参考図書を一冊選択して下さい。)									
参考 図書等	サイエンスビュー生物総合資料					長野 敬(著) 牛木 辰男(著)		実教出版		
	系統看護学講座 基礎分野 生物学					高畑 雅一 増田隆一 北田一博		医学書院		
成績評価 方法	1. 授業態度(10%) 2. レポート(20%) 3. 確認テスト(70%)					履修上の 注意	高校までの生物学及び化学について復習しておくこと。			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	統計学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	内野 英治						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 看護・福祉・医療の分野においては、データを統計的に解析する場合が非常に多い。本科目では、講義と演習を交互に行い、実際の現場で統計学をすぐに活用できる力を身につけることを目的とする。本科目では、統計学を学習するのに必要な基礎知識と統計学の入り口を学習する。					【到達目標】 統計の基礎用語の概念が説明できる。確率変数、確率密度関数について説明できる。確率分布の意味がわかる。分布表を活用できる。点推定の計算ができる。区間推定の計算ができる。簡単な検定ができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	統計の話、統計の基礎用語 (平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差) 演習					統計の基本用語を理解し、それらがどのような量であるかの説明ができる。				
2	確率の基礎 (事象、確率変数、確率密度関数) 演習					統計学は確率論に基盤を置いているため、統計学を理解するために必要最低限な確率の基礎を理解する。				
3	確率分布 (正規分布、t分布、X2分布、分布表) 演習					様々な確率分布が存在することを理解すると共に、それらの確率分布表が読めるようになる。				
4	点推定、区間推定 演習					サンプルから全体集団(母集団)の平均値や分散の推定ができ、また母集団の平均値の範囲が推定できる。				
5	検定 (帰無仮説、対立仮説、有意水準、平均値の検定) 演習					検定の基本概念である帰無仮説、対立仮説が説明でき、また、有意水準の概念および両側検定、片側検定を理解し、平均値の検定ができる。				
6	検定 (平均値の差の検定) 演習					二つの異なる集団間の平均値に差があるかどうかの検定ができる。				
7	検定 (適合度の検定) 演習					ある現象が正しい確率で生起しているかの検定(適合度の検定)ができる。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	統計データ解析					小野瀬 宏(著)		内田老鶴園		
	PT・OTのための統計学入門					渡邊 宗孝 他		三輪書店		
参考 図書等										
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意	特になし。			
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	情報科学 I					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	富田 公治						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 コンピュータ初心者を想定したパソコン入門編。おもにワープロソフト(Word)と表計算ソフト(Excel)の実習を行う。					【到達目標】 ・ファイルやフォルダ(ディレクトリ)の概念を理解し、管理できる。 ・Wordを用いた文書の作成ができる。 ・Excelの基本的機能(書式設定、基本関数、グラフ)を使うことができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	Windowsの操作					ファイルやフォルダ(ディレクトリ)の概念を理解し、管理できる。				
2	Word(文書・表)・課題					Wordで文書や表を作成する。				
3	Word(画像・図・数式)・課題					Word文書に画像・図・数式を挿入する。				
4	Excel(入力)					Excelのワークシートにデータを入力する。				
5	Excel(関数・書式)・課題					Excelで関数と書式設定を使用して表を作成する。				
6	Excel(参照・関数)・課題					表計算ソフトの相対参照と絶対参照を理解する。 基本的な関数を使用する。				
7	Word・Excel課題					WordとExcel課題に関する課題				
8	課題提出					課題の遂行と提出				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	30時間でアカデミック Office2021					杉本くみ子、大澤栄子		実務出版		
成績評価 方法	毎回の授業態度、出席、課題により総合的に評価する。 1. 授業態度、出席(30%) 2. 課題(70%)					履修上の 注意	・USBメモリが必要だが、初回の授業では持参しなくてもよい。			
						実務経験 紹介				

1 年 次

専 門 基 礎 科 目

- ◇解剖生理学Ⅰ
- ◇解剖生理学Ⅱ
- ◇解剖生理学Ⅲ
- ◇解剖生理学Ⅳ
- ◇医学概論
- ◇病理学
- ◇聴覚医学概論
- ◇臨床心理学
- ◇言語学
- ◇音声学
- ◇言語発達学Ⅰ
- ◇言語発達学Ⅱ
- ◇社会福祉学
- ◇リハビリテーション概論

言語聴覚学科

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	解剖生理学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	村瀬 ひろみ						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の基本的な体の仕組みを学問する「解剖学・生理学」を1年間で学習していく。解剖学・生理学を学習することで今後学んでいく疾病障害についての考え方の基礎をしっかりと構築する。					【到達目標】 ・人間を構成している細胞や組織の仕組みを正しく理解する。 ・身体の機能を維持している筋肉・神経・各臓器に働きを理解する。 ・各器官のお互いの関係を学習し、最終的には統合的に体の仕組みを理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	基礎知識 その1 形からみた人体					人体を指し示す専門用語、ミクロからマクロまでの概観について理解する				
2	基礎知識 その2 生体の構造と細胞生理					細胞の構造と機能について理解、生体を構成する分子について理解する				
3	消化と吸収の概要					消化器について概要を理解する				
4	口腔内の解剖と機能 嚥下					口腔～咽頭～食道までの構造と機能について理解				
5	胃での消化と吸収					胃の構造を理解し、胃の様々な機能について説明できる				
6	腸での消化と吸収					腸での消化、主に肝臓、膵臓の役割とともに理解し、三大栄養素について消化吸収の説明ができる				
7	消化のまとめ 消化器官と神経支配					消化器について、内分泌、自律神経系の作用をまとめて理解できる				
8	中間試験					簡単な小テスト(理解度テスト)				
9	呼吸器系の構造					呼吸器の概観がわかる				
10	呼吸の生理					呼吸運動の生理がわかる				
11	呼吸運動の調整と病態					呼吸運動と呼吸調節についての生理が理解できる				
12	循環器系の構造 血管循環と心臓					循環器の構造がわかる				
13	心臓の構造と心臓の刺激伝導系					心臓の構造と名称、役割が理解でき、説明できる				
14	心臓の神経支配と心電図					心臓の構造と心電図の意味がわかる				
15	心臓の機能障害 心拍、心音 他					心拍、心音等について、生理学的意義とともに理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	系統看護学講座 解剖生理学 人体の構造と機能①					坂井 建雄 著者代表		医学書院		
参考図書等	ねじ子とパン太郎のモニター心電図					大上丈彦、森皆ねじ子		インプレス		
	ナーシング・グラフィカ 解剖生理学					武田裕子編		メディカ出版		
成績評価方法	1. 授業態度 2. 中間試験及び期末試験					履修上の注意	資料は配るが、自分自身でノートを必ずつくること。資料はそのための補助にすぎないので、まとめは自分です。			
						実務経験紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	解剖生理学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	村瀬 ひろみ						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の基本的な体の仕組みを学問する「解剖学・生理学」を1年間で学習していく。解剖学・生理学を学習することで今後学んでいく疾病障害についての考え方の基礎をしっかりと構築する。					【到達目標】 ・人間を構成している細胞や組織の仕組みを正しく理解する。 ・身体の機能を維持している筋肉・神経・各臓器に働きを理解する。 ・各器官のお互いの関係を学習し、最終的には統合的に体の仕組みを理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	全身の血管の概略と血圧					全身の動静脈がわかる。血圧のしくみについて理解する				
2	血液の循環 血圧のつづき					血圧について説明できる				
3	血液の働きと血液成分1 赤血球、白血球 他					血液の指標についてそれぞれを理解し、説明できる				
4	血液の働きと血液成分2 血小板と血液凝固					血液凝固について理解し、説明できる				
5	泌尿器系の概観					泌尿器系の役割と解剖について大まかに理解できる				
6	腎臓の構造と働き					尿生成のしくみについて理解できる				
7	尿の生成と体液量のコントロール					血圧との関連を理解し、説明できる				
8	中間試験									
9	生化学概論					三大栄養素のATP合成				
10	糖代謝、タンパク質代謝、脂質代謝					体内で吸収したものがどのように変換されているか理解				
11	栄養学 タンパク質とアミノ酸					必須アミノ酸と生成物について理解する				
12	栄養学 脂質と必須脂肪酸					体内での脂質の動態について理解する				
13	栄養学 ビタミン					脂溶性ビタミン、水溶性ビタミンの種類と役割について理解する				
14	栄養学 ミネラル					ミネラル欠乏症と過剰症。疾患とのかかわりを理解する				
15	栄養学まとめ					栄養に関する医療者として必要な知識をまとめる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	系統看護学講座 解剖生理学 人体の構造と機能①					坂井 建雄 著者代表		医学書院		
成績評価 方法	1. 授業態度 2. 中間試験及び期末試験					履修上の 注意	資料は配るが、自分自身でノートを必ずつくること。資料はそのための補助にすぎないので、まとめは自分です。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	解剖生理学Ⅲ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	児玉 順子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の基本的な体の仕組みを学問とする「解剖学・生理学」を1年間で学習していく。 解剖学・生理学を学習することで今後学んでいく疾病や障害についての考え方の基礎をしっかりと構築する。					【到達目標】 ・人間を構成している細胞や組織の仕組みを正しく理解する。 ・身体の機能を維持している筋肉・神経・各臓器の働きを理解する。 ・各器官のお互いの関係を学習し、最終的には統合的に体の仕組みを理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	骨と骨格および関節				骨の解剖学的、組織学的構造について知る 骨の連結(関節)の構造とその障害について学ぶ					
2	体幹の骨格と筋				体幹(椎柱、胸郭)の骨格の解剖学的構造を覚える 背部の筋、胸部の筋、腹部の筋について学ぶ					
3	上肢の骨格と筋				上腕(上肢帯、上腕、前腕、手)の骨格の解剖学的構造を覚える 上肢帯、上腕、前腕の筋群について学ぶ					
4	下肢の骨格と筋				下肢(下肢帯、大腿、下腿、足)の骨格の解剖学的構造を覚える 下肢帯、大腿、下腿の筋群について学ぶ					
5	頭頸部の骨格と筋				頭蓋骨、下顎骨の骨格の解剖学的構造を覚える 頭部、顔面関節及び頸部の筋について学ぶ					
6	上肢の運動、下肢の運動、体幹の運動				肩関節及び肘関節、股関節及び膝関節、呼吸筋の運動について総合的に学ぶ					
7	骨格筋と筋の収縮について				骨格筋の収縮機構について骨格筋収縮の種類と特性について学ぶ					
8	中間試験				1-7回目までの授業範囲について中間試験を行う					
9	神経系と構造と機能				ニューロンの特徴、興奮の伝導と伝達の仕組みについて学ぶ					
10	脊髄と脳と神経				中枢神経の構造(大脳、小脳、脳室等)についてその解剖学的特徴と機能を学ぶ					
11	脊髄と脳と神経				脊髄及び末梢神経(脊髄神経、脳神経)についてその解剖学的特徴と機能を学ぶ					
12	運動神経と下行伝導路・感覚神経と上行伝導路				運動ニューロンの特徴、感覚神経の特徴また脊髄内での伝達について理解する					
13	感覚器(眼)				眼球の解剖学的構造について理解する 視覚についてそのメカニズムを学ぶ					
14	感覚器(耳・嗅覚・味覚)				耳の解剖学的構造について理解する 聴覚および平衡感覚についてについてそのメカニズムを学ぶ 味覚や嗅覚を知る					
15	痛みのメカニズム				痛みの分類、疼痛の発生機序について理解する					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	系統看護学講座 解剖生理学 人体の構造と機能①				坂井 建雄 著者代表		医学書院			
参考図書等	生理学テキスト 第7版				大地 陸男		文光堂			
	カラースケッチ生理学Ⅱ				永田 豊 監訳		廣川書店			
	ギャング生理学				岡田 泰伸 監訳		丸善書店			
成績評価方法	1. 中間試験及び期末試験にて平均60%以上の得点を獲得したものを合格とする。 2. 自宅学習のための課題を数回提示する。およそ5~10%の点数加算とする。				履修上の注意		・授業は板書を用いての学習となる。授業では口頭で説明する内容を理解し、授業後の復習に板書を書き写したノートと教科書を用いて、理解を深める努力をすること。			
					実務経験紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	解剖生理学Ⅳ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	児玉 順子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の基本的な体の仕組みを学問とする「解剖学・生理学」を1年間で学習していく。 解剖学・生理学を学習することで今後学んでいく疾病や障害についての考え方の基礎をしっかりと構築する。					【到達目標】 ・人間を構成している細胞や組織の仕組みを正しく理解する。 ・身体の機能を維持している筋肉・神経・各臓器の働きを理解する。 ・各器官のお互いの関係を学習し、最終的には統合的に体の仕組みを理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	脳の統合機能				脳の活動と記憶のメカニズムについて学ぶ。本能行動と情動行動の違いを理解する。中枢神経の障害について知る					
2	皮膚の構造と機能				皮膚の構造とその付属品について覚える。皮膚の機能について理解する					
3	生体の防御機能				非特異的防御機構について理解する					
4	免疫による特異的防御機構				免疫について学習する。免疫を用いた様々な医療行為について知る。関連臓器を覚える					
5	体温とその調節				体温調節のメカニズムについて学ぶ。発熱について理解する					
6	自律神経による調節				内臓機能の調節を行う自律神経の働きを理解する					
7	内分泌による調整				内分泌組織とホルモンについて概要を理解する。視床下部の役割を知る					
8	中間試験				1回目から7回目までの範囲で中間試験を行う					
9	全身の内分泌腺と内分泌細胞1				実際のホルモンの働きを理解する(下垂体・甲状腺・副腎)					
10	全身の内分泌腺と内分泌細胞2				実際のホルモンの働きを理解する(膵臓・性腺・その他のホルモン)					
11	ホルモンによる調節の実際				糖代謝、カルシウム代謝、ストレスとの関係などを総合的に理解する					
12	男性生殖器				男性生殖器の解剖と生殖機能について理解する					
13	女性生殖器				女性生殖器の解剖と生殖機能。ホルモン調節による性周期について理解する					
14	受精と胎児の発生				授精卵の発生から胎児の成長について学習する。母体側の変化についても知る。分娩時の特徴についても学ぶ					
15	成長と老化				小児期の成長の特徴と、老化現象について理解する					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	系統看護学講座 解剖生理学 人体の構造と機能①				坂井 建雄 著者代表		医学書院			
参考図書等	生理学テキスト 第7版				大地 陸男		文光堂			
	カラススケッチ生理学Ⅱ				永田 豊 監訳		廣川書店			
	ギャノン生理学				岡田 泰伸 監訳		丸善書店			
成績評価方法	1. 中間試験及び期末試験にて平均60%以上の得点を獲得したものを合格とする。 2. 自宅学習のための課題を数回提示する。およそ5～10%の点数加算とする。				履修上の注意		・授業は板書を用いての学習となる。授業では口頭で説明する内容を理解し、授業後の復習に板書を書き写したノートと教科書を用いて、理解を深める努力をすること。			
					実務経験紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	医学概論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	非常勤講師(百溪 江、西本 新)、小林 誠						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 医療を実践する上で、重要な概念である、コミュニケーション、他職種連携、レポートの記載、倫理観などの基本について概説する。倫理観については、単に日本国内にとどまらず、国際的な視野に立った倫理観について学説する。					【到達目標】 ・リハビリテーション医学における、コミュニケーションとレポートの記載、他職種連携の実践方法について理解する。 ・国際的な視野に立った倫理観を理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション									
2	コミュニケーション				コミュニケーションの方法やその重要性を理解する。					
3	レポートの書き方・読みやすい文章の書き方				レポートの書き方・読みやすい文章の書き方を学び、実践して今後のレポート作成に活かす。					
4	多職種連携				医療分野における多職種連携の内容やその重要性を理解する。					
5	日本の現状と欧米型倫理観				倫理観・倫理基準は文化や時代、社会背景により変化するものである。なぜ、そのような倫理観が求められているのか、また、相対的に非倫理的な行動に出る人があるのかの理解を深めるために、日本及び海外、特に欧米の文化社会的背景について学ぶ。					
6	日本の研究不正の現状と背景				第一回「日本の現状と欧米型倫理観」の後半から引き続き、医学分野における日本の研究不正の現状の紹介と研究不正が横行する理由についての考察を行う。					
7	医療従事者にはなぜ高い倫理観が求められるのか				第二回「日本の研究不正の現状と背景」を入口に、医療従事者にはなぜ高い倫理観が求められるのかについて考え、利益相反の観点から議論を行う。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	必要な資料は、適宜配布する。									
参考図書等										
成績評価方法	1. 授業態度・参加度(30%) 2. 最終レポート(70%)				履修上の注意		積極的に授業に参加すること。			
					実務経験紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	病理学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	森本 宏志						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 ・病理学は、医学・医療において「基礎」と「臨床」の境界領域に位置する学問であり、疾病に関する「何(what)」と「なぜ(why)」を追及する学問であり、科学としての医学・医療(≒EBM)の基盤となる学問である。 この講義では、疾病一般に関する捉え方の基本としての「病理学総論」を中心に説明し、疾病現象を理解するために必要な基本概念や基本用語を体系的に説明するとともに、common diseaseについての基本的知識についての学習の機会を提供する。 リハビリテーションは障害を軽減させ、残存能力を高め、社会への再適応を促進する目的で展開されるものであり、疾病の「三次予防」として位置づけられる。							これを適時・的確に行うには、正常状態での構造や機能(解剖・生理)の知識の基盤の上に、障害発生に関連する疾病について体系的に理解し、基本事項を身につけておくことは必要であると同時に有用なものであるからである。 【到達目標】 ・病理学総論に関連して、疾病に共通する現象や疾病に関する基本概念・基本用語について体系的に理解し、記憶し、説明できる。 ・病理学各論に関して、代表的な疾患(副読本で取り上げている約50の疾患)についての基本事項を病理総論と関連づけながら体系的に理解し、記憶し、簡潔に説明できる。			
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション(講義の進め方と目標、課題について、単位認定試験について等)。病理学の体系について					この病理学講義の目標や講義の進め方、評価方法について理解できる。各自が病理学を学ぶことの意義について確認できる。				
2	病とは何か。医学・医療における病理学の位置づけ。病因論とEBM・・・科学としての医学・医療、研究法と倫理的制約・限界					疾病と健康の定義と関係について説明できる。病理学の医学体系上の位置づけ、病理学の体系(総論各論)について説明できる。				
3	病因分類、疾病の基本分類と病理総論体系					EBMと病理学の関係について説明できる。病因分類および疾病の基本分類と病理総論体系を生命の定義に関連づけて説明できる。				
4	疾病の基本プロセス(侵害刺激と生体の基本的反応)(1) :萎縮と肥大、化生と変性					侵害刺激の例として酸素の欠乏と過剰への生体の反応を説明できる。侵害刺激に対する反応の全体構造を説明できる。				
5	疾病の基本プロセス(侵害刺激と生体の基本的反応)(2) :壊死、組織の修復と再生、治癒					疾病と病変の区別、基本病変である萎縮、肥大、変性、壊死と関連病変、および組織の修復・再生治癒について説明できる。				
6	循環障害(1):局所の循環障害(1)					循環障害の体系上の位置づけを説明できる。循環系の略図が描ける。充血、うっ血、出血、血栓症、塞栓症について説明できる。				
7	循環障害(2):局所の循環障害(2)、全身性循環障害					虚血、梗塞、側副循環の障害について説明できる。血栓症の原因とDICの関連が説明できる。ショックについて説明できる。				
8	炎症と免疫(1) :炎症と免疫の関係、炎症の基本過程と炎症の形態的分類					生体防御反応としての炎症と免疫の関係を説明できる。炎症の基本過程と炎症の形態的分類を関連づけて説明できる。				
9	炎症と免疫(2) :免疫と免疫の異常(免疫不全、アレルギー、自己免疫疾患)					免疫の基本的性質と疾患の関係について説明できる。免疫の異常としての免疫不全、アレルギーとその分類について説明できる。				
10	炎症と免疫(3) :移植、再生医療					移植と再生医療とその課題について、免疫の基本的性質と関連づけて説明できる。				
11	代謝障害					代謝障害の体系上の位置づけを説明できる。代謝障害に該当する基本疾患の例を挙げることができる。				
12	先天異常と遺伝子の異常(1) :先天異常と遺伝子異常の関係					先天異常と遺伝子異常の関係を説明できる。個体発生と先天異常の分類、及び催奇形因子の影響程度の違いを説明できる。				
13	先天異常と遺伝子の異常(2)					遺伝子の異常について、保因者頻度、顕性と潜性、優性と優生の違い、遺伝子多様性保護の意義等について説明できる。				
14	腫瘍(1)					腫瘍の定義について説明できる。腫瘍の本質と遺伝子異常の関係について説明できる。腫瘍の性質と分類について説明できる。				
15	腫瘍(2)、腫瘍と感染症の関係					腫瘍のライフサイクルについて説明できる。腫瘍の診断と治療について概要を説明できる。腫瘍を感染症と比較して説明できる。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	【主】 系統看護学講座 専門基礎					大橋 健一 / 矢澤 徹 /				
	疾病のなりたちと回復の促進[1] 病理学 第6版					藤原 正親 / 柴原 純二 (著)		医学書院		
	【副】 学生のための疾病論									
成績評価 方法	人間が病気になるということ(第2版)					井上 泰 (著)		医学書院		
	人体の構造と機能(第4版)					エレイン N. マリープ (著)				
成績評価 方法	1. 期末試験(100%) 2. 出席(期末試験受験資格としてのみ評価) 3. 各回課題(0%:各回の出席の証拠として評価するが、最終成績の点数へは反映させない(形成的評価))。					履修上の 注意	・毎回の授業開始後5分、終了前5分で小テスト、振り返りアンケートを行いその提出で出席確認とする。			
						実務経験 紹介	医療機関で病理診断経験約10年、病理学教育担当経験約25年			

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	聴覚医学概論					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	菅田 裕士、正司 真規						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 聴覚系の構造、疾患、治療について基本的な理解を深めることを目的とする。					【到達目標】 聴覚系の構造、疾患、治療について基本的な知識を習得することを目標とする。					
回数	授業内容					学習目標				
1	聴覚系の構造					聴覚系の基本構造について理解を深める。				
2	外耳の構造と疾患、治療					外耳の構造と疾患、治療について理解を深める				
3	中耳の構造と疾患、治療					中耳の構造と疾患、治療について理解を深める				
4	内耳の構造と機能					内耳の構造と機能について理解を深める				
5	内耳の疾患と治療					内耳の疾患と治療について理解を深める。				
6	聴覚機能検査①					聴覚機能検査の目的や実施者について理解を深める				
7	聴覚機能検査②					聴覚機能検査の種類について説明できるようになる				
8	聴覚機能検査③					気導聴力検査と骨導聴力検査の目的の違いを説明できる				
9	気導聴力検査①					気導聴力検査の検査順序や流れを理解する				
10	気導聴力検査②					気導聴力検査が実施できる				
11	骨導聴力検査					骨導聴力検査の流れを理解し、実施できる				
12	インピーダンスオージオメトリー①					ティンパノメトリーの検査原理を理解する				
13	インピーダンスオージオメトリー②					ティンパノメトリーの実施と基本的なタイプ分類ができる				
14	内耳機能検査①					補充現象について説明できる				
15	内耳機能検査②					SISI検査の実施と分析ができる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚学 聴覚障害学 第3版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
参考 図書等										
成績評価 方法	菅田試験(50%)、正司試験(50%)					履修上の 注意	授業に出席し、内容をよく理解し一定の成績を上げることに努めること。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	臨床心理学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	桑原 郁子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 臨床心理学とは何かを教科書で学び、病者や家族の心理・援助の実際についてビデオや資料を用いて学ぶ。					【到達目標】 ・人間の精神世界について知り、人間の行動の背景にある思いへの理解を深める。 ・患者、家族の闘病生活の一部を知ることにより、実際の接し方についての理解を深める。 ・テーマごとの資料から他者の考えに触れることにより、物事を多面的に捉える力を身につける。 ・自分の考えをまとめ、他者に伝える力を育てる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	臨床心理学とは				臨床心理学の概要・定義について理解する					
2	ビデオ・資料：病気を持つ子ども達の心理について				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
3	心理援助の基礎を学ぶ-人格理論				人格理論について理解する					
4	ビデオ・資料：出生前診断について				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
5	心理援助の基礎を学ぶ-発達理論				発達理論について理解する					
6	ビデオ・資料：児童虐待について				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
7	対象を理解する-心理アセスメント：知能検査・発達検査				知能検査や発達検査等のそれぞれの目的や概要について理解する					
8	ビデオ・資料：発達障害について				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
9	対象を理解する-心理アセスメント：人格検査・その他の心理検査				人格検査等の目的や概要について理解する					
10	ビデオ・資料：ALS患者と家族の実際				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
11	心理援助の方法を知る-心理療法Ⅰ				心理療法について理解を深める					
12	ビデオ・資料：認知症介護の実際				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
13	心理援助の方法を知る-心理療法Ⅱ				心理療法について理解を深める					
14	ビデオ・講義：がん看護の実際				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
15	講義・ビデオ・資料：終末期訪問医療の実際				ビデオ・資料を視聴しテーマについて理解を深め、考えをまとめることができる					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	心とかかわる臨床心理 第3版						ナカニシヤ出版			
参考 図書等	ビデオ感想文のまとめ資料とテーマごとの新聞資料									
成績評価 方法	1. 授業態度・ビデオ視聴感想文(40%) 2. 確認テスト(60%)				履修上の 注意		・1コマ目は教科書に沿った授業を行い、2コマ目はビデオを視聴した後、感想文を書く ・感想文が評価の対象となるので必ず提出すること ・毎回出される感想文のまとめ、新聞資料には目を通しておくこと			
					実務経験 紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	言語学					
単位数	2	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	太田 聡						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間の言語の特徴及び構造と体系、並びにその分析方法について、なるべく日本語の例を用いながら、論じていく。また、一方的な講義にならないように、講義の内容に関連した練習問題を適宜課すようにする。					【到達目標】 言語学・言語研究の基礎知識をしっかりと身につける。					
回数	授業内容					学習目標				
1	言語とは何か					言語とは何で、どのような性質や特徴があるのかを知る。				
2	言語の研究方法					言語研究の方法や研究分野について理解する。				
3	音素について					意味区別に役立つ最小単位である「音素」について理解する。				
4	日本語の音素					日本語の音素の抽出方法を理解する。				
5	形態素について					意味を有する最小単位である「形態素」について理解する。				
6	語形成					語形成のメカニズムを理解する。				
7	構造主義言語学の統語分析					構造主義言語学の特徴を知る。				
8	生成文法理論について					生成文法理論の基本的な考え方を理解する。				
9	生成文法の統語論					生成文法の統語理論の基礎を学ぶ。				
10	意味論：語の意味					語の意味の分析方法を理解する。				
11	意味論：句や文の意味					句や文の意味の分析方法を理解する。				
12	語用論					語用論とは何かを理解する。				
13	社会言語学・方言学					社会言語学のトピックや方言学の知見について学ぶ。				
14	歴史・比較言語論及び対照言語学					歴史・比較言語学及び対照言語学とは何かを知る。				
15	まとめと国試過去問に挑戦：講義のまとめを行う。また、言語聴覚士国家試験過去問題の中から言語学関係の問題をいくつか選んで解かせ、解説を行う。					学んだ言語学の基礎知識によって、国試の一部も解けるようになる。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	よくわかる言語学入門 解説と演習					町田健・靱山洋介(著)		バベルプレス		
								ISBN: 9784931049857		
参考 図書等										
成績評価 方法	出席(欠格)条件を満たした者に期末筆記試験を行い、評価割合は筆記試験を100%とする。					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	音声学					
単位数	2	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	太田 聡						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間言語の音声の特徴、人が音声を発するメカニズム、音声の分析方法などを、できるだけ日本語の例を中心に据えて、紹介していく。また、講義の内容理解を深めてもらうために復習テストを解いてもらう。さらに、適宜、国試の過去問にも挑戦してもらう。					【到達目標】 音声学の基礎知識と音声分析の基礎技能を身につけ、発話のサンプルを発音記号で表記できるようになる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	音声学とは?				音声学とは何かを理解する。					
2	発声のしくみ				音(オン)はどうやって出ているのかを理解する。					
3	発音記号を覚えよう その1				国際音声記号(International Phonetic Alphabet: IPA)の主に母音を覚える。					
4	発音記号を覚えよう その2				IPAの主に子音を覚える。					
5	音を目で見てみよう				音響分析ソフトを使って音声を目で見る方法を学ぶ。					
6	母音を見てみよう その1				母音の音声波形について理解する。					
7	母音を見てみよう その2				サウンドスペクトグラムを読み取れるようになる。					
8	子音を見てみよう その1				パレートグラムの使い方、及び声帯の動きの観察方法などを覚える。					
9	子音を見てみよう その2				VOTとは何か、ローカスとは何かを理解する。					
10	子音を見てみよう その3				鼻音やラ行子音やヤ行子音の特徴を知る。					
11	様々な音声現象				母音の無声化、子音の(硬)口蓋化、母音の鼻音化などを理解する。また、二重母音と連母音の違いを理解する。					
12	音素				音素の理解を深める。					
13	音節・モーラ				音節及びモーラという単位を理解・習得する。					
14	アクセントとイントネーション				アクセントとは何か、イントネーションとは何かを理解する。					
15	まとめと補足				日本語の発話サンプルを発音記号で書き取れるようになる。					
教科書 参考 図書等	書籍名				著者		出版社			
	たのしい音声学				竹内京子・木村琢也(著)		くろしお出版			
							ISBN: 9784874247884			
成績評価 方法	出席(欠格)条件を満たした者に期末筆記試験を行い、評価割合は筆記試験を100%とする。				履修上の 注意		特になし。			
					実務経験 紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	言語発達学Ⅰ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 子どもたちがどのように言語、コミュニケーションを獲得していくかについて学ぶ。 言語発達学Ⅰでは特にことばを獲得する前の前言語期に焦点を当てる。					【到達目標】 1. 言語発達を支える基盤、言語獲得理論を理解する 2. 前言語期のことば・コミュニケーションの発達を理解する 3. 言語聴覚障害を理解する上での知識を得る					
回数	授業内容					学習目標				
1	言語とは何か					言語について理解する				
2	言語発達を説明する理論(学習説・生得説)					学習説、生得説を理解する				
3	言語発達を説明する理論(認知説、社会・相互交渉説)					認知説、社会的相互交渉説を理解する				
4	前言語期の発達(コミュニケーション行動の発達)					前言語期の発達をコミュニケーション行動の側面から理解する				
5	前言語期の発達(コミュニケーション行動の発達)					前言語期の発達をコミュニケーション行動の側面から理解する				
6	前言語期の発達(認知機能の発達)					前言語期の発達を認知機能の側面から理解する				
7	前言語期の発達(発声および音声の発達、言語音知覚の発達)・まとめ					前言語期の発達を発声・音声の発達、言語音知覚の側面から理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	Crosslink言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学					岩田一成 他(編集)		メジカルビュー社		
	最新言語聴覚学講座 言語発達障害学					石坂郁代、水戸陽子(編著)		医歯薬出版		
	言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学 第2版					今泉敏、小澤由嗣(編集)		医学書院		
成績評価 方法	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版					玉井ふみ、深浦順一(編集)		医学書院		
	期末試験(70%)、小テスト(30%)					履修上の 注意	テキストを使用して講義を進めますので毎時間持参すること			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	言語発達学Ⅱ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 子どもたちがどのように言語、コミュニケーションを獲得していくかについて学ぶ。 言語発達学Ⅱでは、幼児期・学童期に焦点を当て、典型発達を学ぶ。					【到達目標】 1. 幼児期～学童期における典型発達を理解する 2. 幼児期～学童期における発達の流れを説明することができる 3. 言語発達障害を理解する上での知識を得る					
回数	授業内容					学習目標				
1	1～2歳児の言語発達					1、2歳児の言語発達を理解する				
2	1～2歳児の言語発達					1、2歳児の言語発達を理解する				
3	幼児期の言語発達					幼児期の子どもの言語発達を理解する				
4	幼児期の言語発達					幼児期の子どもの言語発達を理解する				
5	幼児期の言語発達					幼児期の子どもの言語発達を理解する				
6	学童期の言語発達					学童期の子どもの言語発達を理解する				
7	学童期の言語発達					学童期の子どもの言語発達を理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名				著者			出版社		
	Crosslink言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学				岩田一成 他(編集)			メジカルビュー社		
	最新言語聴覚学講座 言語発達障害学 言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学 第2版 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版				石坂郁代、水戸陽子(編著) 今泉敏、小澤由嗣(編集) 玉井ふみ、深浦順一(編集)			医歯薬出版 医学書院 医学書院		
成績評価 方法	期末試験(70%)、小テスト(30%)					履修上の 注意	開講時期は前期(言語発達学Ⅰの終了後)を予定する。テキストを使用して講義を進めますので 毎回持参すること。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	社会福祉学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	服部 恭弥						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 「社会福祉の定義」「高齢者の生活と福祉」「障害者の自立と福祉」「社会福祉の法」、以上の項目を中心に、社会福祉士としての立場から講義する。					【到達目標】 医療従事者として必要な社会福祉の基礎知識について習得する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	社会福祉の概念					社会福祉の概念を理解できる				
2	社会福祉を支える原理					社会福祉を支える原理を理解できる				
3	社会保障の仕組					社会保障の仕組				
4	最低保障と生活保護					最低保障と生活保護について理解できる				
5	生活保護の種類					生活保護の種類について理解できる				
6	高齢者の生活と福祉					高齢者の生活と福祉について理解できる				
7	高齢者介護を支える制度					高齢者介護を支える制度について理解できる				
8	介護保険制度の仕組					介護保険制度の仕組について理解できる				
9	高齢者の住まいと介護の提供					高齢者の住まいと介護の提供について理解できる				
10	障害者の自立と福祉					障害者の自立と福祉について理解できる				
11	障害者の生涯保障の理念					障害者の生涯保障の理念について理解できる				
12	自立支援給付と地域支援事業					自立支援給付と地域支援事業について理解できる				
13	少子化の進行と支援政策					少子化の進行と支援政策について理解できる				
14	児童福祉から児童家庭福祉へ					児童福祉から児童家庭福祉について理解できる				
15	地域共生社会への展望					地域共生社会への展望について理解できる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	新・社会福祉とは何か					大久保 秀子 著		中央法規		
	適宜紹介									
成績評価 方法	期末試験(100%)					履修上の 注意	積極的に授業に参加することを望む。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	リハビリテーション概論					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	楫野 允也						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 生活の中で疾病や加齢の影響など、生活に制限を有することは、誰しも可能性のあることです。リハビリテーションはその制限(障害)に対して身体的機能を回復するための支援をするだけでなく、人間らしく生きる権利を回復することに寄与する役割を担います。本科目では、リハビリテーションの基本概念や歴史、リハビリテーションに関わる領域などについて学習します。さらに、法的制度や多職種連携といった役割を担うために必要な知識も学ぶことを目的とします。					【到達目標】 ・リハビリテーションに関連する用語を理解し、説明できる。 ・保健医療福祉とリハビリテーションについて理解し、説明できる。 ・リハビリテーション専門職として、対象者に接する心を身に着けることができる。 ・専門職として多職種との連携について、チーム医療の概念について説明することができる。 ・自らの専門職としての業務、職域などを理解し、説明することができる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション 日本の現状				講義の進め方について理解できる。日本の状況、法律等について理解できる。					
2	リハビリテーションの概念・理念・定義				リハビリテーションの概念やノーマライゼーションの考え方について理解できる。					
3	健康と疾病とICF・ICIDH				障害分類について理解し、説明できる。					
4	障害者の心理と障害受容				障害受容の過程を理解し、考えることができる。					
5	事例に基づいた障害像の理解(演習)				ディスカッションを通じて、障害分類やリハビリテーションについて考えることができる。					
6	インフォームド・コンセントと障害受容				インフォームド・コンセントの概念を理解し、障害受容について考えることができる。					
7	リハビリテーションの諸段階				医学的・職業的・社会的・教育的のリハビリテーションの段階について理解できる。					
8	リハビリテーションに関わる専門職種				リハビリテーション専門職のそれぞれの役割について理解できる。					
9	医療の中での多職種の連携(演習)				チーム医療、多職種連携などについて理解できる。					
10	ADL、QOLの概念と評価				ADL、QOLに関して知り、評価も含めて説明することができる。					
11	在宅医療と在宅福祉 社会参加とリハビリテーション				地域リハビリテーションについて理解することができる。					
12	少子高齢化社会とリハビリテーション				高齢者施策、少子化対策、健康増進について理解することができる。					
13	生活を支える仕組み 社会保障制度				社会福祉、医療保健制度について理解できる。					
14	関連法規について				医療法、理学療法士及び作業療法士法等の法規について理解できる。					
15	関連法規について 概論まとめ				関連法規について復習するとともに、概論全体を通してまとめ、理解を深める。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	リハビリテーション概論 改定第4版				田島 文博		永井書店			
参考図書等										
成績評価方法	・講義への参加内容・課題(40%)： 講義中の発言やアクティブラーニングへの取り組み、課題の評価など ・定期試験(60%)：試験結果 定期試験で6割を満たさない場合は再試の可能性がります				履修上の 注意		・事前学習として講義内容に該当する教科書の部分に関して予習することを望む ・講義は3学科共通で行うため、積極的な参加、共同が行えることを望む			
					実務経験 紹介		理学療法士として医療機関において、急性期・回復期などの実務経験22年あり。			

1 年 次

専 門 科 目

- ◇言語聴覚障害概論Ⅰ
- ◇言語聴覚障害概論Ⅱ
- ◇失語症学Ⅰ
- ◇発達障害学Ⅰ
- ◇構音障害学Ⅳ（機能性）
- ◇成人聴覚障害学

言語聴覚学科

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語聴覚障害概論Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚障害概論Ⅰでは、言語聴覚士についての概要や現状を学ぶ。それを踏まえた上で「成人領域の言語聴覚障害」を中心に講義をすすめ言語聴覚療法の職域や対象者などについて資料や動画などを用いて説明する。また、言語聴覚士が携わる「コミュニケーション」とはどのような行為なのかについても考え、社会における言語聴覚士の必要性和役割についても理解を深める					【到達目標】 1. 言語聴覚障害(成人領域)を大まかに把握できる。 2. 言語・コミュニケーション過程を説明できる。 3. 言語聴覚障害の方とのコミュニケーションを考えることができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	コミュニケーション					コミュニケーションを知る				
2	スチーチチェーン/コミュニケーション障害とは					コミュニケーション障害を知る				
3	言語聴覚士					言語聴覚士を知る				
4	脳の仕組み					脳の仕組みを知る				
5	原因となる病気					原因となる病気を知る				
6	失語症(1)					失語症の定義を知る				
7	失語症(2)					失語症の症状を知る				
8	失語症(3)					失語症のタイプを知る				
9	音声障害・構音障害(1)					発声・構音のしくみを知る				
10	音声障害・構音障害(2)					音声障害について知る				
11	音声障害・構音障害(3)					構音障害を知る				
12	摂食嚥下機能障害					摂食嚥下機能障害を知る				
13	聴覚障害					聴覚障害について知る				
14	高次脳機能障害(1)					高次脳機能を知る				
15	高次脳機能障害(2)					高次脳機能障害を知る				
教科書	書籍名					著者			出版社	
	図解 やさしくわかる言語聴覚障害					小島知幸 編著			ナツメ社	
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 言語聴覚障害学概論第2版					藤田郁代 編集			医学書院	
成績評価 方法	期末試験:60% 小テスト:40%					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語聴覚障害概論Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚障害概論Ⅱでは、小児領域における言語聴覚障害を中心にテキストや資料などを用いて説明していく。また、講義だけではなく保育所演習を通して、子どもの定型発達やコミュニケーション方法などを理解していく。					【到達目標】 1. 言語聴覚障害(小児領域)にはどのようなものがあるのかを大まかに把握できる。 2. 演習を通して、ことばの定型発達と発達障害の違いについて考えることができる。 3. 演習で学んだことを文章化して、PowerPointなどを使用し報告することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	正常なことばの発達					正常なことばの発達の理解を深める				
2	小児領域の言語聴覚障害(構音障害)					構音障害について知る				
3	小児領域の言語聴覚障害(限局性学習症、注意欠如多動症)					限局性学習症、注意欠如多動症について知る				
4	小児領域の言語聴覚障害(自閉スペクトラム症)					自閉スペクトラム症について知る				
5	小児領域の言語聴覚障害(脳性麻痺)					脳性麻痺について知る				
6	小児領域の言語聴覚障害(吃音)					吃音について知る				
7	小児領域の言語聴覚障害(聴覚障害)					聴覚障害について知る				
8	保育所演習オリエンテーション					保育所演習の目的、概要、注意事項などを理解する				
9	演習報告会準備					各自で報告会の準備を行う				
10	保育所事前学習報告会					子どもの発達について学び、スライドを作り報告できる				
11	オリエンテーション、保育所演習(演習)					・実際に子どもと関わる経験をする ・既習の知識の理解を深める ・ことばの発達や運動発達を理解する ・子どもの視点を理解する ・保育士の仕事について知る				
12	保育所演習(演習)									
13	保育所演習(演習)									
14	保育所演習(演習)									
15	保育所演習、振り返り(演習)									
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	図解 やさしくわかる言語聴覚障害					小嶋知幸(編著)		ナツメ社		
成績評価 方法	期末試験(60%)、演習発表(40%)					履修上の 注意	講義の中盤ではPowerPointを使用して発表を予定していますのでパソコンなどの準備をしてください。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	失語症学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語と脳の関係や言語情報処理メカニズムなどに基づいて失語症という症候について学ぶ。 失語症の定義、原因疾患、症状などを理解し、評価・臨床へ結びつけるための基礎知識を身に付ける。					【到達目標】 1. 失語症の定義や原因疾患、失語症状を理解・定着させ、説明できる。 2. 演習を通して、失語症検査法についても学ぶ。 3. 失語症候群について理解を深める。					
回数	授業内容					学習目標				
1	失語症の定義/原因疾患/言語モダリティ					失語症の定義・原因疾患等について理解する				
2	言語と脳機能/音と意味					言語と脳機能との関係、音韻、意味について理解する				
3	言語モデル(1)					音声言語のモデルについて理解する				
4	言語モデル(2)					文字言語のモデルについて理解する				
5	失語症の症状(1)					喚語困難や錯語など失語症症状について理解する				
6	失語症の症状(2)					喚語困難や錯語など失語症症状について理解する				
7	失語症のタイプ分類(1)					古典的分類について理解する				
8	失語症のタイプ分類(2)					古典的分類について理解する				
9	失語症のタイプ分類(3)					その他失語症のタイプについて理解する				
10	標準失語症検査(1)					標準失語症検査の概要について理解する				
11	標準失語症検査(2)					標準失語症検査<聞く>について理解し、実施できる				
12	標準失語症検査(3)					標準失語症検査<話す>について理解し、実施できる				
13	標準失語症検査(4)					標準失語症検査<読む>について理解し、実施できる				
14	標準失語症検査(5)					標準失語症検査<書く>について理解し、実施できる				
15	標準失語症検査 実技					標準失語症検査を実施できる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	標準失語症検査マニュアル 改訂第2版					日本高次脳機能障害学会		新興医学出版		
	病気が見える 第2版 Vol.7 脳・神経							メディックメディア		
	失語症 言語治療の基礎					紺野加奈江 著		診断と治療社		
	失語症 臨床標準テキスト					種村純 編著		医歯薬出版		
成績評価 方法	標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版					藤田郁代 編集		医学書院		
	言語聴覚療法臨床マニュアル 改訂第3版					平野哲雄 編集		協同医書出版		
成績評価 方法	期末試験:40% 小テスト:30% 実技試験:30%					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	発達障害学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	今村 亜子						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 「発達障害」について、代表的な障害について簡潔に紹介し、評価・支援についての基本的な枠組みを学ぶ。特定の検査バッテリーの評価手順を実際に経験して評価方法を会得するための基礎をつくる。また、次年度の発達障害の各論の基礎とする。					【到達目標】 ・発達障害とはどういうものか、定義も含め概要を理解する。 ・発達障害児(者)に対しての評価について知ることが出来る。 ・発達障害児(者)に対して言語聴覚士がどのように支援するか理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	言語発達障害とは					言語発達障害について、定義も含めて説明できる				
2	言語発達障害の臨床、情報収集					臨床の基本姿勢を学び、アプローチについて知る。情報収集の基本を理解する。				
3	検査について					検査の位置付け、目的、対象領域、検査の流れを理解する。S-S法を例にて枠組みを理解する。				
4	代表的な検査(1)					発達検査、知能検査、学習・認知の検査について理解する。				
5	代表的な検査(2)					言語検査、自閉症スペクトラム障害/注意欠如・多動性障害に用いられる検査について理解する				
6	評価のまとめ 評価から支援へ。ICFの発想(演習)					評価のまとめとPDCAサイクルについて理解する。S-S法を疑似体験する。				
7	支援 発達段階に応じた指導					発達段階(水準)ごとの指導について述べる事ができる。				
8	支援 環境調整					保護者に対する支援の心構えとSTの役割を理解する。関係機関との協働の重要性を説明できる。面接の心構えを知る。				
9	障害別支援 特異的言語発達障害					特異的言語発達障害と判断する根拠を述べる事ができる。症状を説明できる。支援・指導について知る。				
10	障害別支援 限局性学習障害					限局性学習障害の定義を述べる事ができる。症状を説明できる。支援・指導について知る。				
11	障害別支援 知的能力障害					知的能力障がい定義を述べる事ができる。言語の遅れについて説明できる。支援・指導について知る。				
12	障害別支援 自閉症スペクトラム障害					自閉症スペクトラム障害の定義を述べる事ができる。コミュニケーションの特徴を説明できる。支援・指導について知る。				
13	障害別支援 注意欠如・多動性障害					注意欠如・多動性障がい定義を述べる事ができる。症状を説明できる。支援・指導について知る。				
14	障害別支援 脳性麻痺、重複障害					脳性麻痺・重複障がい定義を述べる事ができる。症状を説明できる。支援・指導について知る。				
15	まとめ					これまでの講義内容を理解する。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第3版					藤田 郁代(監修)		医学書院		
	国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査マニュアル(改訂第4版)					小寺 富子他編著		エスコアール		
参考 図書等	言語聴覚士のための言語発達障害学 第2版					石田宏代・石坂育代(編集)		医歯薬出版株式会社		
	言語聴覚療法臨床マニュアル 改訂第3版					平野哲雄ほか編集		協同医書出版社		
成績評価 方法	レポート課題(30%) 期末試験(70%)					履修上の 注意	毎講義時に「振り返りシート」を記入してもらい、自分の中で講義のまとめをしていただきます。よって、そのシートの作成も評価に含まれます。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	構音障害学Ⅳ(機能性)					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 小児の構音障害において代表的な機能性構音障害について、概要ならび評価・訓練法を学ぶ。 また、実技を通して必要な検査法等の知識・技能を身に付ける。					【到達目標】 1. 機能性構音障害について理解し、自分の言葉で説明できる。 2. 機能性構音障害の評価について理解し、実施できる。 3. 機能性構音障害に対する訓練法を理解し、立案することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	基礎知識(構音とは、概要、定義)					基礎知識が理解できる				
2	誤り方の種類					誤り方の種類がわかる				
3	特異な構音操作による誤り					特異な構音操作による誤りが理解できる				
4	特異な構音操作による誤り					特異な構音操作による誤りが理解できる				
5	特異な構音操作による誤り					特異な構音操作による誤りが理解できる				
6	臨床の流れ、評価(概要)					臨床の流れや評価の概要が理解できる				
7	評価(構音検査以外の検査)					評価について理解をする				
8	評価(新版構音検査) 演習					新版構音検査ができるようになる				
9	評価(新版構音検査) 演習					新版構音検査ができるようになる				
10	訓練法					訓練法を理解する				
11	訓練法					訓練法を理解する				
12	訓練法(演習)					訓練手技を習得する				
13	訓練法(演習)					訓練手技を習得する				
14	症例検討					症例について考え理解を深める				
15	まとめ					これまでの講義内容が理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	構音障害の臨床—基礎知識と実践マニュアル—改訂第2版					阿部雅子		金原出版		
	言語聴覚士テキスト 第3版					大森孝一(編著)		医歯薬出版		
	たのしい音声学					竹内京子、木村琢也		くろしお出版		
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第3版					熊倉勇美、今井智子(編集)		医学書院		
	構音訓練に役立つ 音声表記・音素表記 記号の使い方ハンドブック					今村亜子		協同医書出版社		
成績評価 方法	期末試験(60%)、小テスト(40%)					履修上の 注意	2～3講義ごとに小テストを行い、知識の理解度と定着度をはかります。どのようなことを学んだか、自宅での復習や反復学習を推奨します。関連教科として言語学・音声学、言語発達学で学んだことについても復習してください。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	成人聴覚障害学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 成人を対象とした聴覚障害とそのリハビリテーションや支援について基礎知識と概要を学ぶ。					【到達目標】 ・一般目標 成人聴覚障害の疾患や聴覚の解剖生理を学ぶ ・行動目標 聴覚器の解剖・生理について説明できる。 外耳～大脳までの音の流れを説明できる。 各障害の聴覚系のどこの部位の障害かを区別できる。 音叉検査が実施判別できる。 標準純音聴力検査の概要が理解できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	外耳の解剖と生理					外耳の解剖と生理を理解・説明ができる。				
2	中耳の解剖と生理					中耳の解剖と生理を理解・説明ができる。				
3	内耳の解剖と生理					内耳の解剖と生理を理解・説明ができる。				
4	面積比とテコ比について					中耳にある鼓膜とアブミ骨底の面積比、ツチ骨とキヌタ骨のテコ比についてdBや倍数を説明できる。				
5	骨導音・気導音について					標準純音検査についての基礎的な知識が習得できる。				
6	クロスヒアリングについて					クロスヒアリング(陰影聴取)についての基本的な説明ができる。				
7	中間試験					1～7回の授業で習得した知識について説明できるか確認を行う。				
8	外耳疾患について					外耳疾患を理解・説明ができる。				
9	中耳疾患について					中耳疾患を理解・説明ができる。				
10	内耳疾患について 補充現象を中心に					内耳疾患における補充現象の疾患について理解・説明ができる。				
11	内耳疾患について 老人性難聴を中心に					内耳疾患におけるの老人性難聴について理解・説明ができる。				
12	内耳疾患について その他の障害を中心に					内耳疾患や後迷路性難聴などの疾患について理解・説明ができる。				
13	音叉検査と平衡機能、眼振検査について(演習)					音叉検査を理解し、実践ができることを目標とする。また、平衡機能検査や眼振検査についても知識を習得する。				
14	聴覚補償について					聴覚補償の分類や用途を理解することができ、説明することができる。				
15	情報保障について					情報保障の分類や用途を理解することができ、説明することができる。				
教科書 参考図書等	書籍名					著者				
	『標準言語聴覚学 聴覚障害学 第3版』					藤田郁代(監修)				
	病気がみえる vol. 13 耳鼻咽喉科									
	『聴力検査の実際 改定5版』					日本聴覚医学会 編				
成績評価方法	中間試験(40%) 期末試験(60%)					履修上の 注意	遅刻や早退、欠席はしっかりチェックします。			
						実務経験 紹介	言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。			

1 年 次

選 択 必 修 科 目

◇言語療法セミナーⅠ

◇ボランティア論

言語聴覚学科

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	言語療法セミナーⅠ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	1年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 医療現場の見学を通してこれから学ことに對しての心構えを形成する。言語聴覚士を目指すうえで必要なことを考える。					【到達目標】 1.言語聴覚士に必要な基礎的・専門的知識にはどんなことがあるか理解する。 2.言語療法を行う上に必要な観察力・推察力・探求心を養う。 3.コミュニケーション能力を養う(文章力・発言力・伝達力)。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション					学校で学ぶことを知る				
2	自分自身を知る					自分と他者を知る				
3	STに必要な基礎知識:日本の人口					日本の人口とリハビリテーションの関係を知る				
4	STに必要な基礎知識:障害とリハビリ					障害とリハビリについて知る				
5	STに必要な基礎知識:医療行為					医療行為について知る				
6	STに必要な基礎知識:医療倫理と研究					医療倫理と研究について知る				
7	STに必要な基礎知識:感染症対策					感染症対策について知る				
8	STに必要な基礎医学:発生と胚葉					発生と胚葉について知る				
9	STに必要な基礎医学:脊椎動物と神経					脊椎動物と神経について知る				
10	STに必要な基礎医学:脳の発達と鰓弓					脳の発達について知る				
11	STに必要な基礎医学:細胞					細胞について知る				
12	STに必要な基礎医学:神経伝達					神経伝達について知る				
13	夏季施設見学:オリエンテーション					夏季施設見学の概要について知る				
14	夏季施設見学:準備					夏季施設見学に向けて準備ができる				
15	夏季施設見学:見学報告準備					夏季施設見学の体験をまとめることができる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士テキスト 第3版					大森孝一 編著		医歯薬出版		
	2025年版 言語聴覚士国家試験過去問題					言語聴覚士国家試験対策委員会		大揚社		
成績評価 方法	試験:20% 夏季施設見学報告会:80%					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	選択・必修	履修形態	選択	科目名	ボランティア論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	1年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	非常勤講師／川北 淳一郎 他						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 ボランティアとは奉仕の意味ではなく、自分の持てる能力を発揮できる場であると同時に同じ空間を共有した全ての仲間と共感できる活動であり、福祉を学ぶものとしては必須の事柄である。しかし、ボランティアを正しく理解していなければ、その感動を味わうことはできない。この授業では、ボランティア活動の意義を解説し、専門職としての活動に繋げていけるよう導く。					【到達目標】 ・人と関わる専門職(対人接触業)として最低限のマナーを身につける。 ・ボランティアを必要としている方々に「専門職としての関わり」とは何かを考えるきっかけとする。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション ～ボランティアとは～					ボランティアとは何かを理解する				
2	言語聴覚士とボランティア					言語聴覚士としてのボランティア活動を知る				
3	ボランティア活動①					様々なボランティア活動の実体験を聞き、自分に何ができるかを考えることができる				
4	ボランティア活動②					様々なボランティア活動の実体験を聞き、自分に何ができるかを考えることができる				
5	ボランティア活動③					様々なボランティア活動の実体験を聞き、自分に何ができるかを考えることができる				
6	災害・震災におけるボランティア実践					災害ボランティア活動を知る				
7	まとめ					講義を受け、専門職としてのボランティア活動について考えることができる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	特に定めない									
成績評価 方法	課題(100%)					履修上の 注意	・多くの活動の援助方法として「ボランティアは必須である」という認識を持って積極的に授業に参加すること。 ・人間関係(コミュニケーション)作りを意識し、対象者や多職種と正対すること。			
						実務経験 紹介				

2 年 次

基 礎 科 目

◇英語Ⅱ（医学英語）

◇英語Ⅳ（文献Ⅱ）

◇社会学

◇情報科学Ⅱ

言語聴覚学科

科目 区分	基礎	履修形態	必修	科目名	英語Ⅱ(医学英語)					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	2年	作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	齋藤 由華						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 通常の英語ではあまりなじみのない医学英語に慣れるため、まず医学英単語について学び、各臓器について解説してある教科書を読む。					【到達目標】 ・医学英単語の基本的な構成要素を理解する。 ・英文の構造を意識しながら、和訳する。 ・英文を通して、テキストの各単元の内容を理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	ガイダンス(自己紹介、授業の進め方など) CHAPTER 1 The Human Body					・医学英語とは何かを認識する。 ・英文の構造に触れながら、人体にX20:AT33について理解する。				
2	CHAPTER 2 The Skeletal System					・骨格について理解する。 ・人体について復習し、知識を定着させる。				
3	CHAPTER 3 The Muscular System					・筋肉について理解する。 ・骨格について復習し、知識を定着させる。				
4	CHAPTER 4 The Circulatory System					・循環器について理解する。 ・筋肉について復習し、知識を定着させる。				
5	CHAPTER 7 The Digestive System					・消化器について理解する。 ・循環器について復習し、知識を定着させる。				
6	CHAPTER 8 The Urinary System					・消化器について理解する。 ・循環器について復習し、知識を定着させる。				
7	総復習					・これまでの授業を総復習し、習熟度を確認する。 ・試験に備える。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	医療従事者のための医学英語入門					清水 雅子(著)		講談社		
参考 図書等	ステッドマン医学大辞典							メジカルビュー社		
成績評価 方法	出席点(10点)+期末試験(各90点)=100点					履修上の 注意	・必ず教科書を持参すること。 ・辞書を各自用意すること。 (電子辞書は可、スマートフォンは不可) ・解剖学の知識がある前提で授業を進めるため、 復習を行っておくこと。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	基礎	履修形態	必修	科目名	英語Ⅳ(文献Ⅱ)					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	上田 由紀子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 義務教育・中等教育及び英語Ⅰで学んだ英語の読解力を定着させ、更なる発展をはかるため、精読や英文和訳に限らず、大意把握や速読などさまざまな英語リーディング活動や英語構文把握の練習を行う。医療現場で使われることの多い英語を扱った教材を用いる。					【到達目標】 ・一定の長さの英語文書に対処する読解力と構文理解力と語彙を養成する。 ・受け身の読解ではなく、アクティブに読む力を付ける。					
回数	授業内容					学習目標				
1	Unit 8 前半 : 献血を話題とする長文の内容把握					辞書を利用できる。血液の仕組みに関する英語の表現を理解できる。				
2	Unit 8 後半 : 文型、特に補語の構文問題演習					辞書を利用できる。SVOC構文の作りと意味を理解することができる。。				
3	Unit 9 前半 : 健康管理について説明する語彙と長文内容把握					辞書を利用できる。ライフスタイルに関する英語の文章を理解できる。				
4	Unit 9 後半 : 関係代名詞の構文問題演習					辞書を利用できる。関係詞代名詞を使った英語の表現を理解し、作文できる。				
5	Unit 10 前半 : 治療の方法について説明する語彙と長文内容把握					辞書を利用できる。外国人が日本で医療を受ける際のトラブルに関する文章を英語で理解できる。				
6	Unit 10 後半 : 現在完了・過去完了の文法問題演習					辞書を利用できる。完了形に関する英語の表現を理解できる。				
7	Unit 11 前半 : 肺炎を話題する長文内容把握					辞書を利用できる。「治療」「と「治癒」の違いを英語で理解できる。				
8	Unit 11 後半 : thatを用いた構文の見分け方					辞書を利用できる。様々なthatの用法を理解できる。				
9	Unit 12 前半 : 痩身願望を話題とする長文内容把握					辞書を利用できる。痩せることに対する問題に関する英語の文章を理解できる。				
10	Unit 12 後半 : 時制に関するまとめの問題演習					辞書を利用できる。助動詞を使った表現を理解できる。				
11	Unit 13 前半 : 検診について説明する語彙と長文内容把握					辞書を利用できる。乳がんのセルフチェックの方法を英語で理解できる。				
12	Unit 13 後半 : 前置詞について知識を整理する					辞書を利用できる。動詞と前置詞を組み合わせた英語の表現を理解できる。				
13	Unit 14 前半 : 医療と国際化について説明する語彙と長文内容把握					辞書を利用できる。外国人の医療現場への就労に関する英語の文章を理解できる。				
14	Unit 14 後半 : 受動態についての知識を整理する					辞書を利用できる。受け身文を理解できる。				
15	試験									
16	試験返却と解説と本学期の学習のまとめ					試験のポイントを理解し、自身の英語学習に生かすことができる。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	医療と看護の総合英語(三訂版)					笹島 茂(著) 山崎 朝子(著)		三修社		
	*前期の英語Ⅰと同一テキスト、その後半部分を使用する。									
参考 図書等										
成績評価 方法	1. 授業参加度(20%) 2. 宿題等(10%) 3. 定期試験(70%)					履修上の 注意	・教室内で行うリーディングを中心とした言語活動に積極的に取り組んでください。 ・何らかの英和辞書(冊子か電子辞書あるいはスマホのアプリ)を毎回持参してください。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	基礎	履修形態	必修	科目名	社会学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	瀬崎 譲廣						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 人間は、社会的な生物であると言われます。「人は一人では生きていけない」このテーマは、文学作品や音楽などあらゆる表現媒体において古くから扱われてきましたが、それは人文科学・社会科学と分類される諸学問の究極のテーマでもあります。すなわち、人間というものは周囲の人間や物事とどのような関係性を持っているのか、という疑問、問です。 社会学という学問は、社会的な生物である人間の「社会的な」という部分にフォーカスを合わせ、人間(たち)を観察し、分析し、人間社会における法則性を発見しようという学問です。					この授業では、社会学という学問が生まれるにいたった背景から話をはじめ、学生皆さんの多くが共通に経験した、またこれから経験するであろう社会について概説します。また現代社会の問題について、社会学の観点からの指摘を紹介しします。 【到達目標】 基本的な社会学の知識を習得すること、「社会学的なものの見方」理解すること。					
回数	授業内容					学習目標				
1	「社会学の成立～近代社会へのまなざし」					社会学の基本的な視点を理解する				
2	「社会学第1世代と第2世代～ヨーロッパ編」					社会学の成立と近代化による社会変動の関連を理解する				
3	「社会学第2世代～ミクロ社会学とコミュニケーション」 ①					ミクロ社会学の視点と基本的な考え方を理解する				
4	「社会学第2世代～ミクロ社会学とコミュニケーション」 ②					コミュニケーション理論について理解を深める				
5	「映画『聲の形』をもとに①～ゴッフマン社会学とスティグマ」					ゴッフマンのコミュニケーション理論について理解する				
6	「映画『聲の形』をもとに②～“病”の意味と語り」					illnessとdiseaseの違いならびに「病の意味」を理解する				
7	「映画『聲の形』をもとに③～関係性の変化とスティグマ」					スティグマとコミュニケーションの特徴について理解する				
8	「まとめ」					授業全体のまとめ				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	特に用いない。									
成績評価 方法	授業中適宜紹介する。									
	出席点10点 レポート90点 計100点					履修上の 注意		授業中に質問等を受講生に投げかけることがあります。 積極的な発言を期待します。		
						実務経験 紹介				

科目区分	基礎	履修形態	必修	科目名	情報科学Ⅱ					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	2年	作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	富田 公治						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 プレゼンテーションソフト(PowerPoint)の使い方とスライドのまとめ方について学習する。表計算ソフト(Excel)の機能と応用を学習する。					【到達目標】 ・PowerPointの基本的な機能を使用することができる。 ・Excelの基本的な関数の仕様とその他の有用な機能を理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	PowerPoint (1)					PowerPointでプレゼンテーションを作成する方法を学ぶ。 スライド作成、図などの挿入の方法を学ぶ。				
2	PowerPoint (2)					PowerPointでプレゼンテーションを作成する方法を学ぶ。 表、グラフなどの挿入の方法を学ぶ。				
3	PowerPoint (3)					PowerPointでプレゼンテーションを作成する方法を学ぶ。 画面切り替え、アニメーションの方法を学ぶ。				
4	PowerPoint 課題					PowerPointの課題				
5	Exce (論理関数・検索/行列関数)					Excelの論理関数・検索/行列関数の使い方を学ぶ。				
6	Exce (並べ替え・フィルタ・マクロ)					Excelの並べ替え・フィルタ・マクロの使い方を学ぶ。				
7	Excel課題					Excelの課題				
8	課題					課題の遂行と提出				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	30時間でマスター Office2019 (情報科学Ⅰで使用したテキスト)					実務出版編集部 編			実務出版	
成績評価 方法	毎回の授業態度、出席、課題により総合的に評価する。 1. 授業態度、出席(30%) 2. 課題(70%)					履修上の 注意	・USBメモリを使うので各自準備すること。			
						実務経験 紹介				

2 年 次

専 門 基 礎 科 目

- ◇生理学実習
- ◇内科学Ⅰ
- ◇内科学Ⅱ
- ◇小児保健学
- ◇精神医学
- ◇神経内科学
- ◇耳鼻咽喉科学
- ◇形成外科学
- ◇リハビリテーション医学
- ◇歯科・口腔外科学
- ◇解剖学実習
- ◇呼吸・発声・発語系の構造・機能・病態
- ◇人間発達学
- ◇学習・認知心理学
- ◇音響学
- ◇聴覚心理学

言語聴覚学科

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	生理学実習					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	ST教員						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 生理学Ⅰ～Ⅲの講義等から得た知識を深めるために、バイタルサイン測定、スパイロメトリ測定、心電波形の読み取り、感覚検査などを実習し、人体の生理機能への理解を深める					【到達目標】 1. 実習を通して生理的現象について知識と実際を関連付けることができる。 2. 生理的活動のデータ収集が行え、結果を解釈できる。 3. 実習によって得られた結果をまとめたり報告することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	ガイダンス					当講義の位置づけや概要、注意事項などについて知る				
2	栄養生理(1)					栄養生理について演習を行い、理解を深める				
3	栄養生理(2)					栄養生理について演習を行い、理解を深める				
4	バイタルサイン(1)					バイタルサインについて演習を行い、理解を深める				
5	バイタルサイン(2)					バイタルサインについて演習を行い、理解を深める				
6	呼吸(1)					呼吸機能やメカニズムについて学ぶ				
7	呼吸(2)					呼吸機能について演習を行い、理解を深める				
8	呼吸(3)					呼吸機能について演習を行い、理解を深める				
9	呼吸(4)					呼吸機能について演習を行い、理解を深める				
10	発声(1)					発声機能やメカニズムについて学ぶ				
11	発声(2)					発声機能について演習を行い、理解を深める				
12	発声(3)					発声機能について演習を行い、理解を深める				
13	感覚					感覚について演習を行い、理解を深める				
14	心電図(1)					心電図について演習を行い、理解を深める				
15	心電図(2)					心電図について演習を行い、理解を深める				
教科書	書籍名					著者				
	資料を配布する									
参考図書等	生理学テキスト 第8版					大地陸男 著			文光堂	
成績評価方法	出席・実習(40%) ワークシート・レポート等(60%)					履修上の注意	全講義、実習着を着用し出席すること 準備が必要な場合があるため、事前に確認すること			
						実務経験紹介	当領域での実務経験あり			

科目 区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	内科学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	前後期	授業形態	講義
担当	日高 勲 白上 巧作 村木 和彦						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 高齢化に伴う慢性疾患の増加と疾病構造の変化は、リハビリテーションニーズに直結し、多くの方々が私たちの専門職とかかわりを持つことになる。この領域における疾病の特徴・病態・内科的治療を理解することは重要である。 その一方で高血圧、糖尿病、心疾患などの生活習慣病の予防は、医療費等の高騰を防ぐためにも優先されるべきものと位置づけられており、生活習慣の改善も専門職の興味を持つべく領域である。					【到達目標】 ・高齢者が罹患しやすい疾病についての理解を深める。 ・生活習慣病の予防対策を述べることができる。					
回数	授業内容					学習目標				
消化管疾患全 5回 筆記試験 1回					・消化管疾患の症候を理解する。 ・消化管疾患の病態生理を理解する。 ・消化管疾患の各論を理解する。					
腎・泌尿器疾患全 5回 筆記試験 1回					・腎疾患の症候を理解する。 ・腎疾患の病態生理を理解する。 ・腎・泌尿器疾患各論を理解する。					
血液疾患・内分泌疾患全 5回 筆記試験 1回					・血液疾患・内分泌の症候を理解する。 ・血液疾患・内分泌の病態を理解する。 ・血液疾患・内分泌の各論を理解する。					
* 「内科学Ⅰ」前期開講の科目ですが、今年度は前後期で開講されます。										
* 個々の領域において、筆記試験が実施されます。(全て60点以上で合格)										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学					編集 前田 眞治		医学書院		
成績評価 方法	1.授業態度(20%) 2.筆記試験の総点(80%)					履修上の 注意	前期開講科目ですが、前後期で開講します。 1年時の生理学復習をしながら、授業に臨むこと。教科書にて授業内容を振り返ること。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	内科学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	國近 英樹 岩本 節子						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 内科疾患の中でも、循環器系の障害のリハビリテーション分野に占める割合は大きい。特に、心疾患や呼吸器疾患の病態を理解することは重要である。また健康寿命の延長に伴って高齢者の健康管理も予防という観点から重要視され、強いては健康寿命の延伸へ直結する分野でもある。 後半は、「高齢者の健康」に焦点をあて、内科疾患への理解を深める。					【到達目標】 ・循環器系の疾患についての理解を深める。 ・「高齢者の健康増進」についてキーワードを述べることができる。					
回数	授業内容					学習目標				
循環器疾患 全7回 解剖 心電図 心不全 高血圧 弁 その他 まとめ 筆記試験 1回					循環器疾患の症候を理解する。 循環器疾患の病態生理を理解する。 循環器疾患の各論を理解する。					
老年期医学 全7回 老年医学 老年医学 循環器 老年医学 呼吸器 老年医学 消化器1 老年医学 消化器2 老年医学 腎・生活習慣病 老年医学 代謝・血液・内分泌 筆記試験 1回					老年医学 疾患の症候を理解する。 老年医学 疾病の病態生理を理解する。 老年医学 各論を理解する。					
* 個々の領域において、筆記試験が実施されます。(全て60点以上で合格)										
教科書	書籍名					著者		出版社		
	標準理学療法学作業療法学 内科学					編集 前田 眞治		医学書院		
参考 図書等										
成績評価 方法	1.授業態度(20%) 2.筆記試験の総点(80%)					履修上の 注意	1年時の生理学復習をしながら、授業に臨むこと。「高齢者の健康」についてイメージできるようになる。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	小児保健学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	田原卓浩 他						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 成長・発達過程における子どもの特性をふまえ、小児疾患についての理解を深める。また、心身の問題だけでなく小児を取り巻く環境(母子家庭、社会情勢等)にも目を向け、健全な発達が保証されるよう医療人としての意識を養い育てる。					【到達目標】 ・自分の子どもの育つ道筋を客観的に捉えられるような専門職としての力量を備える ・子どもの障害の概要を理解する ・障害児の特性の理解とその対応が考えられる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	子どもの病気(含 感染症の予防)					基本的な小児疾患の種類や特性について理解する				
2	子どもの病気とホームケア					病気に対してのホームケアのポイントを理解する				
3	子どもと家族を取り巻く環境の変化					成長と共に児童の環境が変化するが、その変化のポイントを理解する				
4	大事にしたい子育て術 他					子育てにおける重要なポイントを理解する				
5	子供の成長と発達 新生児～乳幼児 1					新生児～乳幼児の特徴的な正常発達を理解する				
6	子供の成長と発達 新生児～乳幼児 2					新生児～乳幼児の特徴的な正常発達を理解する				
7	子どもの発達 運動・社会性の発達 1					基本的な運動・社会性の正常発達を理解する				
8	子どもの発達 運動・社会性の発達 2					基本的な運動・社会性の正常発達を理解する				
9	乳幼児健診とそのフォロー:遠城寺式乳幼児分析的検査の応用					乳幼児健診の内容とその後のフォローを理解する				
10	障害児学:子どもの障害の特徴を知る その1 発達障害					発達障害の特性を理解する				
11	障害児学:子どもの障害の特徴を知る その2 肢体不自由児					肢体不自由児の特性を理解する				
12	障害のある子の子育て(療育)					障害のある子の子育ての実情を理解する				
13	発達障害児の支援制度について					発達障害児への支援制度の概要を理解する				
14	障がいのある児童や発達に特性のある児童のための福祉サービス ～児童発達支援～					児童発達支援の制度や概要を理解する				
15	障がいのある児童や発達に特性のある児童のための福祉サービス ～放課後等デイサービス～					放課後等デイサービスの制度や概要を理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
成績評価 方法	試験 100%					履修上の 注意	正常発達を理解するという姿勢を求める			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	精神医学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	非常勤講師						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 リハビリテーションに携わる者の実践に役立つ精神医学の基本知識として、精神疾患の症状、経過、診断、治療の基礎を学ぶ。また、現代社会における精神科領域の諸問題について知り、メンタルヘルスの重要性や精神医療の果たす役割などについて学習する。					【到達目標】 主要な精神疾患の症状について理解する 精神疾患に対する薬物療法をはじめとする治療について理解する メンタルヘルスの重要性・精神医療の果たす役割を理解する					
回数	授業内容					学習目標				
1	精神医学の概要 (精神医学とは、歴史、精神医学を学ぶ意義など)					精神医学の定義、歴史、精神医学を学ぶ意義などについて理解できる				
2	精神障害の成因と分類、精神機能の障害と精神症状					精神障害の成因と分類について理解できる 精神機能の障害と精神症状について理解できる				
3	統合失調症について①					統合失調症について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
4	統合失調症について②									
5	気分障害について					気分障害について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
6	アルコール依存症について①					アルコール依存症について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
7	アルコール依存症について②									
8	思春期・青年期の精神障害①					思春期・青年期の精神障害について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
9	思春期・青年期の精神障害②									
10	思春期・青年期の精神障害③									
11	思春期・青年期の精神障害④									
12	老年期の精神障害(認知症を中心に)					認知症を中心に老年期の精神障害について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
13	パーソナリティ障害について					パーソナリティ障害について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
14	神経症性障害について					神経症性障害について、症状、経過、診断、治療の基礎を理解する				
15	リエゾン精神医学					リエゾン精神医学について理解し説明できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学 第4版増強版					編集:上野 武治		医学書院		
参考 図書等	適宜紹介									
成績評価 方法	筆記試験 100%					履修上の 注意	資料を配布する場合もあるが、毎回テキストを持参すること			
							実務経験 紹介			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	神経内科学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	村重 武美 , 濱本 尊博 , 正司 真規						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 リハビリテーションに携わる専門職として、神経症候学及び診断学の理解は必須です。 病院施設で治療・関係する患者や利用者の病態なくして、専門職としての技術の展開・発展はない。機能解剖学をベースにして、臨床的な病態・症状について講義する					【到達目標】 ・1年次の『解剖学・生理学』を臨床的(病態・症状)に理解する ・脳血管障害・神経筋疾患等のリハビリテーションに必要な知識を習得する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション(神経症候学とは)				神経症候学とは何か説明できる					
2	神経放射線学				神経疾患の脳・脊髄・神経CT・MRI画像から、疾患名が導き出せる					
3	神経電気生理学				神経、脳、筋肉、心臓やその他の組織または細胞の電氣的性質と生理機能との関係を大まかに理解する					
4	てんかん、脳炎				てんかん、脳炎の代表的な種類や症状が説明できる					
5	パーキンソン病				医師から見た基本的なパーキンソン病の病態と特徴を理解する					
6	運動ニューロン疾患				医師から見た基本的な運動ニューロン疾患(ALSなど)の病態と特徴を理解する					
7	トピックス				近年話題となっている神経疾患を取り上げ、必要事項を理解する					
8	脳の機能・解剖				基本的な脳の機能と解剖を理解する					
9	運動と感覚(錐体路・皮質脊髄路等)				運動と感覚の種類や経路を理解し、判別できる					
10	神経学的検査				基本的な神経学的検査の内容を理解する					
11	神経変性疾患(パーキンソン病関連)				セラピストから見て必要な神経変性疾患の病態や特徴を理解する					
12	筋肉疾患				セラピストから見て必要な筋肉疾患の病態や特徴を理解する					
13	脱髄疾患				セラピストから見て必要な脱髄疾患の病態や特徴を理解する					
14	脳血管障害				セラピストから見て必要な脳血管疾患の病態や特徴を理解する					
15	認知症関連				セラピストから見て必要な認知症関連疾患の病態や特徴を理解する					
教科書 参考 図書等	書籍名				著者		出版社			
	『病気がみえる Vol. 7 脳・神経』						MEDIC MEDIA			
成績評価 方法	試験 村重50% 濱本・正司50%				履修上の 注意					
					実務経験 紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	耳鼻咽喉科学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	竹野 研二、正司 真規、平野 春樹						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚士に必要な耳鼻咽喉科学の知識を体系的に学ぶ					【到達目標】 ・聴器の解剖と生理に基づいて、疾患の病態と診断法・治療法を理解できる。 ・平衡器の解剖と整理に基づいて、疾患の病態と診断法・治療法を理解できる。 ・鼻副鼻腔の解剖と整理に基づいて、疾患の病態と診断法・治療法を理解できる。 ・口腔・咽頭の解剖と整理に基づいて、疾患の病態と診断法・治療法を理解できる。 ・喉頭の解剖と整理に基づいて、疾患の病態と診断法・治療法を理解できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	耳の解剖と疾患について					基本的な耳の解剖と疾患を理解する				
2	鼻の解剖と疾患について					基本的な鼻の解剖と疾患を理解する				
3	口腔・咽頭の疾患と解剖について					基本的な耳の解剖と疾患を理解する				
4	口頭の解剖と疾患について					基本的な耳の解剖と疾患を理解する				
5	平衡機能とめまい					三半規管や前庭の仕組みや平衡が起こるメカニズムについて理解し、めまいの種類や平衡機能検査、平衡機能障害が起こる疾患について知識を深める。				
6	耳鼻咽喉科に関わる画像診断					言語聴覚士に関わる聴覚器、鼻腔、喉頭、咽頭、肺の画像を分析して評価と説明ができる。				
7	外耳と中耳疾患					外耳と中耳に関わる疾患についての見識を深めることができ説明できる。				
8	内耳と耳に関わる疾患					内耳と耳に関わる疾患についての見識を深めることができ説明できる。				
9	眼振のしくみと耳鳴検査(演習)					眼振の種類や仕組みを説明できる。さらに、耳鳴り検査の知識習得と実際に検査ができることを目標とする。				
10	咽頭の解剖					内視鏡での解剖学的な位置関係を把握することができる				
11	喉頭の解剖					内視鏡での解剖学的な位置関係を把握することができる				
12	嚥下内視鏡検査について(VE)1					嚥下内視鏡の検査概要を説明できる				
13	嚥下内視鏡検査について(VE)2					嚥下内視鏡の評価内容を説明できる				
14	嚥下内視鏡検査について(VE)3					代表的な嚥下障害の症状の評価が出来る				
15	まとめ					耳鼻咽喉科の内容を振りかえることができる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
参考 図書等										
成績評価 方法	中間試験(竹野60%) 期末試験(正司20%・平野20%)					履修上の 注意				
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	形成外科学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	木村得尚 身原弘哉 木戸直博						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚障害の関連において、形成外科学の基本知識と手技、先天性形態異常、顔面外傷、頭頸部腫瘍の術語変形、口唇口蓋裂、各種機能障害などについて学ぶ。					【到達目標】 1. 形成外科学への理解 2. 口唇口蓋裂に対する言語療法の目的を知り、言語聴覚士としての役割を理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	形成外科とは					形成外科学の領域を理解する				
2	形成外科基本手技(Z形成 W形成 瘢痕形成)					形成外科の基本治療を理解する				
3	形成外科基本手技(植皮 皮弁形成)					形成外科の基本治療を理解する				
4	熱傷について					熱傷の病態や治療過程を理解する				
5	形成外科で取り扱う皮膚疾患					皮膚疾患の概要を理解する				
6	顔面外傷 口蓋裂					顔面外傷、口蓋裂の概要を理解する				
7	悪性腫瘍とその再建					顔面頭頸部、乳房、その他の再建方法を理解する				
8	唇裂 口蓋裂の治療					医学的な治療方法を理解する				
9	口唇口蓋裂とは					口唇口蓋裂の概要を理解する				
10	口唇裂、口蓋形成前後の言語管理					口唇口蓋裂患者への言語治療のあり方を理解する				
11	鼻咽腔閉鎖機能不全の評価と取り扱い					鼻咽腔閉鎖機能不全の原因や評価方法を理解する				
12	口蓋裂二次手術					口蓋裂二次手術の内容を理解する				
13	口腔癌と構音指導					頭頸部癌患者への言語治療のあり方を理解する				
14	その他の器質的問題に伴う構音障害(舌小帯短縮症等)					舌小帯短縮症等の器質性構音障害の原因となる疾患の種類を理解する				
15	総括									
教科書	書籍名					著者		出版社		
	『標準形成外科学 第7版』					平林 慎一(監修)		医学書院		
参考 図書等										
成績評価 方法	木村・身原試験(50%)、木戸試験(50%)					履修上の 注意	特別講義としての集中講義となります。開講日程に注意しておくこと。			
						実務経験 紹介				

科目 区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	リハビリテーション医学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	2年	理学・作業・言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	小林 誠						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 リハビリテーションという言葉は、“障害を受けた者を回復させる”という意味があり、「リハビリテーション医学」の中でも中心的役割を担う循環器系に焦点をあてて、調節機構の原理とそれらが破綻した際の病態生理について解説する。					【到達目標】 ・循環器系の生理的調節機構を理解し、さらにそれらが破綻して病気や障害を発生させるメカニズムを理解する。次に、病気や障害を回復させる治療法について理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション 循環器の基礎の基礎				循環器の基本的特性、病態生理について理解する					
2	筋収縮のメカニズムと調節機構				筋収縮のメカニズムと調節機構を理解する					
3	心臓の機械的特性				心臓の機械的特性と調節機構、病態生理を理解する					
4	心機図				心機図の成り立ち、病態生理を理解する					
5	心臓の電気的特性と心電図				心臓の電気的特性と心電図の基本、およびその病態生理を理解する。					
6	循環調節機構1				人体の循環調節機構の調節メカニズムと病態生理を理解する					
7	循環調節機構2				人体の循環調節機構の調節メカニズムと病態生理を理解する					
教科書 参考 図書等	書籍名				著者		出版社			
	必要な資料は、適宜配布する。									
成績評価 方法	1. 授業態度・参加度(30%) 2. 確認試験(70%)				履修上の 注意					
					実務経験 紹介					

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	歯科・口腔外科学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	徳本 憲道						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 歯、顎、口腔の発生、構造、機能について、また、歯科・口腔疾患の病態、治療法ならびに予防法について言語聴覚士国家試験出題基準に準拠した内容でスライド・ビデオなど用いた視覚的授業を行う。毎回、授業内容の要点をプリントにして配布する。					【到達目標】 歯、顎、口腔の役割を理解し、歯科・口腔疾患が言語、聴覚に及ぼす影響について専門的、基礎的知識を身につける。					
回数	授業内容					学習目標				
1	歯科学概論					歯科学について大まかに理解する				
2	口腔衛生学概論					口腔衛生学について大まかに理解する				
3	口腔外科学総論					口腔外科学について総論的に理解する				
4	外傷、不正咬合					外傷、不正咬合について理解する				
5	舌の異常、顎変形症					舌の異常、顎変形症について理解する				
6	言語障害と関係ある口腔疾患総論					歯科口腔疾患と言語障害との関係を総論的に理解する				
7	口唇裂					口唇裂及び口唇裂にかかわる諸問題について理解する				
8	口蓋裂					口蓋裂及び口蓋裂にかかわる諸問題について理解する				
9	口唇裂・口蓋裂の術後ケア					口唇裂・口蓋裂の術後ケアについて理解する				
10	口腔領域(粘膜、顎骨、唾液腺)の腫瘍					口腔領域の腫瘍について理解する				
11	顎関節症、唾液腺疾患					顎関節症、唾液腺疾患について理解する				
12	神経疾患					神経疾患について理解する				
13	補綴処置の役割					補綴処置の役割について理解する				
14	中間試験(教科書、ノート等の持込み可)					学習の習熟度を把握し、不足部分を点検する				
15	口腔の再建					口腔の再建について理解する				
教科書	書籍名					著者			出版社	
	言語聴覚士のための基礎知識 臨床歯科医学・口腔外科学 第2版					夏目 長門 編 徳本憲道ほか分担執筆			医学書院	
参考 図書等	言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学第2版					道 健一 他			医歯薬出版	
	歯科医院外来の口腔外科診療アトラス					徳本憲道著			クインティセンス出版	
成績評価 方法	中間試験:10%、期末試験:90% 欠席日数も評価の対象となる場合がある					履修上の 注意	1年次に履修した解剖学・生理学が理解されていることを前提に授業を進めていくので、復習をしておくこと			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	解剖学実習					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	正司 真規、平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 解剖学Ⅰ・Ⅱからさらに発展して、言語聴覚士に必要な解剖学的知識を養う。					【到達目標】 ・頭蓋骨のスケッチ ・視覚系・聴覚系の解剖 ・中枢神経の構造と実態 ・脊髄・脳神経とそれに関わる伝導路					
回数	授業内容					学習目標				
1	口腔と鼻腔					言語聴覚士に必要な口腔と鼻腔の基本構造を理解する。				
2	頭蓋と舌筋					言語聴覚士に必要な口蓋と舌筋の基本構造を理解する。				
3	咽頭と喉頭					言語聴覚士に必要な咽頭と喉頭の基本構造を理解する。				
4	舌骨筋と声帯、呼吸器					言語聴覚士に必要な舌骨筋と声帯、呼吸器の基本構造を理解する。				
5	視覚系の解剖					視覚系の基本構造を理解する。				
6	外耳と中耳、内耳及び聴覚野					外耳と中耳、内耳及び聴覚野の詳細な説明が可能になることを目標とする。また、レポートの記述が行える。				
7	上行伝導路と下行伝導路					上行伝導路と下行伝導路の説明が出来るようになる。				
8	中枢神経1					中枢神経と末梢神経が区別できるようになる				
9	中枢神経2					MRI画像(脳画像のスライス画像)の理解を深める				
10	中枢神経3					皮質延髄路、皮質脊髄路、偽性球麻痺の説明ができる				
11	脳神経					脳神経と球麻痺について理解を深める				
12	解剖視聴(DVD)					実際の解剖の映像を見ることで、解剖実習に行く前の予備知識の習得や準備を行う。				
13	解剖学実習ガイダンス					解剖学実習に行く前の注意事項や心構えを得る。				
14	解剖学実習(演習)					実際の解剖体験を通して、教科書では得られない詳細な人体の構造を理解し、倫理観を養うことを目標とする。				
15	解剖学実習(演習)					実際の解剖体験を通して、教科書では得られない詳細な人体の構造を理解し、倫理観を養うことを目標とする。				
教科書	書籍名					著者				
	『プロメテウス 解剖学アトラス頭頸部/神経解剖』第3版					坂井健雄、河田光博				
	『病気がみえる ⑦脳・神経 第2版』									
	『病気がみえる ⑬耳鼻咽喉科』									
	『からだが見えるー人体の構造と機能ー』									
	『イラスト解剖学 第8版』					松村譲児				
参考図書等	『解剖学カラーアトラス 第9版』					J.W.Rohen, 横池千代, E. Lütjen-Drecoll				
						医学書院				
成績評価方法	期末試験(正司40%、平野45%)、レポート(鼻・喉頭・咽頭・気管のどれか10%、解剖学実習5%)					履修上の注意	教科書を使う講義とスケッチ(実習形式)と使い分けるので、それに応じた準備をする。解剖学実習では、ご献体と関わることになるので厳粛に実習を行うこと。			
						実務経験紹介	言語聴覚士として医療機関で実務経験あり(正司・平野)			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	呼吸・発声発語系構造・機能・病態					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	竹本成子・川北淳一郎・平野春樹						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚士としての必要な人体の機能構造及び病態について各論的に説明し、より専門的に解剖・生理の分野を学んでいく。					【到達目標】 ・言語聴覚士に必要な人体の解剖生理について理解する。 ・発話のメカニズム及び病態について理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	発声発語に関連する脳神経と発話のメカニズム					呼吸発声発語器官に必要な発話のメカニズムと脳神経についての基礎知識を習得できる				
2	解剖各論①(頭部・顔面)					呼吸発声発語器官に関わる頭部や顔面の解剖生理を把握し説明できる。				
3	解剖各論②(口蓋・舌)					呼吸発声発語器官に関わる口蓋や舌の解剖生理を把握し説明できる。				
4	解剖各論③(咽頭)					呼吸発声発語器官に関わる咽頭の解剖生理を把握し説明できる。				
5	解剖各論④(喉頭の軟骨)					呼吸発声発語器官に関わる喉頭の軟骨の解剖生理を把握し説明できる。				
6	呼吸器官の生理・解剖					呼吸器官の生理・解剖について知る				
7	喉頭の生理・解剖					喉頭の生理・解剖について知る				
8	声帯の生理・解剖					声帯の生理・解剖について知る				
9	舌骨上筋群と舌骨下筋群					舌骨周囲筋について知る				
10	口腔器官・構音器官の生理・解剖					構音器官について知る				
11	舌の生理・解剖					舌の生理・解剖について知る				
12	咽頭・喉頭の診察・検査					咽頭・喉頭の診察や検査について知る				
13	咽頭の疾患					咽頭の疾患について知る				
14	喉頭の疾患					喉頭の疾患について知る				
15	その他の疾患					その他の疾患について知る				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	病気が見える vol.13 耳鼻咽喉科							MEDIC MEDIA		
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 発声発語障害学第3版					熊倉勇実・今井智子 編集		医学書院		
	ことばと聞こえの解剖学					ジョン・M・パーマー 著		学苑社		
成績評価 方法	期末試験:30%(竹本) 期末試験:30%(平野) 期末試験:20%(川北) 小テスト:20%(川北)					履修上の 注意	※第1～5回:平野、第6～11回:川北、 第12～15回:竹本成子先生			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	人間発達学					
単位数	2	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	福田 みのり						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 発達段階ごとに講師が発達特徴を概説する。受講者は講義内容や教科書を踏まえて各自が問題意識を持ち、その中から2～3つのテーマについてグループで深めて発表を行う。これにより、学習した内容を自分たちの生活と結びつけて考えていく視点を養う。					【到達目標】 ・将来的に向かい合うクライアントの発達段階の特徴を理解し、彼らを支援するのに必要な知識と社会的スキルの獲得を目指す。 ・複雑で厄介な問題に出くわしたとき、どのような課題解決への道を見つけ出していくのか、問い、考え、実践するための基礎的な力を涵養する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション、生涯発達心理学					生涯発達心理学の考え方について理解する				
2	発達の原則と理論					発達の原則について理解し、発達の様々な理論について説明することができる				
3	発達とは、人口問題と発達（演習）					発達とはどのようなものかについて説明でき、少子高齢化社会における発達の諸課題について気づく				
4	胎児期と乳児期の特徴					胎児期と乳児期の発達の特徴について理解する				
5	子育て・乳幼児・愛着をめぐる課題（演習）					乳幼児の特徴とそれを支援するおとなの在り方について自分なりに考えることができる				
6	幼児期の特徴 －視点の獲得					幼児期の特徴、特に認知発達における特徴について理解する				
7	幼児期における遊び・自己認識・他者認識（演習）					幼児期の特徴とそれを支援するおとなの在り方について自分なりに考えることができる				
8	児童期の特徴 －リテラシーと社会性					児童期の特徴、社会性の発達について理解する				
9	教育・ジェンダー・発達障害をめぐる課題（演習）					児童期の特徴と児童をとりまく社会環境について自分なりに考えることができる				
10	青年期の特徴 －アイデンティティの獲得					青年期の特徴について理解し、アイデンティティについて説明できる				
11	知能・アイデンティティをめぐる課題（演習）					知的発達について理解し、自己形成におけるアイデンティティ獲得の意味について自分なりに考えることができる				
12	成人期の特徴 －次世代を育てる					成人期の特徴と中年期のストレスについて理解する				
13	親になることをめぐる課題（演習）					女性のアイデンティティと育児不安といった現代の社会環境について自分なりに考えることができる				
14	老年期の特徴					老年期の特徴について理解する				
15	老年期の課題、時間と発達（演習）					老年期の特徴とそれを支援する専門職の在り方について自分なりに考えることができる				
16	まとめ、テスト					目指す国家資格との関連性において、人間発達学を学んだ意義について説明できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	子どもも育つ おとなも育つ 発達の心理学					柏木 恵子（著）		萌文書林		
参考 図書等	リハビリテーション医学講座2 人間発達学					上田 礼子		医歯薬出版		
	生涯発達心理学のすすめ					子安 増生		有斐閣選書		
成績評価 方法	演習発表、グループワーク成果(30%) レポート形式テスト(70%)					履修上の 注意	講義者の講義比重を軽く、受講者の思考、発言、発表スキルの発展を促す、アクティブラーニング形式の講義形態であるので、真摯且つ積極的な受講態度を期待する。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	学習・認知心理学					
単位数	2	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	山田 弘幸						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 本科目では、学習心理学および認知心理学の基礎概念について、言語聴覚士の臨床業務との関連から理解し習得する。					【到達目標】 ・学習および条件づけについて理解する。 ・感覚・知覚・認知について理解する。 ・記憶の種類、記憶の過程、記憶モデルについて理解する。 ・概念、知識、問題解決等について理解する。 ・高次脳機能の概要について理解する。 ・各種関連概念と言語聴覚療法との関連を理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	心理学と言語聴覚療法					心理学と言語聴覚療法の関連について理解する				
2	感覚・知覚・認知／錯覚(錯視、マガーク効果)／感覚的順応					感覚と知覚、認知について理解する				
3	感覚閾値、弁別閾値					感覚閾値について理解する				
4	音の三要素と聴覚の三属性／聴野(可聴範囲)／メル尺度・ソーン尺度					音や聴覚について理解する				
5	図と地／パターン認識／感覚間の相互関係					視覚認知や感覚間の相互関係について理解する				
6	古典的条件づけ					古典的条件づけについて理解する				
7	オペラント条件づけ					オペラント条件づけについて理解する				
8	技能学習／言語聴覚療法と学習・条件づけ(ピープショウ検査、各種の訓練)					技能学習、言語聴覚療法と学習の関連について理解する				
9	注意／動機づけ／要求水準					注意、動機づけ、要求水準について理解する				
10	記憶①(二重貯蔵モデル)					記憶の二重貯蔵モデルについて理解する				
11	記憶②(ワーキングメモリ、処理水準)					ワーキングメモリや処理水準について理解する				
12	記憶③(忘却、記憶の研究方法)					忘却および記憶の研究方法について理解する				
13	概念・知識					概念・知識について理解する				
14	問題解決					問題解決について理解する				
15	言語とコミュニケーション					言語とコミュニケーションについて理解する				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士のための心理学 第2版					山田弘幸 編著		医歯薬出版		
	言語聴覚士テキスト 第3版					大森孝一他 編		医歯薬出版		
参考 図書等										
	言語聴覚療法習得のための必須基礎知識					山田弘幸 編著		エスコアール		
成績評価 方法	1. 授業への積極的参加(20%) 2. 期末試験(80%)					履修上の 注意	・本科目の履修に先立ち、聴覚系・視覚系・中枢神経系・発声発語系を中心に、人体の構造・機能に関する知識について復習しておくこと。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	音響学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	内野 英治						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 音の物理学および音波の性質について理解する。					【到達目標】 音とは媒質の振動であることを理解し、また、振幅、波長、周波数の概念が説明できる。共鳴の原理が説明できる。音のエネルギーと音圧レベルの違いが説明できる。周波数スペクトルの概念が説明でき、サウンドスペクトログラムについて説明ができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	導入、音の話					音とは媒質の振動であり、音は空気中や水中では伝わるが、宇宙空間では伝わらないことの理由を説明できる。				
2	波の基本的性質1 (波長、周期、周波数、角周波数、音速)					波(振動)を記述する基本的な物理パラメータを理解する。				
3	波の基本的性質2 (縦波、横波、進行波、定常波)					波の種類を理解する。				
4	弦の振動、開管閉管の共鳴					弦の振動モードについて理解すると共に、管の共鳴現象を理解する。				
5	外耳道、声道、うなり、回折、反射と屈折					外耳道や声道内で共鳴が起きていることを理解する。また、音(波)にも光(波)と同じようが現象があることを理解する。				
6	音圧と音の強さ					音圧の概念を理解する。また、音の強さとは音の物理的なエネルギーであることを理解する。				
7	感覚とデシベル					人の音感覚は対数的であることを理解する。音圧にはデシベル表現が用いられることの意味を理解する。				
8	デシベル計算の復習					対数の概念をまず復習し、デシベル計算(対数計算)に必要なとされる基本法則を理解する。				
9	音圧とdB変換					音響学で必要とされるデシベル変換について、簡単な計算ができるようになる。				
10	音圧レベル、聴力レベル、感覚レベル					聴覚分野で用いられる各種のデシベル表現について説明できる。				
11	音響利得、アンプ、補聴器					音の増幅について理解する。				
12	純音と音の種類、周波数スペクトル					一般の音は様々な周波数の音(純音)の組み合わせで構成されていることを理解する。				
13	スペクトル分析					音がどのような純音から構成されているかを分析するスペクトル分析について説明ができる。				
14	サウンドスペクトログラム					音に含まれている各周波数音の時間変化(サウンドスペクトログラム)について説明ができる。				
15	音のデジタル化 (アナログとデジタル)					アナログとデジタルの概念を理解し、音がデジタル化されることのメリットを説明できる。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士の音響学入門					吉田 友敬		海文堂		
参考 図書等	音入門 聴覚・音声科学のための音響学					C.E.Speaks 著 荒井 他訳		海文堂		
	音響学入門					吉久 伸幸 他		日新出版		
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意	特になし。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	聴覚心理学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	内野 英治						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 聴覚心理学について理解する。					【到達目標】 音の物理量と感覚量の違いが説明できる。dB尺度、フォン尺度、ソーン尺度、mel尺度の導入の経緯が説明でき、それぞれの尺度が説明できる。ピッチ感覚、マスキング、両耳聴について具体例を挙げて説明できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	音の大きさの知覚1 (スティーブンスのべき法則、ウェーバー・フェヒナーの法則)					スティーブンスのべき法則、ウェーバー・フェヒナーの法則を学習し、人の感覚が対数的であることを理解する。				
2	音の大きさの知覚2 (dB尺度、フォン尺度、等ラウドネス曲線)					音の強さ(物理量)の尺度がdB尺度であり、音の大きさ(感覚量)の尺度がフォン尺度であることを理解する。また、音の大きさの感覚が周波数に依存することを理解する。				
3	音の大きさの知覚3 (ソーン尺度、音の強さの弁別)					音の大きさの尺度(フォン尺度)が比率尺度ではないため、比率尺度であるソーン尺度を導入した理由を理解する。また、音の強さを弁別する仕組みについて理解する。				
4	音の高さの知覚1 (音の高さとオクターブ感覚、mel尺度)					音の高さを知覚するメカニズムを理解し、音の高さの心理尺度であるmel尺度について理解する。また、蝸牛内における神経興奮の位置とmel尺度との関係について理解する。				
5	音の高さの知覚2 (場所ピッチ、時間ピッチ、複合音の高さの知覚)					音の高さを知覚するメカニズムに、場所ピッチと時間ピッチがあることを理解する。また、複合音では基本周波数に対応した高さを感じていることを理解する。				
6	マスキング (同時マスキング、非同時マスキング)					二つの音を聴いた時に、一方の音の存在により他方の音が聞きにくくなる現象(マスキング)が、基底膜の振動や神経伝達のスピードと関係していることを理解する。				
7	両耳聴 (方向知覚、カクテルパーティ効果、先行音効果、ハース効果)					人が二つの耳を持っていることにより、様々な有益な効果があることを理解する。また、脳の高次機能とも絡む各種効果について理解する。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士の音響学入門					吉田 友敬		海文堂		
	音入門 聴覚・音声科学のための音響学					C.E.Speaks 著 荒井 他訳		海文堂		
	聴覚と音響心理学					日本音響学会編 境 久雄		コロナ社		
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意		音響学を履修済であること。		
						実務経験 紹介				

2 年 次

専 門 科 目

- ◇言語聴覚障害診断学
- ◇失語症学Ⅱ（評価診断）
- ◇失語症治療学Ⅰ
- ◇高次脳機能障害学Ⅰ
- ◇発達障害学Ⅱ
- ◇言語発達障害学Ⅰ
- ◇言語発達障害学Ⅱ
- ◇嚥下障害学
- ◇嚥下障害治療学Ⅰ
- ◇流暢性障害
- ◇小児聴覚障害学
- ◇聴力検査法演習
- ◇補聴器・人工内耳
- ◇臨床基礎実習

言語聴覚学科

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語聴覚障害診断学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	正司真規・川北淳一郎・平野春樹						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚障害を診断するにあたって、初回面接からスクリーニング検査を行い、総合的検査の実施までの流れを理解する。					【到達目標】 1. 初回面接を実施できる。 2. スクリーニング検査を実施できる。 3. スクリーニング検査から必要な総合的検査を選択し、言語聴覚障害の概要を理解できる。 4. 観察レポートや報告書を作成できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	言語聴覚障害の診断(1)					言語聴覚障害の診断について理解できる				
2	言語聴覚障害の診断(2)					言語聴覚障害の診断について理解できる				
3	言語聴覚療法の臨床的な流れ(1)					言語聴覚療法の臨床的な流れについて理解できる				
4	言語聴覚療法の臨床的な流れ(2)					言語聴覚療法の臨床的な流れについて理解できる				
5	対象者観察の方法(1)					対象者の観察方法について理解し実施できる				
6	対象者観察の方法(2)					記録: SOAPについて理解し実施できる				
7	対象者観察の方法(3)					スクリーニング検査について理解し実施できる				
8	対象者の検査(1)					スクリーニング検査から必要な総合的検査を選択できる				
9	対象者の検査(2)					総合的検査を実施できる				
10	対象者の検査(3)					総合的検査を実施できる				
11	対象者の記録(1)					言語聴覚療法の記録について理解できる				
12	対象者の記録(2)					言語聴覚療法の記録が実施できる				
13	対象者の記録(3)					言語聴覚療法の記録が実施できる				
14	対象者の報告書(1)					言語聴覚療法の報告書を作成できる				
15	対象者の報告書(2)					言語聴覚療法の報告書を作成できる				
16										
教科書	書籍名					著者		出版社		
	明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断第2版					大塚裕一 著		医学と看護社		
	明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断小児編					大塚裕一 著		医学と看護社		
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 言語聴覚障害学概論					藤田郁代 編著		医学書院		
	言語聴覚療法 臨床マニュアル 第3版					平野哲雄 編集		協同医書出版		
成績評価 方法	授業態度(30%)、課題・レポート(70%)					履修上の 注意	職域全般の面接・スクリーニング・観察・観察・記録・報告の技能習熟と向上を図ります。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	失語症学Ⅱ（評価診断）					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語と脳の関係や言語情報処理メカニズムなどに基づいて失語症という症候について学ぶ。 失語症の定義、原因疾患、症状などを理解し、評価・臨床へ結びつけるための基礎知識を身に付ける。					【到達目標】 1. 失語症の定義や原因疾患、失語症状を理解・定着させ、説明できる。 2. 演習を通して、失語症検査法についても学ぶ。 3. 失語症候群について理解を深める。					
回数	授業内容					学習目標				
1	失語症臨床の流れ					失語症の治療の流れについて理解する				
2	失語症の評価					失語症の評価について理解する				
3	SLTAの読み方(1)					SLTAの結果から症状分析ができる				
4	SLTAの読み方(2)					SLTAの結果から症状分析ができる				
5	SLTAの読み方(3)					SLTAの結果から症状分析ができる				
6	失語症語彙検査					失語症語彙検査を理解・実施できる				
7	失語症構文検査(理解)					失語症構文検査を理解・実施できる				
8	SLTA-st、SALA					SLTA-st、SALA失語症検査を理解・実施できる				
9	失語症構文検査(表出)					失語症構文検査を理解・実施できる				
10	CADL					CADLを理解・実施できる				
11	トークンテスト					トークンテストを理解・実施できる				
12	鑑別診断、言語病理学的診断					鑑別診断を行い、検査結果から適切な診断ができる				
13	問題抽出、目標設定(1)					検査結果から問題点抽出ができる				
14	問題抽出、目標設定(2)					問題点から目標設定ができる				
15	失語症のタイプ分類					純粋系の症状について理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	なるほど！失語症の評価と治療 失語症 臨床標準テキスト					小島和幸 編著 種村純 編著		金原出版 医歯薬出版		
参考 図書等	言語聴覚療法シリーズ 改訂 失語症 失語症学Ⅰ のテキスト					石川裕治 編著		建帛社		
成績評価 方法	実技試験：100%					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	失語症治療学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 失語症の言語治療について学び、評価や検査の分析結果から訓練計画の立案を理解・実践する。また演習を通して、失語症訓練の具体的方法や経過に合わせたアプローチ法などについて学びます					【到達目標】 1. 失語症評価から診断と訓練立案ができる。 2. 治療原則を理解するとともに代表的訓練法を学習する。 3. 失語症の回復過程を知り、言語治療計画を立てることができる 4. 失語症回復の各期の言語治療の特徴を知る。					
回数	授業内容					学習目標				
1	失語症基礎知識と評価・診断の振り返り					失語症学Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を確認できる				
2	言語治療の歴史と治療理論概論					言語治療の歴史や理論について理解する				
3	失語症治療理論					失語症治療理論について理解する				
4	訓練各論(1)					音韻理解訓練について理解し習得する				
5	訓練各論(2)					語彙理解訓練について理解し習得する				
6	訓練各論(3)					語彙表出訓練について理解し習得する				
7	訓練各論(4)					意味セラピーについて理解し習得する				
8	訓練各論(5)					復唱・音読訓練について理解し習得する				
9	訓練各論(6)					音韻表出訓練について理解し習得する				
10	訓練各論(7)					文字表出訓練について理解し習得する				
11	訓練各論(8)					動詞・助詞理解・表出訓練について理解し習得する				
12	訓練各論(9)					文の理解・表出訓練について理解し習得する				
13	訓練各論(10)					実用的訓練やAACIについて理解し習得する				
14	症例検討(1)					模擬症例を通して訓練立案ができる				
15	症例検討(2)					模擬症例を通して訓練立案ができる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	失語症Ⅰ・Ⅱで用いた教科書・ノート									
成績評価 方法	レポート:100%					履修上の 注意	失語症Ⅰ・Ⅱのノートを持参すること			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	高次脳機能障害学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義、演習を通して各高次脳機能障害に対して学ぶ。					【到達目標】 高次脳機能障害の多種多様性を学び、各障害に対して理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	高次神経機能障害とは何か ——一次脳機能の高次脳機能違いとは——					一次脳機能と高次脳機能の違いを説明できる				
2	失行症とは何か					失行症の定義を説明できる				
3	失行の古典的分類とは					失行の古典的分類を理解し概要を説明できる				
4	古典的分類以外の失行症について					失行症の近年主流となる分類を理解し概要を説明できる				
5	失行症者の動画から考えられる症状や障害を導き出す					失行症患者の動画を分析し、失行の種類を分析する				
6	失認、視覚失認について					失認、視覚失認の定義を説明できる				
7	視覚失認の種類や症状					視覚失認の種類と症状を説明できる				
8	相貌失認について					相貌失認の定義と概要を説明できる				
9	失認の検査や訓練法について					失認の検査名や訓練法について理解を深める				
10	失行と失認のまとめ					失行と失認の国家試験の問題を解いてみる				
11	記憶障害の定義や分類について					記憶障害の定義や記憶の分類について理解を深める				
12	記憶障害の分類や記憶メカニズムについて					記憶の分類について理解を深める。また、記憶のメカニズムについても理解を深める。				
13	記憶障害の原因疾患や病巣について					記憶障害の原因疾患と病巣について理解を深める。また、パベッツ回路を覚え説明できる。				
14	記憶障害の検査について					記憶分類ごとの検査の区別が出来るようになる				
15	記憶障害の訓練について					記憶障害の訓練と代償手段について説明できる。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚学 高次脳機能障害学 第3版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
	『高次脳機能障害学 第3版』					石合純夫		医歯薬出版株式会社		
成績評価 方法	試験100%					履修上の 注意	積極的に授業に参加し、発言すること			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	発達障害学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	藤田 久美						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 小児の言語障害及び関連する障害を評価するための検査の特徴を理解し、手続き、結果の処理、解釈などに関する知識を深める。発達障害の診断・評価に基づいた発達支援の実地を知り、評価の意義を考察することができる。					【到達目標】 ・幼児期までの全般的な定型発達を理解し説明できる ・小児分野の発達検査の内容について理解し説明できる ・小児分野の発達検査の意義を理解し説明できる ・発達検査の演習を通して小児分野のSTの役割を考察することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	子どもの発達と障害(定型発達の理解と発達の遅れについて)					定型発達の概要が理解できる				
2	言語発達障害の診断と評価①(田中ビネー式、津守式、遠城寺式、新版K式等)					各種検査の目的が説明できる				
3	各種検査の内容と実際②(田中ビネー式、津守式、遠城寺式、新版K式等)					各種検査の目的が説明できる				
4	遠城寺式乳幼児分析的式発達検査法の演習					マニュアルを確認しながら検査が実施できる				
5	発達障害の理解					各発達障害疾患それぞれの特性が理解できる				
6	発達障害の診断・評価の意義及び発達支援の方法					評価の役割と支援方法の概要を理解する				
7	発達障害の診断・評価(PEPⅢ、WISC-Ⅳ等)					各種検査の目的が説明できる				
8	PEP-R演習①(診断・評価と支援プログラム)					PEP-Rの検査の流れを理解する				
9	PEP-R演習②(幼児期の事例による演習・ロールプレイ)					マニュアルを確認しながら検査が実施できる				
10	PEP-R演習③(演習・ロールプレイ)					マニュアルを確認しながら検査が実施できる				
11	PEP-R演習④(演習・ロールプレイ)					マニュアルを確認しながら検査が実施できる				
12	PEP-R評価⑤(評価の実際・演習)					マニュアルを確認しながら検査が実施できる				
13	PEP-R評価⑥(発表・共有)					検査結果を発表し、他グループと情報共有ができる				
14	小児分野におけるSTの役割と専門性					小児分野におけるSTの役割を説明できる				
15	学びの共有と発表(検査の説明、演習・講義を通しての学び・考察)					演習・講義を通じての学びを振り返り、まとめを発表し情報の共有をはかる				
教科書	書籍名					著者				
	『標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版』					玉井ふみ/深浦純一				
参考図書等						医学書院				
成績評価方法	授業態度(演習)30点 ミニレポート20点 試験50点					履修上の注意				
						乳幼児期の定型発達に復習しておくこと 実務経験紹介				

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語発達障害学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 小児において言語発達障害に関連する障害の特性を理解し、指導・支援法までを学ぶ					【到達目標】 1. 障害別に定義や基本的な概念など基礎知識を理解し説明することができる 2. 障害別の指導・支援法を理解し説明することができる					
回数	授業内容				学習目標					
1	言語発達障害とは				言語発達障害を理解する					
2	自閉スペクトラム症				自閉スペクトラム症について理解する					
3	自閉スペクトラム症				自閉スペクトラム症について理解する					
4	自閉スペクトラム症				自閉スペクトラム症について理解する					
5	知的発達症(知的能力障害)				知的発達症(知的能力障害)について理解する					
6	知的発達症(知的能力障害)				知的発達症(知的能力障害)について理解する					
7	限局性学習症				限局性学習症について理解する					
8	限局性学習症				限局性学習症について理解する					
9	限局性学習症				限局性学習症について理解する					
10	特異的言語発達障害				特異的言語発達障害について理解する					
11	特異的言語発達障害				特異的言語発達障害について理解する					
12	特異的言語発達障害				特異的言語発達障害について理解する					
13	注意欠如多動症				注意欠如多動症について理解する					
14	脳性麻痺・重複障害				脳性麻痺・重複障害					
15	まとめ				14回までの講義内容の復習と理解					
教科書 参考 図書等	書籍名				著者		出版社			
	標準言語聴覚障害 言語発達障害学 第3版				玉井ふみ、深浦順一(編集)		医学書院			
	最新言語聴覚学講座 言語発達障害学				石坂郁代、水戸陽子(編著)		医歯薬出版			
成績評価 方法	期末試験				履修上の 注意					
					実務経験 紹介		本領域において臨床経験あり。			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語発達障害学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 小児の言語聴覚障害領域に必要な評価、及び評価方法を学ぶ。検査演習を通して検査法等の知識・技能を身に付ける。					【到達目標】 1. 検査の目的と概要を理解する 2. マニュアルに沿った方法を実施できる 3. 検査結果を解釈し、評価ができる					
回数	授業内容					学習目標				
1	評価の目的と方法					評価の目的と方法を理解する				
2	情報収集					情報収集の目的や方法を理解する				
3	発達検査(新版K式発達検査・遠城寺式乳幼児分析的発達検査法、乳幼児精神発達診断法)					発達検査の理解・実施ができる				
4	発達検査(新版K式発達検査・遠城寺式乳幼児分析的発達検査法、乳幼児精神発達診断法)					発達検査の理解・実施ができる				
5	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
6	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
7	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
8	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
9	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
10	言語検査(S-S法・LCスケール・LCSA・PVT-R)演習					言語検査の理解・実施ができる				
11	知能検査(WISC-Ⅳ・K-ABCⅡ・田中ビネーⅤ)演習					知能検査の理解・実施ができる				
12	知能検査(WISC-Ⅳ・K-ABCⅡ・田中ビネーⅤ)演習					知能検査の理解・実施ができる				
13	知能検査(WISC-Ⅳ・K-ABCⅡ・田中ビネーⅤ)演習					知能検査の理解・実施ができる				
14	知能検査(WISC-Ⅳ・K-ABCⅡ・田中ビネーⅤ)演習					知能検査の理解・実施ができる				
15	まとめ					これまでの講義内容が理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	標準言語聴覚障害 言語発達障害学 第3版					玉井ふみ、深浦順一(編集)		医学書院		
	国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査 検査マニュアル改訂第4版					小寺富子 編著		エスコアール		
	最新言語聴覚学講座 言語発達障害学					石坂郁代、水戸陽子(編著)		医歯薬出版		
成績評価 方法	期末試験					履修上の 注意				
						実務経験 紹介		本領域において臨床経験あり。		

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	嚥下障害学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	池田 卓生 ・ 羽飼 富士男						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 摂食嚥下障害の概要(嚥下5期モデル、3相)ならびに 障害の原因疾患、検査などを講義や演習を通して学ん でいきます。					【到達目標】 1)嚥下の解剖と生理について理解する。 2)嚥下障害の原因と種類について理解する。 3)嚥下障害の検査及び評価について理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	摂食嚥下障害をきたす病因・病態・障害					摂食嚥下障害の原因について理解する				
2	摂食嚥下障害の病歴・身体所見					摂食嚥下障害の所見について理解する				
3	摂食・嚥下の観察					口腔器官や嚥下器官の観察について理解する				
4	摂食嚥下障害のための検査(スクリーニング検査)					スクリーニング検査を理解する				
5	摂食嚥下障害のための検査(嚥下造影検査:VF)					嚥下造影検査について理解する				
6	摂食嚥下障害のための検査(嚥下内視鏡検査:VE)					嚥下内視鏡検査について理解する				
7	摂食嚥下各期の障害と対策					摂食嚥下各期の障害とその対策について理解する				
8	間接的嚥下訓練					間接的嚥下訓練について理解する				
9	直接的嚥下訓練					直接的嚥下訓練について理解する				
10	嚥下障害への食事の対応(経管栄養など)					経管栄養など嚥下障害患者への食事対応について理解する				
11	リスク管理					摂食嚥下障害に対するリスク管理について理解する				
12	摂食嚥下に関連する解剖生理					摂食嚥下に関連する器官の解剖生理について理解する				
13	摂食嚥下のメカニズム					摂食嚥下のメカニズムを理解する				
14	摂食嚥下障害の評価・診断					摂食嚥下障害の評価・診断方法について理解する				
15	摂食嚥下障害のリハビリテーション					摂食嚥下障害のリハビリテーションについて理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学第2版					熊倉勇実・椎名英貴 編集			医学書院	
成績評価 方法	1. 期末試験(100%) ※池田先生、羽飼先生のいずれの試験にも合格すること					履修上の 注意	摂食嚥下障害の基礎である、解剖生理を復習し講義に臨んでください。また、毎講義後の復習を行うようにしてください。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	嚥下障害治療学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義や演習を通して、摂食嚥下障害をきたす疾患と評価方法を中心に授業を進めていく。					【到達目標】 成人の嚥下障害の疾患やメカニズム、検査、治療方法の概要について理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	嚥下障害学の復習					頭頸部の正中矢状断面図の再学習を行い理解を深める				
2	5期モデルについて					5期モデルの流れを理解し、各器官の動態や神経や筋の理解について深める				
3	プロセスモデルについて					プロセスモデルが説明できる				
4	摂食嚥下障害をきたす疾患について					脳血管障害における嚥下障害の特徴を理解する				
5	摂食嚥下障害をきたす疾患について					進行性疾患における嚥下障害の特徴を理解する				
6	摂食嚥下障害をきたす疾患について					認知機能低下による嚥下障害の特徴を理解する				
7	摂食嚥下障害の評価の流れ					評価の流れの理解を深める				
8	摂食嚥下障害のスクリーニングテスト					改定水飲みテスト、反復唾液嚥下テストを中心にスクリーニングテストの役割、内容を理解する。				
9	摂食嚥下障害のスクリーニングテスト実技①					改定水飲みテストを資料の内容を確認しながら実施できるようになる				
10	摂食嚥下障害のスクリーニングテスト実技②					反復唾液嚥下テストを資料の内容を確認しながら実施できるようになる				
11	摂食嚥下障害の各期の障害と評価のポイント①					先行期・準備期・口腔期の障害について理解を深める				
12	摂食嚥下障害の各期の障害と評価のポイント②					咽頭期の障害について理解を深める				
13	合併症とリスク管理(気管切開など)①					低栄養、加齢等、嚥下障害の合併症やリスクについて理解を深める				
14	合併症とリスク管理(気管切開など)②					誤嚥性肺炎、気管切開等の合併症やリスク管理について理解を深める				
15	嚥下障害に対する手術について					嚥下機能を改善する手術、誤嚥を予防する手術				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚学 摂食嚥下障害学 第2版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
	『嚥下障害ポケットマニュアル 第4版』					聖隷嚥下チーム		医歯薬出版株式会社		
成績評価 方法	試験100%					履修上の 注意	・嚥下の5期モデルを理解しておくこと ・積極的に授業に参加し、発言すること			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	流暢性障害					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	川合 紀宗						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 吃音をはじめとする流暢性障害については、明らかにされていることが少なく、臨床場面においても介入が困難であるといわれている。そこで本講義では、現在までに吃音・流暢性障害に関する研究や実践の中で明らかにされていることについての理解を深める。					【到達目標】 1. 吃音・流暢性障害の症状を理解する。 2. 吃音・流暢性障害の原因の諸説についての認識を深める。 3. 吃音・流暢性障害の臨床方法について学習する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	吃音の概要：現在までに明らかにされていること					吃音の基礎的事項を理解する。				
2	吃音の症状面の特徴					吃音の中核症状・二次症状・随伴症状の特徴を理解する。				
3	吃音の心理面・態度面の特徴					吃音の心理面・態度面の特徴を理解する。				
4	吃音に関する理論					吃音の原因や進展に関する様々な理論を理解する。				
5	吃音の診断・評価(概論)					吃音の診断・評価の基礎的事項を理解する。				
6	吃音症状の評価					吃音の中核症状・二次症状・随伴症状の評価を理解する。				
7	吃音症状以外の評価					吃音症状以外の側面に対する評価を理解する。				
8	多面的・包括的アプローチ					吃音の多面的・包括的評価を理解する。				
9	吃音の臨床(概論)					吃音臨床の基礎的事項を理解する。				
10	幼児期の吃音臨床					幼児期の吃音臨床の方法と特徴を理解する。				
11	学童期の吃音臨床					学童期の吃音臨床の方法と特徴を理解する。				
12	思春期の吃音臨床					思春期の吃音臨床の方法と特徴を理解する。				
13	成人期の吃音臨床					成人期の吃音臨床の方法と特徴を理解する。				
14	吃音に関する最近の研究動向について					吃音に関する最近の研究動向を理解する。				
15	まとめ					吃音の基礎的事項・特徴・評価・臨床について包括的に理解する。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	『特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援』					小林宏明 川合紀宗		学苑社		
参考 図書等	『吃音の基礎と臨床 総合的アプローチ』					バリー ギター 著 長澤泰子監訳		学苑社		
	『どもる君へ いま伝えたいこと』					伊藤伸二 著		解放出版社		
成績評価 方法	予習の状況、出席状況、授業への参加度、レポートおよび試験を総合的に判断し、評価する。					履修上の 注意	集中講義のため、教科書の内容をよく読み、まとめノートをあらかじめ作成するなど、必ず予習をしておくこと。また、講義日までに、テキストの内容に関する質問事項も準備しておくこと。なお、授業は講義形式とグループ学習で行う。			
						実務経験 紹介	20年間の吃音臨床経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	小児聴覚障害学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義と演習を通して、先天性難聴の原因や評価の仕方を伝えていく。					【到達目標】 ・一般目標 小児聴覚障害の疾患や検査方法と評価方法を学ぶ。 ・行動目標 耳の発生と解剖を説明できる。 小児難聴の時期や種類を区別・説明できる。 小児の聴覚検査の理論と方法を学び、実施することができる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	耳の解剖と機能について				小児期での聴器の解剖・生理について知識を習得する。					
2	聴器の発生について				胎芽期・胎児期の聴器の発生について、知識を習得する。					
3	小児聴覚障害の概要 遺伝性難聴とは				遺伝性難聴の基本構造や種類について理解と説明が出来る。					
4	胎生期難聴 周産期難聴とは				胎生期難聴と周産期難聴の疾患について理解と説明ができる。					
5	小児難聴の評価の流れ				小児聴覚障害に関わる検査・評価について理解と説明ができる。					
6	小児難聴のスクリーニング検査について				小児難聴のスクリーニング検査について理解と説明ができる。					
7	ABR検査の仕組みや評価方法について				ABR検査の仕組みや評価方法について理解と説明ができる。					
8	OAE検査・ASSR検査について 仕組みや評価方法				OAE検査・ASSR検査の仕組みや評価方法について理解と説明ができる。					
9	BOA検査について 仕組みや評価方法				BOA検査の仕組みや評価方法について理解と説明ができる。					
10	CORとVRA検査について 仕組みや評価方法				CORとVRA検査の仕組みや評価方法について理解と説明ができる。					
11	遊聴聴力検査について 仕組みや評価方法				遊聴聴力検査の仕組みや評価方法について理解と説明ができる。					
12	遊聴聴力検査について 演習				遊聴聴力検査(ピープショウテスト、Barr法)について検査が行える。					
13	COR検査 練習				CORの演習を行うための準備や操作練習を行う。					
14	COR検査 演習(1)				実際にCORを操作し、検査ができるようになる。					
15	COR検査 演習(2)				実際にCORを操作し、検査ができるようになる。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	『標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版』				藤田郁代(監修)		医学書院			
	『聴力検査の実際 改訂4版』				日本聴覚医学会 編		南山堂			
参考図書等										
成績評価方法	聴力検査演習(30%)、期末試験(70%)				履修上の 注意	1年次の聴覚医学の復習をしておくこと(特に解剖)				
					実務経験 紹介	言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。				

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	聴力検査法演習					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 主に成人を対象とした様々な聴力検査法の理論と方法を を知り解釈の仕方を学ぶ。					【到達目標】 ・目的に応じた聴力検査法を選択できる。 ・各検査のしくみや方法を理解できる。 ・マニュアルに沿った方法を実施できる。 ・検査結果を解釈し評価できる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	復習：耳の構造の部位や音の伝わり方を列挙できる。				1年生で習得した聴覚の解剖や生理の知識を復習する。					
2	純音聴力検査(気導)①				純音聴力検査の概要と気導聴力検査についての仕組みや 方法について理解できる。					
3	純音聴力検査(気導)②				引き続き、気導聴力検査についての仕組みや方法について 理解できる。					
4	純音聴力検査(骨導)③				骨導聴力検査の概要についての仕組みや方法について理 解できる。					
5	マスキング				マスキングの基本構造についての仕組みや方法について理 解し実践できる。					
6	語音聴力検査：語音了解閾値検査(演習)				語音了解閾値検査についての仕組みや方法について理解 し、実践できる。					
7	語音聴力検査：語音弁別検査(演習)				語音弁別検査についての仕組みや方法について理解し、実 践できる。					
8	純音聴力検査(気導・骨導演習)				気導聴力検査の気導・骨導について、マニュアルに沿った方 法を実施できる。					
9	純音聴力検査(気導・骨導演習)				気導聴力検査の気導・骨導について、マニュアルに沿った方 法を実施できる。					
10	純音聴力検査(気導・骨導演習)				気導聴力検査の気導・骨導について、マニュアルに沿った方 法を実施できる。					
11	自記オーディオメトリー(演習)				自記オーディオメトリー検査についての仕組みや方法につい て理解し、実践できる。					
12	閾値上聴力検査(演習)				閾値上聴力検査についての仕組みや方法について理解し、 実践できる。					
13	インピーダンスオーディオメトリー(ティンパノメトリー演 習)				ティンパノメトリーについての仕組みや方法について理解し、 実践できる。					
14	インピーダンスオーディオメトリー(耳小骨筋反射検査演 習)				耳小骨筋反射検査についての仕組みや方法について理解 し、実践できる。					
15	その他の検査(一部演習あり)				眼振検査や平衡機能検査についての仕組みや方法につい て理解できる。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	『聴力検査の実際 改定4版』				日本聴覚医学会 編		南山堂			
参考 図書等	『標準言語聴覚学 聴覚障害学 第3版』				藤田郁代(監修)		医学書院			
成績評価 方法	聴力検査演習(30%)、期末試験(70%)				履修上の 注意		・1年生で学習した「聴覚医学概論」や「成人聴覚 障害学」をよく復習しておくこと。 ・主に聴力検査室で行います。			
					実務経験 紹介		言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年 の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	補聴器・人工内耳					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	竹松 知紀						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 ・補聴器の構造、種類はもちろんのこと難聴者のきこえに対応した補聴を補聴器効果測定装置を使用して客観的データと主観的データをもとにフィッティングし、適正にフィッティングされているか評価を行う。模型を利用した耳型採型実習や補聴に関する周辺機器についても学ぶ。 ・人工内耳の仕組みとマッピング法を学ぶ。					【到達目標】 ・補聴器のフィッティング技術の習得。 ・周辺機器についての知識を得る。 ・人工内耳の仕組みを理解する。 ・国家試験の問題が解ける。					
回数	授業内容					学習目標				
1	耳の構造と音の伝わり					耳の構造や音の伝わり方について学ぶ				
2	補聴器の概要					補聴器の形による長所・短所を理解する				
3	補聴を考える(聞こえ)					難聴者のきこえについてのDVDをみて理解を深める				
4	補聴器の仕組み					補聴器の最新機能を学ぶ				
5	先天性難聴の苦悩					先天性難聴者(児)の苦悩について考える				
6	装用耳の選択					補聴器の装用耳の選択を行う				
7	補聴器フィッティング					主訴やオーディオグラムを参考にして調整を行う				
8	補聴器特性装置					補聴器特性装置の使い方を説明し、実際に特性をとる				
9	両耳効果					両耳聴の効果について学ぶ				
10	リニア・ノンリニア					補聴器のリニア・ノンリニアについて理解を深める				
11	補聴効果確認					補聴器が適合しているか確認を行う				
12	耳型採型①					模型を使って耳型をとる				
13	耳型採型②					模型を使って耳型をとる				
14	人工内耳					人工内耳の仕組みを理解する				
15	まとめ					今までの授業の振り返りを行う				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	・プリントを配布									
参考 図書等	『標準言語聴覚学 聴覚障害学 第3版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
成績評価 方法	期末試験(90%)、レポート・感想文(10%)					履修上の 注意	「耳の構造、音の伝わり」について復習しておくこと。			
						実務経験 紹介	25年間補聴器分野の業務経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	臨床基礎実習					
単位数	1	時間数	40	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	実習
担当	ST科教員						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	有
【授業の概要】 臨床現場で実際の言語聴覚士の業務内容を見学し、 机上の知識と結びつけて学ぶ。					【到達目標】 1. 臨床現場での言語聴覚士の役割を学ぶ。 2. 対象者との接し方、関わり方を学ぶ。 3. 実際の現場を見学することで学んだ知識をより深める。 4. 社会に出る上での基本的なマナーや社会性を学ぶ 5. 見学から得られた情報や調べたことをデイリーノート にまとめ、記録する経験を積む。					
回数	授業内容					学習目標				
臨床現場で言語聴覚療法の実践を体験し、言語聴覚士の役割や対象者との接し方や関わり方を学ぶ。また、これまでの机上で学んだ知識と現場での臨床とを結び付け、より深く理解することをめざす。さらに、社会の中で学ぶことで、これから社会に出る上での基本的なマナーや考え方、社会性を学ぶ。最後に、得られた知見や体験したことなどをデイリーノートにまとめることで、自身の考えなどを言語化し他者に伝えることのできる力も養う。										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	ST評価 ポケット手帳					白波瀬元道 編集			ヒューマンプレス	
成績評価 方法	評価表に基づき評価を行う					履修上の 注意	実習に適した服装や身だしなみで参加してください。場をわきまえ、言葉遣いや態度にも十分気をつけましょう。社会人としてのルールを身に付けましょう。			
						実務経験 紹介				

2 年 次

選 択 必 修 科 目

◇言語療法セミナーⅡ

◇地域リハビリテーション学

言語聴覚学科

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	言語療法セミナーⅡ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	正司真規 今村真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 臨床基礎実習に向けて、小児分野・成人分野・臨床マナーについて演習等を通して学習を深める。					【到達目標】 ・言語聴覚士としての資質・能力について理解を深める ・言語聴覚障害の基礎学力を身につける(小児・成人分野) ・臨床基礎実習における課題(実習日誌やマナー、実習報告会)を理解し、課題を達成する。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション・臨床マナー					今後の講義内容、臨床マナーが理解できる				
2	小児分野の言語聴覚療法(臨床基礎実習の1日の流れ) 講義					小児分野の臨床基礎実習の1日の流れを知る				
3	小児分野の言語聴覚療法(自閉スペクトラム症について)講義					自閉スペクトラム症について理解を深める				
4	小児分野の言語聴覚療法(限局性学習症について)講義					限局性学習症について理解を深める				
5	小児分野の言語聴覚療法(知的発達症・聴覚障害について) 講義					知的発達症・聴覚障害の理解を深める				
6	小児分野の言語聴覚療法(実習日誌について)					実習日誌の書き方がわかる				
7	成人分野の言語聴覚療法(臨床基礎実習の1日の流れ)					成人分野の臨床基礎実習の1日の流れを知る				
8	成人分野の言語聴覚療法(失語症について)					失語症についての理解を深める				
9	成人分野の言語聴覚療法(嚥下障害・構音障害について)					嚥下障害・構音障害についての理解を深める				
10	成人分野の言語聴覚療法(実習日誌について)					実習日誌の書き方がわかる				
11	成人分野の言語聴覚療法(実習日誌について②)					実習日誌の書き方がわかる				
12	成人分野の言語聴覚療法(まとめ)					これまでの成人分野の講義内容が理解できる				
13	臨床態度、コミュニケーション技法について					医療現場で求められる態度、コミュニケーション技法について理解できる。				
14	臨床態度、コミュニケーション技法について(実技試験)					実技試験の合格基準に到達する				
15	まとめ					これまでの講義内容が理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士テキスト 第3版					大森孝一 他 編		医歯薬出版		
	日本語検定公式練習問題集3訂版3級					日本語検定委員会		東京書籍		
参考図書等										
成績評価方法	小児分野40%、成人分野40%、実技試験20%					履修上の注意	指導されての学習のみならず、主体的に積極的に自己学習を進めること			
						実務経験紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	選択必修	履修形態	必修	科目名	地域リハビリテーション学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	2年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	非常勤講師						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 地域で生活されている障害者(児)や高齢者を対象に展開されているリハビリテーションについて講義する。特に、授業では、専門職(理学・作業・言語)以外の支援内容を重要視した。 また、リハビリテーションに関わる専門職の具体的な講義を受けることで、自らの専門職としての役割性を明確にする。					【到達目標】 ・高齢者を取り巻く保健医療福祉の現状を理解する ・2040年問題について理解し、日本社会の進むべき道について述べるができる ・介護保険制度の理解と障害者総合支援制度を説明できる ・地域リハビリテーションにおける専門職の役割を理解し、説明できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション					地域リハビリテーションの概要を理解する				
2	介護保険法と障害者総合支援法					介護保険と障害者総合支援法の重要事項を理解する				
3	地域支援と専門職 作業療法士					地域での作業療法士の役割を理解する				
4	社会生活と地域包括ケアシステム					地域包括ケアシステムの概要を理解する				
5	地域支援と専門職 介護支援専門員					地域での介護支援専門員(ケアマネジャー)の役割を理解する				
6	地域支援と専門職 理学療法士					地域での理学療法士の役割を理解する				
7	地域支援と専門職 言語聴覚士					地域での言語聴覚士の役割を理解する				
8	地域支援 NPOの役割					地域でのNPOの役割を理解する				
9	地域支援と専門職 医師 在宅医療					地域での在宅医療の役割を理解する				
10	地域支援と専門職 訪問看護					地域での看護師の役割を理解する				
11	障害児教育の現状と課題					障害児の教育内容と課題を理解する				
12	地域支援と専門職 施設支援					施設支援の役割を理解する				
13	就労支援 精神科領域					精神科領域の就労支援を理解する				
14	就労支援 高次脳機能障害					高次脳機能障害領域の就労支援を理解する				
15	まとめ 地域で働く専門職					地域で働く専門職の役割を述べるができる				
教科書 参考図書等	書籍名					著者		出版社		
	特に定めない									
成績評価 方法	試験 100%					履修上の 注意	多数の非常勤講師により授業が運営されていきます。受講態度には留意してください。			
						実務経験 紹介				

3 年 次

基 礎 科 目

◇関係法規

言語聴覚学科

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	関係法規					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚士として臨床現場で必要な医療・社会福祉・ その他関連する法規について理解する					【到達目標】 ・言語聴覚士法の説明ができる ・言語聴覚士に関連する医療・保健に関する法規をあ げ、主な内容を説明できる ・言語聴覚士に関連する社会福祉に関する法規をあ げ、主な内容を説明できる					
回数	授業内容					学習目標				
1	法規、社会保障制度①					『法規』とは何か理解する				
2	法規、社会保障制度②					社会保障制度について理解する				
3	言語聴覚士法					言語聴覚士法の重要部分について理解する				
4	医療従事者に関する法規①					医師法・看護師法の理解を深める				
5	医療従事者に関する法規②					PT・OT法の理解を深める				
6	医療施設に関する法規					医療施設の施設基準に関しての理解を深める				
7	保健衛生に関する法規					保健衛生に関する理解を深める				
8	医療保険・診療報酬					主にリハビリテーションに関する医療保険・診療報酬の内容 の理解を深める				
9	労働に関する法規					労働に関する理解を深める				
10	社会福祉に関する法規①					社会福祉に関連する法規の理解を深める				
11	社会福祉に関する法規②					社会福祉に関連する法規の理解を深める				
12	介護保険法					介護保険法に関する理解を深める				
13	個人情報保護法、その他					個人情報保護法に関する理解を深める				
14	教育に関する法規					教育関連法に関する理解を深める				
15	まとめ					関係法規の国家試験に取り組む				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『2024版 医事関連法の完全知識』					安藤秀雄 他		医学通信社		
成績評価 方法	試験100%					履修上の 注意	テキストが例年遅れて届きます。それまでは資料 を参照して行います。			
						実務経験 紹介				

3 年 次

専 門 基 礎 科 目

◇脳神経外科学

◇心理測定法

言語聴覚学科

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	脳神経外科学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	理学・作業・言語	学期	前後期	授業形態	講義
担当	梶原 浩司 柳原 博之 濱田 康弘 学内教員						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 脳血管障害はリハビリテーション分野で最も関わる障害であり、その病態を知ることはリハビリテーション専門職の必須の要件である。近年、中枢神経障害に対する治療技術の発展はめざましく、外科的な手術をはじめ、予防的な治療として脳血管内科という分野も確立している。リハビリテーションに携わるものとして、最新の知識・技術を学ぶことは、より効果的な治療を行う上で大切な要素である。脳神経外科専門医の立場から、脳血管障害の原因、病態症状、合併症、治療と予後、リハビリテーションについて最新情報を得る。					【到達目標】 中枢神経系の機能局在を理解する。 脳血管障害の病態と症状を理解する。 脳腫瘍の病態と症状を理解する。 脳神経外科学の手術と適応について理解する。					
回数	授業内容					学習目標				
1～2回 中枢神経系の解剖生理と機能局在 神経学的主要症候と画像(CT, MRI 他) 3回～7回 宇部西リハビリテーション病院 山口日赤病院 脳神経外科医が担当 脳血管障害等について(病巣と障害) 脳梗塞 脳出血 クモ膜下出血 脳腫瘍 他 予防と脳神経外科的治療(内科的治療を含む) 合併症、脳神経外科医からみた予後 リハビリテーションとリスク管理										
中枢神経系の機能局在、その画像を理解する 脳血管障害の病態と症状を理解する。 脳腫瘍の病態と症状を理解する。 脳神経外科学の手術と適応、リスク管理、 リハビリテーションについて理解する。										
教科書	書籍名					著者		出版社		
	病気がみえる vol.7 脳・神経							MEDIC MEDIA		
参考 図書等	目で見る神経内科学					平井 俊策		医歯薬出版		
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意	前期開講ですが、前後期で開講します。			
						実務経験 紹介				

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	心理測定法					
単位数	2	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	福田 廣						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 言語聴覚療法の基礎として感覚量の測定は極めて重要であり、実証的なアプローチについて理論的並びに体験的に参入を行う。					【到達目標】 ・感覚測定手段としての精神物理学的測定法の理論を理解し、技法を体得する。 ・心理学的尺度構成法を理解し、心身の引き起こす現象の捉え方を知る ・統計解析データの基本的読み取り方を理解する					
回数	授業内容					学習目標				
1	心理学における心のとらえ方(1) ― 心の科学、研究パラダイム ―					科学的に『心』を理解するためには、どのような研究の枠組が必要なのか理解する。				
2	心理学における心のとらえ方(2) ― 心の測定 ―					『心』を測るものとして、観察、実験、調査等の方法が存在する。それらの具体的な特徴及びその長短について知る。				
3	研究方法、測定法の分類					心理測定、中でも感覚・知覚・記憶といった広義の認知領域での測定方法の理論的背景を理解する。				
4	精神物理学的測定法(1)					調整法・極限法・恒常法の特徴、具体的操作手続きに習熟し、データ解析について理解を深める(1)				
5	精神物理学的測定法(2)					調整法・極限法・恒常法の特徴、具体的操作手続きに習熟し、データ解析について理解を深める(2)				
6	同上演習					上述の測定法を用いて、錯視図形での錯視量の測定を行う。				
7	尺度構成法(1) ― 感覚尺度 ―					マグニチュード推定法等を用いて感覚対象の測定の技術を獲得する。				
8	同上演習					上述のデータ分析を通して、科学的測定技術を体得する。				
9	尺度構成法(2) ― 社会的態度・イメージの尺度 ―					リッカート法、一対比較法の理論的背景を知る。				
10	同上演習					具体的態度対象を選出し、データ収集を行い、理解を深める。				
11	心理教育研究とデータ解析(1)					心理教育研究における数量的データの尺度水準の問題、その水準にあった統計分析の在り方について理解する(1)				
12	心理教育研究とデータ解析(2)					心理教育研究における数量的データの尺度水準の問題、その水準にあった統計分析の在り方について理解する(2)				
13	SD法によるデータ収集・分析の演習(1)					グループ別に、SD法によるデータ収集のテーマを探し、実際にデータを収集し、発表に向けて取り組む(1)				
14	SD法によるデータ収集・分析の演習(2)					グループ別に、SD法によるデータ収集のテーマを探し、実際にデータを収集し、発表に向けて取り組む(2)				
15	心理測定演習発表					グループ別発表、考察を行う。成果確認、講評を通して達成度を知る。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『心理学基礎実習マニュアル』					宮谷真人編		北大路書房		
成績評価 方法	演習課題の遂行、グループワーク成果(30%) レポート形式テスト(70%)					履修上の 注意	講義と演習、更にはグループワークと種々の講義形態をとるので、真摯かつ積極的な受講姿勢を期待するx0			
						実務経験 紹介				

3 年 次

専 門 科 目

- ◇言語聴覚障害研究法Ⅰ
- ◇失語症治療学Ⅱ（演習）
- ◇高次脳機能障害学Ⅱ
- ◇高次脳機能障害検査法
- ◇言語発達障害治療学Ⅰ
- ◇言語発達障害治療学Ⅱ（脳性麻痺）
- ◇言語発達障害治療学Ⅲ（演習）
- ◇音声障害Ⅰ
- ◇音声障害Ⅱ
- ◇嚥下障害治療学Ⅱ（演習）
- ◇構音障害Ⅰ（運動性）
- ◇構音障害Ⅱ（運動性）
- ◇構音障害Ⅲ（器質性）
- ◇小児聴覚障害治療学
- ◇成人聴覚障害治療学Ⅰ
- ◇成人聴覚障害治療学Ⅱ
- ◇臨床実習Ⅰ

言語聴覚学科

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語聴覚障害研究法Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 研究とは何か、研究のプロセス、研究方法を解説する。また、得られたデータを要約・記述・解釈する方法、及び文献の活用方法についても学ぶ。					【到達目標】 ・研究とは何か理解できる ・研究法の種類を理解できる ・研究の進め方、研究の方法について理解できる ・データの収集とまとめ方について理解し、結果の解釈ができる ・文献の収集と活用、抄読ができる					
回数	授業内容					学習目標				
1	ガイダンス、研究とは何か					研究とは何か理解を深める				
2	研究のプロセスと方法					研究の進め方の理解を深める				
3	研究法の種類①					研究の種類を理解する				
4	研究法の種類②					研究の種類を理解する				
5	情報収集と研究計画(組立)の立案①					論文の探し方を理解し、実際に興味のある分野の論文を見つける				
6	情報収集と研究計画(組立)の立案②					研究計画を立案する				
7	研究データの収集と解釈					研究データの収集の方法に関する理解を深める				
8	結果のまとめと展開					研究データの結果をまとめ方の理解を深める				
9	報告書の作成法					報告書の作成に関する理解を深める				
10	文献の活用法					引用文献の探し方と活用方法について理解を深める				
11	プレゼンテーション演習					パワーポイントでのプレゼンテーションの方法について理解を深める				
12	論文・報告書抄読					興味のある分野の論文から抄読を作成する				
13	論文・報告書抄読					興味のある分野の論文から抄読を作成する				
14	論文・報告書抄読					興味のある分野の論文から抄読を作成する				
15	論文・報告書抄読 発表					パワーポイントで抄読発表をする				
教科書	書籍名					著者		出版社		
参考 図書等										
成績評価 方法	課題発表100%					履修上の 注意	報告書は自主的に進めることが必要となるため、積極的な参画を望む			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	失語症治療学Ⅱ（演習）					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 失語症の症例・評価・立案・訓練・再評価・家族指導など、失語症にまつわる言語聴覚士の関わりや職務について、全体的・俯瞰的に理解し自ら実践できることを目指します。 言語機能に障害を持った方々の生活を再構築するために、言語聴覚士に何ができるかを共に考え、追及します。					【到達目標】 1. 失語症の対象者を全体像でとらえることができる。 2. 全体像の中から詳細な問題点を指摘し必要な訓練を選択できる。 3. 対象者の置かれた生活環境に合わせた、最適なプログラムや継続支援を提供できる 4. 学生自ら治療を実践し報告書や指導書等、必要書類を適切に作成できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	失語症のリハビリテーション過程					失語症のリハビリテーション過程について理解できる				
2	言語障害を持つ方との対話と情報収集					言語障害を持つ方とのコミュニケーション方法について考える				
3	失語症治療総合演習Ⅰ（１）					模擬症例の＜聞く＞について検討する				
4	失語症治療総合演習Ⅰ（２）					模擬症例の＜話す＞について検討する				
5	失語症治療総合演習Ⅰ（３）					模擬症例の＜読む＞について検討する				
6	失語症治療総合演習Ⅰ（４）					模擬症例の＜書く＞について検討する				
7	失語症治療総合演習Ⅰ（５）					模擬症例の症状のまとめができる				
8	失語症治療総合演習Ⅰ（６）					模擬症例の症状の問題点抽出ができる				
9	失語症治療総合演習Ⅰ（７）					模擬症例の目標設定ができる				
10	失語症治療総合演習Ⅰ（８）					模擬症例の訓練立案ができる				
11	失語症治療総合演習Ⅰ（９）					模擬症例の訓練プログラム作成ができる				
12	失語症治療総合演習Ⅱ（１）					模擬症例の症状のまとめができる				
13	失語症治療総合演習Ⅱ（２）					模擬症例の症状の評価・分析ができる				
14	失語症治療総合演習Ⅱ（３）					模擬症例の訓練立案ができる				
15	失語症補足					模擬症例を通して訓練立案ができる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	失語症Ⅰ・Ⅱで用いた教科書・ノート									
成績評価 方法	レポート:100%					履修上の 注意	失語症Ⅰ・Ⅱのノートを持参すること			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	高次脳機能障害学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義、演習を通して各高次脳機能障害に対して学ぶ。					【到達目標】 高次脳機能障害の多種多様性を学び、各障害に対して理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	半側空間無視 定義や発現機序について				定義と発現機序が説明できる					
2	半側空間無視 評価方法を中心に				検査名を述べることができる					
3	半側空間無視 訓練方法を中心に				訓練方法の概要を説明できる					
4	注意障害について				注意障害の種類について説明できる					
5	遂行機能障害 定義や発現機序について				定義と発現機序が説明できる					
6	遂行機能障害 評価や訓練方法について				評価方法と訓練法の概要を説明できる					
7	遂行機能障害 まとめ				遂行機能に対する理解を深める					
8	認知症について				認知症の定義を説明できる					
9	認知症の種類と特徴				アルツハイマー型などそれぞれの認知症の特徴を説明できる					
10	脳梁離断症候群 定義や発現機序について				定義と発現機序の説明ができる					
11	脳梁離断症候群 周辺症状				他人の手徴候等脳梁損傷による種々の障害の理解を深める					
12	右側大脳損傷によるコミュニケーション障害 種類				右大脳半球損傷によっておこるコミュニケーション障害の種類が説明できる					
13	右側大脳損傷によるコミュニケーション障害 障害特徴				右大脳半球損傷によっておこるコミュニケーション障害の障害特徴が説明できる					
14	まとめ				国家試験問題を解く					
15	まとめ②				5肢拓一の問題を作成する					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	『標準言語聴覚学 高次脳機能障害学 第3版』				藤田郁代(監修)		医学書院			
	『高次脳機能障害学 第3版』				石合純夫		医歯薬出版株式会社			
成績評価方法	試験100%				履修上の注意		積極的に授業に参加し、発言すること			
					実務経験紹介		本領域の実務経験あり			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	高次脳機能障害検査法					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	正 司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 演習を通して、検査の仕方や結果の出し方を学ぶ					【到達目標】 臨床現場で良く使用する検査方法を理論、実技を通して学んでいく。					
回数	授業内容				学習目標					
1	オリエンテーション				高次脳機能障害を評価する上で代表的な必要検査の種類を説明できる					
2	HDS-R・MMSE 概要				当該検査の概要説明ができる					
3	HDS-R・MMSE 実技				当該検査がマニュアルを確認しながら実施できる					
4	NOCA-J 概要・実技				当該検査の概要説明ができ、マニュアルを確認しながら実施できる					
5	コース立方体組み合わせテスト・RCPM 概要				当該検査の概要説明ができる					
6	コース立方体組み合わせテスト・RCPM 実技				当該検査がマニュアルを確認しながら実施できる					
7	S-PA標準言語性対連合学習検査 概要・実技				当該検査の概要説明ができ、マニュアルを確認しながら実施できる					
8	TMT FAB 概要・実技				当該検査の概要説明ができ、マニュアルを確認しながら実施できる					
9	BIT 概要				当該検査の概要説明ができる					
10	BIT 実技				当該検査がマニュアルを確認しながら実施できる					
11	CAT 概要				当該検査の概要説明ができる					
12	CAT 実技				当該検査がマニュアルを確認しながら実施できる					
13	BADS 概要				当該検査の概要説明ができる					
14	BADS 実技				当該検査がマニュアルを確認しながら実施できる					
15	まとめ				HDS-R、MMSE、コース立方体組合せテスト、RCPMがマニュアルを確認せずに実施できる					
教科書 参考 図書等	書籍名				著者		出版社			
	『標準言語聴覚学 高次脳機能障害学 第3版』				藤田郁代(監修)		医学書院			
	『高次脳機能障害学 第3版』				石合純夫		医歯薬出版株式会社			
成績評価 方法	実技試験100%				履修上の 注意	積極的に実技に参加すること				
					実務経験 紹介	本領域の実務経験あり				

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語発達障害治療学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	川間 弘子						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 正常発達の流れと指導法について学ぶ					【到達目標】 1. 認知・コミュニケーションの正常発達の過程を理解すること 2. 言語発達障害児の言語指導について知ること					
回数	授業内容				学習目標					
1	教材を作ってみよう(子どもに与えるもの・配慮すること)				教材作成において注意点や配慮内容等への理解を深める。					
2	教材を作ってみよう(子どもに与えるもの・配慮すること)				障がいの特性、発達段階を加味した教材を作成できる。					
3	発達段階に即した教材				認知発達の過程に沿って、対応する教材があることがわかる。また、使い方によって段階があることを知る。					
4	文字・数のレディネス				文字と数に入る前に付けておく力について理解することができる。実際に演習を通して、子どもとのかかわり方を知る。					
5	書字のレディネス				1歳から文字が書ける段階までの書字の発達段階と手指の発達段階について理解することができる。					
6	書字の指導の流れ				指導法について、実践を交えながら知識と共に技能を習得することができる。					
7	数のレディネス(数える)				数える段階について実践を交えながら理解することができる。					
8	教材づくり				文字、数の教材を、発達段階を念頭に置きながら作成することができる。					
9	合成分解 数の三項関係				数の学習で、序数概念から量概念に対する知識とともに、実践を交えながら技術に関しても習得することができる。					
10	教材づくり(5の数詞・対応)				量概念で、5のまとまりから10への段階を知ると共に、指導法について理解することができる。					
11	指導の流れ 目標設定(アセスメント)→訓練内容方法				子どもの訓練場面のビデオ分析を行うことにより、目標を設定することができる。					
12	訓練内容 系列化				訓練目標を達成するためのスモールステップについて理解しながら段階を追った訓練内容を考えることができる。					
13	訓練目標内容 訓練計画作成				訓練目標から訓練計画立案の一連の流れを理解し、作成することができる。					
14	訓練目標内容 訓練計画作成				上記に加えて、評価の観点を設けながら、分析に視点を持つことができる。					
15	課題レポート作成				前期授業のまとめとして、レポートにまとめることができる。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	『標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版』				玉井ふみ/深浦純一		医学書院			
成績評価方法	試験(100%)				履修上の注意		演習方式で進めるため欠席しないようにする			
					実務経験紹介		本領域の実務経験あり			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語発達障害治療学Ⅱ(脳性麻痺)					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 脳性麻痺を主体とした肢体不自由児の運動、言語、コミュニケーション、摂食の状況を知り支援の視点を学ぶ。					【到達目標】 1. 障害像を理解し生活上の困り感を想像できるようになる 2. 肢体不自由児や重度・重複障害児の言語・コミュニケーションの評価の視点を理解する 3. 摂食機能の発達を理解し、評価できるようになる 4. 拡大代替コミュニケーションの考え方を学ぶ					
回数	授業内容					学習目標				
1	脳性麻痺について(定義・病型による分類)					脳性麻痺について理解できる				
2	正常運動発達と運動学基本用語					正常運動発達と運動学基本用語がわかる				
3	運動発達と姿勢反射					運動発達と姿勢反射を知る				
4	運動発達の意義(脳性麻痺の視点から)					運動発達の意義(脳性麻痺の視点から)を理解する				
5	脳性麻痺児の言語・コミュニケーション上の問題					脳性麻痺児の言語・コミュニケーション上の問題について考えることができる				
6	ライフステージと言語・コミュニケーション支援					ライフステージと言語・コミュニケーション支援について理解する				
7	ライフステージと言語・コミュニケーション支援					ライフステージと言語・コミュニケーション支援について理解する				
8	摂食機能の発達、評価					摂食機能の発達を理解し評価方法がわかる				
9	摂食機能の発達、評価					摂食機能の発達を理解し評価方法がわかる				
10	摂食嚥下機能訓練の実際(演習)					摂食嚥下機能訓練を体験する				
11	摂食嚥下機能訓練の実際(演習)					摂食嚥下機能訓練を体験する				
12	肢体不自由児、重複障害児の言語評価					肢体不自由児、重複障害児の言語評価がわかる				
13	拡大代替コミュニケーションについて					拡大代替コミュニケーションについて理解する				
14	指導の実際					実際の指導について理解する				
15	重度重複障害児への支援					重度重複障害児への支援方法を知る				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚療法シリーズ12 改訂言語発達障害Ⅲ					笠井新一郎(編著)		建帛社		
	標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第3版					藤田郁代(監修)		医学書院		
	食べる機能の障害					金子芳洋		医歯薬出版		
	障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーション その基礎と実践					金子芳洋		医歯薬出版		
成績評価 方法	言語治療ハンドブック					伊藤元信・吉畑博代(編)		医歯薬出版		
	新訂版写真でわかる重症心身障害児(者)のケア					鈴木康之、舟橋満寿子(監修)		インターメディカ		
筆記試験						履修上の 注意	正常発達の復習をしておくこと。実習や体験があるので動きやすい服装で出席すること。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語発達障害治療学Ⅲ(演習)					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	川間 弘子						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 実際のセラピーを通じて、子どもの見方、評価・分析の方法を理解する					【到達目標】 1. 要害の特性の理解と特性に応じた指導内容・方法を理解し、活用できること 2. 拡大代替コミュニケーション手段について知ること					
回数	授業内容					学習目標				
1	S-S法検査準備					検査道具を確認し、マニュアルに沿った検査が実施できるようになる				
2	S-S法検査準備					S-S法について、検査の流れを把握し、スムーズに実施できるようにする。保護者対応に関する知識を身に付ける。				
3	S-S法 実技(数名のお子さんが協力)					スムーズに検査を進めることができる。				
4	S-S法 実技(数名のお子さんが協力)					スムーズに検査を進めることができる。				
5	訓練計画立案(実態－目標－内容 教材/教具作成)					検査結果、聞き取りから訓練計画を立案できる。次時の訓練案を作成し、教材を準備することができる。				
6	訓練計画立案(実態－目標－内容 教材/教具作成)					検査結果、聞き取りから訓練計画を立案できる。次時の訓練案を作成し、教材を準備することができる。				
7	セラピー1回目(数名のお子さんが協力)					目標に沿ってセラピーと保護者対応ができる。				
8	セラピー1回目(数名のお子さんが協力)					目標に沿ってセラピーと保護者対応ができる。				
9	1回目のセラピーのビデオ分析、次回訓練案立案					訓練場面の詳細なビデオ分析を行い、評価の観点を身に付けることができる。次時の訓練案を立案できる。				
10	教材作成					訓練で使用する教材を作成できる。				
11	セラピー2回目(数名のお子さんが協力)					訓練案の目標に沿ってセラピーが実施できる。訓練後、ビデオ分析を行い、評価の観点に沿って評価できる。次時の訓練案を作成し、使用教材を作成できる。スムーズに指導を進めるための練習を行うことができる。				
12	セラピー2回目(数名のお子さんが協力)									
13	セラピー3回目(数名のお子さんが協力)					訓練案の目標に沿ってセラピーが実施できる。訓練後、ビデオ分析を行い、評価の観点に沿って評価できる。最初に立てた訓練目標に対する評価を行うことができる。症例報告書の作成に関しての知識を身に付けることができる。				
14	セラピー3回目(数名のお子さんが協力)									
15	症例報告書作成					症例報告書を作成することができる。協力いただいたお子様と保護者の方に向けてのお礼の手紙を書くことができる。				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第3版』					玉井ふみ/深浦純一		医学書院		
参考 図書等										
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意	お子さん、保護者の方にご協力いただくため、欠席しないようにする			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	音声障害Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	竹本成子・川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 音声障害の定義や症状・メカニズムなどについての基礎知識を修得する。音声障害の検査及び評価、音声障害をきたす疾患等について学ぶ。					【到達目標】 1. 音声障害の定義や症状等を理解・定着、説明できる。 2. 音声障害の診断、評価、検査及び方法を学習する。 3. 音声障害を来す各疾患の特徴を理解する。					
回数	授業内容				学習目標					
1	音声障害総論				音声障害の概要について知る					
2	診察・検査・評価の方法				音声障害の診察・検査・評価法を知る					
3	器質的音声障害の疾患(1)				器質的音声障害の疾患について知る					
4	器質的音声障害の疾患(2)				器質的音声障害の疾患について知る					
5	器質的音声障害の疾患(3)				器質的音声障害の疾患について知る					
6	神経学的音声障害の疾患				神経学的音声障害について知る					
7	機能性音声障害の疾患				機能性音声障害について症状を知る					
8	声の本質				声を知る					
9	呼吸器官の解剖				呼吸のしくみと解剖を知る					
10	発声器官の解剖(1)				喉頭のしくみと解剖を知る					
11	発声器官の解剖(2)				声帯のしくみと解剖を知る					
12	声の音響学(1)				発声のメカニズムについて知る					
13	声の音響学(2)				声の音響学的特徴について知る					
14	音声障害				音声障害を知る					
15	音声障害の診療				音声障害の原因疾患について知る					
教科書	書籍名				著者			出版社		
	言語聴覚療法シリーズ14 改訂音声障害				苅安誠・城本修 編著			建帛社		
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 発声発語障害学第3版				熊倉勇実・今井智子 編集			医学書院		
	言語聴覚士のための音声障害学				大森孝一 編集			医歯薬出版		
成績評価 方法	期末試験:50%(竹本) 期末試験:30%(川北) 小テスト:20%(川北)				履修上の 注意	※第1～7回:竹本成子先生、第8～15回:川北				
					実務経験 紹介	当領域での実務経験あり				

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	音声障害Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	竹本成子・羽飼富士男・川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 音声障害をきたす疾患とその治療について学ぶ。音声障害Ⅰで学んだ基礎知識も踏まえ言語聴覚士が実施する音声治療について講義・実技を通して学ぶ。					【到達目標】 1. 音声障害の治療法について理解できる。 2. 言語聴覚士が実施する音声治療について理解する。 そして実施することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	音声障害の治療総論					音声障害の治療概要について知る				
2	音声外科(1)					喉頭微細術について知る				
3	音声外科(2)					喉頭枠組み術について知る				
4	音声外科(3)					喉頭全摘出術等について知る				
5	薬物療法					薬物療法について知る				
6	器質的音声障害の治療(1)					器質的音声障害の治療法について知る				
7	器質的音声障害の治療(2)					器質的音声障害の治療法について知る				
8	その他の音声障害の治療					その他の音声障害治療について知る				
9	音声障害治療の概要					音声障害治療の概要について知る				
10	音声治療・間接訓練					音声障害の間接訓練について知る				
11	音声治療・直接訓練					音声障害の直接訓練について知る				
12	音声治療・包括的訓練					音声障害の包括的訓練について知る				
13	無喉頭音声・代用音声					喉頭摘出者について知る				
14	喉頭摘出者のリハビリテーション					喉頭摘出者のリハビリテーションについて知る				
15	喉頭摘出者の摂食嚥下障害・リハビリテーション					喉頭摘出者の摂食嚥下障害について知る				
教科書	書籍名					著者				
	言語聴覚療法シリーズ14 改訂音声障害					苅安誠・城本修 編著				
						建帛社				
参考 図書等	標準言語聴覚障害学 発声発語障害学第3版					熊倉勇実・今井智子 編集				
	言語聴覚士のための音声障害学					大森孝一 編集				
成績評価 方法	期末試験:40%(竹本) 期末試験:30%(羽飼) 期末試験:20%(川北) 小テスト:10%(川北)					履修上の 注意	※第1～7回:竹本成子先生、第9～12回:川北 第13～15回:羽飼富士男先生			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	嚥下障害治療学Ⅱ（演習）					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	演習
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義や演習を通して、間接・直接嚥下練習を学習していく。また、VFを通して、事例検討を行い、評価～訓練プログラムまでを書式にまとめる					【到達目標】 VFから問題点を抽出し、適切な嚥下プログラムを選択できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	嚥下障害治療学Ⅰの復習					摂食嚥下障害Ⅰの復習テストを実施し、間違えた内容も説明できるようにする				
2	進行性疾患の嚥下障害の訓練について					該当疾患の訓練の注意点を説明できる				
3	器質性障害の嚥下障害の訓練について					該当疾患の訓練の注意点を説明できる				
4	経管栄養と嚥下手術について					代表的な経管栄養と嚥下手術の種類や術名を説明できる				
5	代表的な摂食嚥下訓練について					摂食嚥下障害に対する訓練の内容を説明できる				
6	代表的な摂食嚥下訓練について					摂食嚥下障害に対する訓練の内容を説明できる				
7	代表的な摂食嚥下訓練の実技					摂食嚥下障害に対する代表的な訓練が指導のもと実施できる				
8	代表的な摂食嚥下訓練の実技					摂食嚥下障害に対する代表的な訓練が指導のもと実施できる				
9	VF検査の概要					VF検査の概要を説明できる				
10	VF検査の評価1					VF検査の項目ごとの評価がグループ討論をして実施できる				
11	VF検査の評価2					VF検査の項目ごとの評価がグループ討論をして実施できる				
12	VF検査の分析1					VF検査の結果から、指導のもとで報告書が作成できる				
13	VF検査の分析2					VF検査の結果から、指導のもとで報告書が作成できる				
14	VF検査の分析3					VF検査の結果から、指導のもとで報告書が作成できる				
15	VF検査の分析4					VF検査の結果から、指導のもとで報告書が作成できる				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚学 摂食嚥下障害学 第2版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
	『嚥下障害ポケットマニュアル 第4版』					聖隷嚥下チーム		医歯薬出版株式会社		
成績評価 方法	試験100%					履修上の 注意	・嚥下の5期モデルを理解しておくこと ・積極的に授業に参加し、発言すること			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	構音障害学Ⅰ（運動性）					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 運動障害性構音障害の定義やタイプ分類・症状、構音機能のメカニズムなどについての基礎知識を修得する。構音障害の検査及び評価について演習を通して学ぶ。					【到達目標】 1. 運動障害性構音障害の定義や原因疾患、タイプ・症状を理解・定着させ、説明できる。 2. 運動障害性構音障害の診断、評価に必要な検査及び方法を学習する。 3. 運動障害性構音障害のタイプ別の特徴を理解する。 4. 運動障害性構音障害の評価の流れや手順を理解し、実施できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	コミュニケーション/発話のプロセス/構音障害の定義					構音障害の概要について知る				
2	運動系の神経・筋系(1)					上位運動ニューロンについて理解する				
3	運動系の神経・筋系(2)					脳神経について知る				
4	運動系の神経・筋系(3)					錐体路について知る				
5	運動系の神経・筋系(4)					錐体外路系について知る				
6	運動系の神経・筋系(5)					錐体外路系について知る				
7	運動系の神経・筋系(6)					小脳系について知る				
8	運動系の神経・筋系(7)					下位運動ニューロンについて知る				
9	運動性構音障害のタイプ分類(1)					痙性/UUMN/運動低下性Dysについて知る				
10	運動性構音障害のタイプ分類(2)					運動過多性/失調性/弛緩性Dysについて知る				
11	運動性構音障害のタイプ分類(3)					混合性Dysについて知る				
12	臨床の流れ					構音障害の臨床の流れを知る				
13	発声発語器官の評価(1)					観察方法を知る				
14	発声発語器官の評価(2)					観察方法を実践する				
15	標準ディサースリア検査					検査の概要について知る				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	ディサースリアの基礎と臨床 第1～3巻					西尾 正輝 著		インテルナ出版		
	標準ディサースリア検査(AMSD)					西尾 正輝 著		インテルナ出版		
参考 図書等	言語聴覚療法シリーズ9 改訂運動障害性構音障害					熊倉勇実 著		建帛社		
	言語聴覚士のための運動障害性構音障害学					廣瀬肇 著		医歯薬出版		
	神経原発性発声発語障害 Dysarthria					苅安誠 著		医歯薬出版		
成績評価 方法	期末試験:60% 小テスト:40%					履修上の 注意	特になし			
						実務経験 紹介	当領域での実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	構音障害学Ⅱ（運動性）					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	川北淳一郎						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 運動障害性構音障害の評価について学び、演習を通して実施できるように習得する。各機能別・タイプ別のアプローチ法についても実技を通して習得する。					【到達目標】 1. 発声発語器官評価から診断と訓練立案ができる。 2. 治療原則を理解するとともに代表的訓練法を学習する。 3. 運動性構音障害の回復過程を知り、言語治療計画を立てることができる 4. 各期・各タイプ別の治療の特徴を知る。					
回数	授業内容					学習目標				
1	表情と筋肉の理解/顔面・口腔のフィジカルアセスメント					口腔・顔面の構造を理解し観察ができる				
2	AMSDⅠ.一般情報の収集					AMSDにおいて一般情報の収集ができる				
3	AMSDⅡ.発話の検査					AMSDにおいて発話の検査の実施ができる				
4	AMSDⅢ.発声発語器官検査(練習1)					AMSDにおいて発声発語器官検査を練習し理解できる				
5	AMSDⅢ.発声発語器官検査(練習2)					AMSDにおいて発声発語器官検査を練習し理解できる				
6	AMSDⅢ.発声発語器官検査(実技1)					AMSDにおいて発声発語器官検査を実施できる				
7	AMSDⅢ.発声発語器官検査(実技2)					AMSDにおいて発声発語器官検査を実施できる				
8	SLTA-st					SLTA-stについて理解し実施できる				
9	治療(1)					構音障害の評価のまとめができる				
10	治療(2)					構音障害の評価のまとめができる				
11	治療(3)					構音障害の訓練理論を知る				
12	治療(4)					運動理論を知る				
13	訓練技法演習(1)					構音訓練の技法を身につける				
14	訓練技法演習(2)					構音訓練の技法を身につける				
15	訓練技法演習(3)					構音訓練の技法を身につける				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	ディサースリアの基礎と臨床 第1～3巻					西尾 正輝 著		インテルナ出版		
	スピーチ・リハビリテーション① 構音訓練編					西尾 正輝 著		インテルナ出版		
	スピーチ・リハビリテーション⑤ 総合訓練編					西尾 正輝 著		インテルナ出版		
	言語聴覚療法シリーズ9 改訂運動障害性構音障害					熊倉勇実 著		建帛社		
	言語聴覚士のための運動障害性構音障害学					廣瀬肇 著		医歯薬出版		
成績評価 方法	神経原発性発声発語障害 Dysarthria					苅安誠 著		医歯薬出版		
	期末試験:40% 実技試験30% 小テスト:30%					履修上の 注意		※実習着を着用して行う場合あり		
						実務経験 紹介		当領域での実務経験あり		

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	構音障害学Ⅲ(器質性)					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	木戸 直博						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義や演習を通して器質性構音障害の理解を深める。 また、実際の症例を提示して器質性構音障害のイメージを具現化する。					【到達目標】 ・口唇口蓋裂の基礎を理解する ・器質性構音障害の特徴や検査・評価・治療方法を理解する					
回数	授業内容					学習目標				
1	発声発語器官の解剖					発声発語器官の各器官の名称を覚える				
2	口唇・口蓋の発生と口蓋裂					口唇・口蓋の発生を理解する				
3	鼻咽腔閉鎖機能					鼻咽腔閉鎖機能に必要な筋や神経を理解する				
4	鼻咽腔閉鎖機能評価					鼻咽腔閉鎖機能の評価方法を理解する				
5	鼻咽腔閉鎖機能評価					鼻咽腔閉鎖機能の評価方法を理解する				
6	鼻咽腔閉鎖機能評価					鼻咽腔閉鎖機能の評価方法を理解する				
7	鼻咽腔閉鎖機能評価(演習)					鼻咽腔閉鎖期の評価を実施することができる				
8	鼻咽腔閉鎖機能評価(補綴)					鼻咽腔閉鎖不全の治療で必要となる補綴について理解を深める				
9	鼻咽腔閉鎖機能評価(手術)					鼻咽腔閉鎖不全の治療手術の理解を深める				
10	口蓋裂言語					口蓋裂の言語治療の基本的手段を理解する				
11	口蓋裂言語					口蓋裂の言語治療の基本的手段を理解する				
12	口蓋裂言語(演習)					口蓋裂の言語治療の基本的手技を実施し理解を深める				
13	口蓋裂の合併症					口蓋裂児の合併症の種類を理解する				
14	口蓋裂患者のマネージメント					口蓋裂患者の年齢に応じたマネージメントの理解を深める				
15	口腔－咽頭癌					口腔－咽頭癌の種類を理解する				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	資料配布									
成績評価 方法	試験(100%)					履修上の 注意	授業に積極的に参加すること			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	小児聴覚障害治療学					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義と演習を通して、小児の指導と訓練の理論と手段を学ぶ。					【到達目標】 ・一般目標 小児聴覚障害の指導と訓練の理論と手段を習得する ・行動目標 小児聴覚障害の聴覚活用の方法を説明することが出来る 小児難聴障害の発達時期における指導方法の違いを理解する。 基礎的な人工内耳の仕組みを理解する。 小児難聴児の指導目標や指導内容が計画できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	2年次の復習					1～2年生で習得した聴覚の知識を復習する。				
2	小児聴覚障害の特徴と言語習得					乳児期から学童期までの小児聴覚障害児の特徴と言語習得の状況について把握できる。				
3	人工内耳の概要について					人工内耳の構造や概要を理解して説明できる。				
4	人工内耳のマッピングについて					人工内耳のマッピングについて理解し説明できる。				
5	小児人工内耳の概要と人工内耳適応基準について					小児人工内耳の概要や人工内耳適応基準について理解することができる。				
6	聴覚活用と聴覚学習					小児聴覚障害の聴覚活用の方法を説明することができる。				
7	聴覚障害児の音声・語彙・文・意味と語用習得の課題					聴覚障害児の音声・語彙などについて理解し、説明することができる。				
8	ハビリテーションプログラムについて					小児難聴におけるハビリテーションプログラムの方法について理解ができる。				
9	発達段階ごとの学習方法①					小児聴覚障害の発達時期における概要を理解できる。				
10	発達段階ごとの学習方法②					乳児期における指導方法の違いを理解できる。				
11	発達段階ごとの学習方法③					幼児期における指導方法の違いを理解できる。				
12	発達段階ごとの学習方法④					学童期における指導方法の違いを理解できる。				
13	軽度・中等度難聴児の課題と人工内耳装用児の課題					軽度・中等度難聴児と人工内耳装用児の課題について思案することができ、改善点を述べることができる。				
14	学校教育における指導と課題					学校教育における指導と課題について理解して説明できる。				
15	小児難聴評価サマリーの指導目標、指導内容作成(演習)					小児難聴児の指導目標や指導内容が計画できる。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	『標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版』					藤田郁代(監修)		医学書院		
	『聴力検査の実際 改訂4版』					日本聴覚医学会 編		南山堂		
	『言語・思考・感性の発達からみた 聴覚障害児の指導方法』					長南浩人		学苑社		
成績評価 方法	演習(10%)、期末試験(70%)、出席(20%)医師の診断書(それに準ずる物)がない欠席や遅刻・早退に関しては、各回の授業ごとに欠席-5点、遅刻・早退-2点とする。					履修上の 注意	2年次の小児聴覚障害学の復習をしておくこと。			
						実務経験 紹介	言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	成人聴覚障害治療学Ⅰ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 視覚聴覚二重障害、中枢性聴覚障害など、特異的な聴覚障害について概要を学ぶ。					【到達目標】 ・特異的な聴覚障害や重複障害の種類とその概要について説明できる。 ・それぞれの評価・訓練や社会的な支援、情報保障について理解できる。					
回数	授業内容				学習目標					
1	視覚聴覚二重障害の概要①				視覚聴覚二重障害者の概要について、理解や説明ができる。					
2	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーションと社会支援				視覚聴覚二重障害者が用いるコミュニケーションの方法について理解を深める。					
3	視覚聴覚二重障害の概要②				発症ごとの視覚聴覚二重障害のアプローチと視覚聴覚二重障害児の指導・訓練について理解できる。					
4	視覚聴覚二重障害の総括(演習・グループワーク)				発症ごとの視覚聴覚二重障害のアプローチについて分析し説明ができる。					
5	中枢性聴覚障害				中枢性聴覚障害についての概要や評価の方法について理解できる。					
6	機能性聴覚障害				機能性聴覚障害についての概要や評価の方法について理解できる。					
7	実耳測定				実耳測定の基本構造について仕組みや評価方法について理解し実践できる。					
8	重複障害				特異的な重複障害の種類とその概要について説明できる。					
9	聴覚障害者の就労支援				聴覚障害者の就労支援を把握し説明できる。					
10	聴覚検査に関わる法令				聴覚検査に関わる法令について理解し説明できる。					
11	人工聴覚器				人工聴覚器の基本構造について仕組みや適応基準について理解し説明できる。					
12	視覚聴覚二重障害演習:五感をしっかりつかう				視覚や聴覚だけではなく触覚などを使用して、視覚聴覚二重障害者(児)への理解を深める。					
13	視覚聴覚二重障害演習:情報を多角的にとらえる				探索体験を通して、視覚的に捉えにくい情報についての理解を深める。					
14	視覚聴覚二重障害演習:二重聴覚障害の状態遊ぶ				視覚聴覚二重障害者の座位活動に対する疑似体験を行って、視覚聴覚二重障害者への対応法を学ぶ。					
15	視覚聴覚二重障害演習:実際に使える体験活動				視覚聴覚二重障害者の歩行や階段昇降に対する疑似体験を行って、視覚聴覚二重障害者への対応法を学ぶ。					
教科書	書籍名				著者		出版社			
	『標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版』				藤田郁代(監修)		医学書院			
	『聴力検査の実際 改訂4版』				日本聴覚医学会 編		南山堂			
	聴覚障がい児・盲ろう児の発達支援テキスト 0歳からの発達支援基礎編				原田勇彦		エスコアール			
参考図書等	聴覚障がい児・盲ろう児の発達支援テキスト 1歳からの発達支援実践編				星川じゅん		エスコアール			
成績評価方法	期末試験(80%)、出席(20%)医師の診断書(それに準ずる物)がない欠席や遅刻・早退に関しては、各回の授業ごとで欠席-5点、遅刻・早退-2点とする。				履修上の注意		非常勤講師による特別講義(演習)も予定されています。日程が不規則になる可能性があるので注意してください。			
					実務経験紹介		言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。			

科目 区分	専門	履修形態	必修	科目名	成人聴覚障害治療学Ⅱ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 実技や演習を通して、成人聴覚障害者への支援方法を学ぶ。					【到達目標】 ・一般目標 リハビリテーションの理論や手法を学ぶ。また、成人聴覚障害者の心の問題や聴覚的手段を学ぶ。 ・行動目標 ①成人聴覚障害者のコミュニケーション指導について説明できる。 ②コミュニケーション方法や支援の方法を説明できる。 ③高齢者の聴覚障害との特徴を知る。 ④中途失聴者の心理的問題とカウンセリング手法を説明できる。 ⑤聴覚障害全般についてまとめ、基礎的な多肢選択法の問題が解けるようになる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	成人難聴のリハビリテーション概要					成人聴覚障害者のリハビリテーションの概要について理解や説明ができる。				
2	成人難聴の評価					成人聴覚障害者の評価ができる。				
3	成人聴覚障害ロールプレイング(演習)					中途失聴した成人聴覚障害者への対応や指導が行える。				
4	中途難聴者の補聴					中途失聴した成人聴覚障害者の補聴器装用のニーズを把握し、補聴器装用の指導方法を理解する。				
5	語音聴取とコミュニケーションに関わる支援					成人聴覚障害者の語音聴取の概要と支援について、理解や説明ができる。				
6	中途難聴者とコミュニケーションに関わる支援					中途失聴者のリハビリテーション指導や支援方法について理解ができ説明が行える。				
7	成人聴覚障害者の構音評価					成人聴覚障害者の構音について評価ができる。				
8	聴力検査を読み解く					2年生に習得した聴覚検査の評価について分析し評価が行える。				
9	コミュニケーション支援について 視覚的活用(読話演習)					読話が実践できる。				
10	コミュニケーション支援について 視覚的活用(手話・指文字演習)					手話・指文字を使って自己紹介が行える。				
11	国家試験過去問題を使用して聴覚障害についての理解を深める①					第22回言語聴覚士国家試験を説明しながら解くことができる。				
12	国家試験過去問題を使用して聴覚障害についての理解を深める②					第23回言語聴覚士国家試験を説明しながら解くことができる。				
13	国家試験過去問題を使用して聴覚障害についての理解を深める③					第24回言語聴覚士国家試験を説明しながら解くことができる。				
14	国家試験過去問題を使用して聴覚障害についての理解を深める④					第25回言語聴覚士国家試験を説明しながら解くことができる。				
15	国家試験過去問題を使用して聴覚障害についての理解を深める⑤					第26回言語聴覚士国家試験を説明しながら解くことができる。				
教科書	書籍名					著者				
	『標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版』					藤田郁代(監修)				
	『聴力検査の実際 改訂4版』					日本聴覚医学会 編				
参考 図書等						出版社				
						医学書院				
						南山堂				
成績評価 方法	期末試験(80%)、演習+出席(20%)医師の診断書(それに準ずる物)がない欠席や遅刻・早退に関して、各回の授業ごとで欠席-5点、遅刻・早退-2点とする。また、理由もなく演習を実施しない場合は-5点とする。					履修上の 注意	1, 2年次の小児・成人の聴覚障害分野を復習しておくこと。			
						実務経験 紹介	言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある。			

科目区分	専門	履修形態	選択	科目名	臨床実習Ⅰ					
単位数	6	時間数	240	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	実習
担当	ST学科教員						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	有
【授業の概要】 臨床現場である病院・施設において、実習指導者のもと、実際の症例を通して言語聴覚療法での評価を行い、症状分析、問題点の抽出や目標設定、治療計画の立案を行う					【到達目標】 言語障害者へ情報収集及び検査測定を行い、典型的な言語症状の分析ができる。また、社会人としての礼儀を学び、対象者や職員に対して適切な関係作りができる。					
回数	授業内容					学習目標				
6週間、学外の医療機関である臨床実習地において、臨床実習指導者のもと言語聴覚士の業務を学ぶ										
【授業内容】 ・言語聴覚士の業務内容を理解する ・対象者の観察や評価結果より、症状を分析し障害の全体像を把握する ・評価・診断結果より、目標設定と訓練計画の立案を行う ・実習記録を作成する ・臨床での関連職種との連携や対象者とご家族とのかかわり方を学ぶ ・経験した症例の報告をまとめる（症例報告書の作成） ・症例報告会で発表する										
【学習目標】 ・症例の情報収集及び検査測定が行える ・検査測定後の総合的な評価を通じて対象者（児）の問題に気付く ・検査測定の結果から問題点を分析し、言語聴覚療法の計画を立てる ・検査測定した症例の記録と報告ができる ・医療、福祉機関の組織、リハビリテーション部門及び言語聴覚療法部門の運営管理について基本的事項を学ぶ										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	特に定めない									
成績評価 方法	症例報告書の内容と報告会での発表にて評価する					履修上の 注意	臨床実習までに受講した科目の単位を全て習得していること			
						実務経験 紹介				

3 年 次

選 択 必 修 科 目

- ◇言語療法セミナーⅢ
- ◇言語療法セミナーⅣ
- ◇理学療法概論
- ◇作業療法概論
- ◇看護学概論
- ◇薬理学
- ◇救急医学
- ◇栄養学
- ◇地域言語聴覚療法論

言語聴覚学科

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	言語療法セミナーⅢ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	演習
担当	正司真規 今村真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 2年次の専門基礎科目・専門科目の学習を終え、さらにディスカッションや演習を通して理解を深め、臨床実習に臨めるようにする。					【到達目標】 ・言語聴覚療法に必要な知識・技術を再確認する。 ・言語聴覚障害のスクリーニング・総合検査が実施できる。 ・言語聴覚障害の診断が実施できる。 ・対象者とのコミュニケーション力を身につける。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション					今後の講義内容について理解する				
2	OSCE実技練習(SLTA)					実技練習を通して検査手技の理解を深める				
3	OSCE実技練習(S-S法)					実技練習を通して検査手技の理解を深める				
4	OSCE実技練習(初回面接&嚥下)					実技練習を通して検査手技の理解を深める				
5	OSCE(SLTA)					実技試験の合格基準に到達する				
6	OSCE(S-S法)					実技試験の合格基準に到達する				
7	OSCE(初回面接&嚥下)					実技試験の合格基準に到達する				
8	小児分野の言語聴覚療法講義					小児分野の言語聴覚療法について理解する				
9	小児分野の言語聴覚療法講義					小児分野の言語聴覚療法について理解する				
10	小児分野の言語聴覚療法講義					小児分野の言語聴覚療法について理解する				
11	小児分野の言語聴覚療法講義					小児分野の言語聴覚療法について理解する				
12	小児分野の言語聴覚療法講義					小児分野の言語聴覚療法について理解する				
13	成人分野の言語聴覚療法講義					成人分野の言語聴覚療法について理解する				
14	成人分野の言語聴覚療法講義					成人分野の言語聴覚療法について理解する				
15	成人分野の言語聴覚療法講義					成人分野の言語聴覚療法について理解する				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士テキスト 第3版 図解言語聴覚療法技術ガイド 第2版					大森孝一 他 編 深浦順一 他		医歯薬出版 文光堂		
参考 図書等										
成績評価 方法	OSCE60%、小児20%、成人20%					履修上の 注意	個別学習・グループ学習を行う。協調性をもち、積極的な授業参加を望む。 ※上記の計画は授業の実施順番を示すものではない。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	言語療法セミナーⅣ					
単位数	1	時間数	30	学年/学科	3年	言語	学期	後期	授業形態	演習
担当	正司真規 今村真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 2年次の専門基礎科目・専門科目の学習を終え、さらにディスカッションや演習を通して理解を深め、臨床実習に臨めるようにする。					【到達目標】 ・言語聴覚療法に必要な知識・技術を再確認する。 ・言語聴覚障害のスクリーニング・総合検査が実施できる。 ・言語聴覚障害の診断が実施できる。 ・対象者とのコミュニケーション力を身につける。 ・観察したことを記録することや臨床実習報告書が記載できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	OSCE実技練習(ASMD)					実技練習を通して検査手技の理解を深める				
2	OSCE実技練習(臨床実習後)					実技練習を通して理解を深める				
3	OSCE(ASMD)					実技試験の合格基準に到達する				
4	OSCE(臨床実習後)					実技試験の合格基準に到達する				
5	OSCE(臨床実習後) まとめ					実技試験の振り返りができる				
6	報告書作成(小児)					報告書が作成できる				
7	報告書作成(小児)					報告書が作成できる				
8	報告書作成(小児)					報告書が作成できる				
9	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
10	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
11	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
12	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
13	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
14	報告書作成(成人)					報告書が作成できる				
15	まとめ					これまでの講義内容が理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	言語聴覚士テキスト 第3版					大森孝一 他 編		医歯薬出版		
	図解言語聴覚療法技術ガイド 第2版					深浦順一 他		文光堂		
参考 図書等										
成績評価 方法	OSCE60%、小児20%、成人20%					履修上の 注意	個別学習・グループ学習を行う。協調性をもち、積極的な授業参加を望む。 ※上記の計画は授業の実施順番を示すものではない。			
						実務経験 紹介	本領域において臨床経験あり。			

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	理学療法概論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	吉富 智江						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 生活に関わるリハビリテーション専門職として、関係職種の仕事を理解することが重要である。特にリハビリテーションにおける理学療法・作業療法・言語聴覚療法の目的、手段を明確にした上で、各職種間の関わり方を学習する。					【到達目標】 ・リハビリテーションと理学療法の違いを説明できる。 ・理学療法の対象、目的、手段について説明できる。 ・理学療法技術(特に動作介助技術)が模倣できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	リハビリテーションにおける理学療法の位置づけと目的					リハビリテーションにおける理学療法について説明できる				
2	多職種との連携					多職種、特に理学療法士との連携について理解する				
3	理学療法の実践① 理学療法におけるリスク管理(演習)					実技を交えながらリスク管理の重要性を理解する				
4	理学療法の実践② 運動療法と物理療法(演習)					実技を交えながら、運動療法、物理療法を理解する				
5	日常生活の中での理学療法技術(寝返り・起き上がり・移乗)(演習)					学生間での基本的動作介助が実施できる				
6	日常生活の中での理学療法技術(歩行・階段昇降)(演習)					学生間での基本的動作介助が実施できる				
7	日常生活の中での理学療法技術(補装具療法)(演習)					基本的動作を支援する補装具療法の重要性を理解する				
教科書	書籍名					著者				
	適宜紹介									
参考図書等										
成績評価方法	1. 演習課題(20%) 2. 確認試験(80%)					履修上の注意	実技も含めながら理学療法の業務を学習するため、積極的に参加すること。			
						実務経験紹介	理学療法士として医療機関で6年間、非常勤として20年間の実務経験あり。			

科目区分	専門基礎	履修形態	必修	科目名	作業療法概論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	大田 茂臣						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 ・リハビリテーションに携わる専門職として、作業療法の 実践領域やその内容について理解を 深める。 ・各療法との接点やその専門性の違いについて考える。					【到達目標】 ・作業療法の基本概念について理解できる。 ・作業療法の実践領域や業務内容について理解できる。 ・作業活動の体験を通じて、作業の意味について理解する。 ・専攻する療法との接点やその専門性の違いについて 考察できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	作業療法、作業療法士とは					作業療法士の定義や領域、業務内容について理解する。				
2	作業療法の「作業」について					作業療法士の「作業」について理解し、作業に根差した実践を学ぶ。				
3	身体障害領域の関りについて					作業療法士の身体障害領域について理解する。				
4	精神障害領域の関りについて					作業療法士の精神障害領域について理解する。				
5	地域での関りについて					作業療法士の地域での作業療法について理解する。				
6	作業活動の体験					革細工でキーホルダーを作ることを通して、身体、精神機能を分析することができる。				
7	体験した作業について振り返る					革細工でキーホルダーを作ることを通して、身体、精神機能を分析することができる。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	適宜資料を配布する									
成績評価 方法	1. 筆記試験(100%)					履修上の 注意	作業体験をする際には、塗料を使用するため、汚れても良い衣服で参加すること。			
						実務経験 紹介	作業療法士として医療機関で15年以上の経験あり。			

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	看護学概論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	佐藤 美幸						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 チーム医療の中で協働する、看護および看護職について理解するために、看護の定義や役割、機能について概説する。また、医療現場や多職種連携の場面において看護職の果たす役割を理解し、チーム医療における言語聴覚士と看護職との連携について理解を深める。					【到達目標】 1)看護とはなにか、看護職の対象の捉え方について知る。 2)看護の提供のしくみや教育からその役割について知る。 3)看護の機能と役割を理解し、チーム医療における言語聴覚士と看護職との連携のあり方について考察できる。					
回数	授業内容					学習目標				
1	オリエンテーション 看護とは					看護師とはどのような人なのかを説明できる 看護とは何か、看護実践とは何かを説明できる 看護の継続性と言語聴覚士との連携を説明できる				
2	看護の対象の理解					看護はどのような人を対象にするのが説明できる 看護の対象者(人)の特徴を説明できる 生活者である人間に対して看護が果たす役割を理解できる				
3	国民の健康・生活の全体像の把握					健康とは何か、障害とは何かを看護の視点で把握できる				
4	看護の提供者					看護職の資格と養成、継続教育の概要を理解する				
5	看護における倫理(講義・演習)					倫理とは何かを考える 医療・看護をめぐる倫理的問題や倫理的ジレンマについて考える				
6	看護の提供のしくみ					チーム医療における看護の役割を理解する 看護サービスがどのように提供されているのかを理解する				
7	広がる看護の活動領域					国際看護、災害看護など特殊な状況での看護活動の現状を知る				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 看護学総論 第17版					茂野 香おる 他著		医学書院		
参考図書等	適宜紹介									
成績評価方法	1. 授業態度・参加度(10%) 2. 演習課題(20%) 3. 最終試験(70%)					履修上の注意	・コ・メディカルスタッフの一員としての看護職者について学ぶことから、それぞれ立場との連携をとっていく上での他職種との連携を考えていただければと思います。 ・授業に集中するため、私語厳禁、携帯電話の使用等は禁止させていただきます。			
						実務経験紹介				

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	薬理学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	田村 和文						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 薬物がヒトの身体にどのように作用して疾病の治療に寄与するか、また、ヒトの身体が薬物にどのように反応するか、また薬物を使用して起きることが予測される副作用について学習し、「科学的根拠に基づいた治療」が理解できるように薬理学を学ぶ。限られた時間内で全てを網羅できないが、必要最小限のことを講義する。					【到達目標】 ・リハビリテーションの領域で用いられる薬についての知識を持つ。 ・薬の効能と副作用についての知識を持つ。					
回数	授業内容					学習目標				
1	薬理学総論					薬物と生体との相互作用の結果起こる現象を探究する科学である薬理学全般を理解する。すなわち薬物を薬物作用と薬物動態の両面から学習する。特に薬物作用機序と受容体を学ぶ。				
2	末梢神経系、中枢神経系作用薬					交感・副交感神経作用薬の作用機序、交感・副交感神経刺激薬と交感・副交感神経遮断薬の臨床応用および副作用を学ぶ。中枢神経作用薬の多様な中枢性、末梢性副作用とそれに対する対処法を学ぶ。				
3	心臓病血管作用薬					高血圧の病態生理と薬物治療の基本(薬理作用、副作用)を学ぶ。				
4	抗炎症薬、呼吸器系作用薬					生体防御機能としての炎症反応および免疫応答を理解し炎症性疾患に対する抗炎症薬、および免疫疾患に対する治療薬の基本について学ぶ。呼吸の生理と呼吸を障害する疾患の発生機序を学ぶ。				
5	消化器系、ホルモン系、生殖器系作用薬					消化器疾患の病態生理と薬物療法の基本を学ぶ。各種ホルモンの作用、役割を理解し、内分泌器官の障害、異常に由来する疾患の治療薬について学ぶ。				
6	抗感染症薬、抗悪性腫瘍薬					各種感染症の病原体(微生物)と抗感染症薬の基本(薬理作用、副作用)について学ぶ。悪性腫瘍の特性と抗悪性腫瘍薬の基本(薬理作用、副作用)について学ぶ。				
7	漢方薬総論					漢方薬の特徴と西洋医薬の相違を学ぶ。漢方医学の診断と治療目標の概略を学ぶ。漢方薬の適用疾患について学ぶ。				
教科書 参考 図書等	書籍名					著者		出版社		
	わかりやすい薬理学					安原 一 小口 勝司		広川書店		
成績評価 方法	1. 授業態度(30%) 2. 確認試験(70%)					履修上の 注意	臨床実習直前の授業です。興味をもって望んでくれることを期待します。			
						実務経験 紹介				

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	救急医学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	非常勤講師 山口市消防本部						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 私たちは、常に生死の境目で仕事を行っている医療職である。特に、リハビリテーション医療では、急性期・回復期・生活期のどの場面においてもリスク管理は重要であり、「救命救急」は必然である。保健医療福祉に携わる専門職として、常に基本的な救急時の判断・対処法(処置)について熟知し、対応できる能力を周囲から求められている。「命」を守る医療専門職として最低限の知識技術の習得を目的とする。					【到達目標】 救命処置が必要になった時、素早く行動できる知識技術を持つ。医療の専門家として対応しなければならない、という意識を常日頃より持つ(緊急事態の際、逃げない、第3者にならない)。					
回数	授業内容					学習目標				
非常勤講師 5回 救急総論 頻度の高い症状の診断と対処 救急医療 緊急を要する病態とその初期治療(1) 緊急を要する病態とその初期治療(2) 期末試験 1回 山口市消防本部 2回 普通救命救急講習Ⅰ 成人を対象とした心肺蘇生法を理解し体験する。 AEDの使用方法を理解し体験する 止血法などを学習し体験する。 ※講習者は普通救命講習Ⅰ修了証が交付されます。										
教科書	書籍名					著者			出版社	
参考図書等										
成績評価方法	1. 授業態度・参加度(30%) 2. 筆記試験(70%)					履修上の注意	授業・実習など、常に緊張感をもって授業に臨むこと。「緊急事態」になった時、個々で対応できる能力は「経験が一番」と心得ること。			
						実務経験紹介				

科目区分	選択・必修	履修形態	必修	科目名	栄養学					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	松村 史樹						教員の 実務経験	無	企業等 との連携	無
【授業の概要】 栄養問題は、かつての食料不足による単純な欠乏症に代わって、生活環境やライフスタイルの変遷に伴って新たな問題を発生させている。新たな栄養問題は、体力低下や病気の回復力の低下、さらにはQOLの低下など、リハビリテーションの観点からも問題となる。 栄養とは生物が活動、成長、増殖していくために外界から必要な物質を取り込み、生命を維持していく現象であることを学び、リハビリテーションの専門職としても栄養のもたらす効果や不利益について理解することを到達目標とする。					【到達目標】 ・栄養素の種類と働きについて理解する。 ・栄養状態の評価・判定を理解する。 ・リハビリテーションと栄養との関連性を理解する。 ・各病態における栄養管理を理解する					
回数	授業内容					学習目標				
1	栄養学の必要性					リハビリテーションに栄養管理が必要であることを理解できる				
2	生化学と栄養学					栄養素の成り立ちについて理解できる				
3	栄養素について					3大栄養素と微量栄養素の役割を理解できる				
4	エネルギー代謝と運動および代謝異常					エネルギーを生み出す仕組みについて理解できる				
5	栄養評価と栄養補給法					栄養状態を評価するための方法と補給方法を理解できる				
6	低栄養・過栄養の栄養管理と病態栄養管理					各病態に応じた栄養療法を理解できる				
7	栄養管理と他職との連携					多職種間で栄養管理を行うことの必要性を理解できる				
教科書	書籍名					著者		出版社		
	リハビリテーションテキスト 栄養学・生化学					吉村芳弘		メジカルビュー社		
参考 図書等										
成績評価 方法	1. 授業態度(20%) 2. 筆記試験(80%)					履修上の 注意	・1年次の生理学の復習をしながら、授業に臨むこと。 ・教科書にて授業内容を振り返ること。			
						実務経験 紹介				

科目区分	選択・必修	履修形態	選択	科目名	地域言語聴覚療法論					
単位数	1	時間数	15	学年/学科	3年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	正司 真規						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 講義、施設見学を通して地域での言語聴覚士の役割を学ぶ					【到達目標】 地域での言語聴覚療法の役割や種類、制度を学び、理解を深める					
回数	授業内容				学習目標					
1	地域リハビリテーションについて				地域リハビリテーションとは何か説明できる					
2	地域包括ケアシステム				地域包括ケアシステムの概要が説明できる					
3	在宅サービスの種類				代表的な在宅サービスの内容を説明できる					
4	地域での言語聴覚士の役割				地域での言語聴覚士の役割を説明できる					
5	施設見学				地域での言語聴覚士の役割を説明ができる。また、言語障害者との会話に積極的に参加する。					
6	施設見学				地域での言語聴覚士の役割を説明ができる。また、言語障害者との会話に積極的に参加する。					
7	施設見学				地域での言語聴覚士の役割を説明ができる。また、言語障害者との会話に積極的に参加する。					
8	施設見学				地域での言語聴覚士の役割を説明ができる。また、言語障害者との会話に積極的に参加する。					
教科書 参考図書等	書籍名				著者		出版社			
	特に定めない									
成績評価方法	レポート100%				履修上の注意	施設見学を行います。				
					実務経験紹介	本領域の実務経験あり				

4 年 次

専 門 科 目

- ◇言語聴覚障害研究法Ⅱ
- ◇言語療法総論Ⅰ
- ◇言語療法総論Ⅱ
- ◇臨床実習Ⅱ

言語聴覚学科

科目区分	専門	履修形態	選択	科目名	言語聴覚障害研究法Ⅱ					
単位数	1	時間数	45	学年/学科	4年	言語	学期	後期	授業形態	講義
担当	ST学科教員						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 臨床実習で得られたテーマやデータをもとに研究を遂行し、論文研究を実施する。					【到達目標】 臨床実習で得られたテーマをもとに論文研究を遂行し、担当教員指導のもと研究報告書をまとめる					
回数	授業内容					学習目標				
【授業内容】 ・ガイダンス ・研究テーマの設定 ・情報収集と研究計画の立案 ・研究データの収集と解釈、文献調査 ・結果解釈及び考察 ・報告書の完成 【学習目標】 ・研究の進め方、研究の方法について説明できる ・臨床実習を振り返り、興味深いテーマを見出すことができる ・テーマをもとに得られたデータや文献等で研究を展開することができる ・研究結果の報告や報告書作成ができる										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	特に定めない									
成績評価 方法	研究報告書と報告会(100%)					履修上の 注意	能動的に動き、教員とコミュニケーションを取って進めること。			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	選択	科目名	言語療法総論Ⅰ					
単位数	2	時間数	90	学年/学科	4年	言語	学期	前期	授業形態	講義
担当	正司 真規 , 今村 真由香						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 臨床実習Ⅱに向けて、これまでに学習した知識・技能を再確認し、評価や訓練のための準備・演習を行う。また、臨床実習前後でOSCEを実施し、臨床技能の向上を目指す。そして実習報告会で発表を行い、臨床実習Ⅱを総括する。					【到達目標】 臨床実習の準備～実習～振り返りを通じて、言語聴覚士として必要な臨床議場を獲得する。					
回数	授業内容					学習目標				
【授業内容】 45コマ授業 週4～6コマ(4・5月、7・8月) 4月 グループ学習にて模擬症例設定、評価～訓練まで実施する。2症例(失語・構音障害)を想定 5月 臨床実習前OSCEの準備・実施 7～8月 臨床実習前後OSCEを実施 8月 臨床実習後の症例報告会に向けての準備 【学習目標】 ・臨床実習Ⅰの課題を振り返り、対策を立てることができる。 ・臨床実習Ⅱの計画を立て、準備を行うことができる ・臨床実習Ⅱの前後でOSCEを実施し、基本的な臨床技能を獲得する ・臨床実習Ⅱで得た知見や課題をまとめ、発表および報告書作成ができる										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	特に定めない									
成績評価 方法	臨床実習前OSCE・・・40% 臨床実習後OSCE・・・40% レポート・・・20%					履修上の 注意	能動的に動き、教員とコミュニケーションを取って進めること。			
						実務経験 紹介	本領域の実務経験あり			

科目区分	専門	履修形態	必修	科目名	言語療法総論Ⅱ					
単位数	3	時間数	135	学年/学科	4年	言語	学期	後期	授業形態	演習
担当	川北 淳一郎、平野 春樹						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	無
【授業の概要】 国家試験に向けて、これまで学んだ知識を振り返り統合する。各自の課題を明確にし、計画的に対策学習を進める。また、国家試験対策講義を行い知識の定着・拡充をはかる。臨床に出る上で必要となる技能を身に着ける。					【到達目標】 ・1～3年次に習得した知識を定着・発展させることができる。 ・国家試験の出題基準を確認し、計画的な国家試験対策を立てることができる。 ・模擬試験や国家試験の過去問題を実施し、慣れるとともに弱点対策が立てられる。 ・国家試験対策講義を受講し、学びを深め・拡充することができる。					
回数	授業内容					学習目標				
【授業の概要】 68コマ授業 週4～6コマ(10月～12月) 8～12月 模擬試験を随時実施 現状での自己学力を確認し、学習目標を決めていく。 10月 国家試験模擬試験、試験前学習および試験後の振り返り学習、個別指導月の模擬試験の平均点を110点以上採ることが出来る。 11月 国家試験模擬試験、試験前学習および試験後の振り返り学習、個別指導月の模擬試験の平均点を115点以上採ることが出来る。 12月 国家試験模擬試験、試験前学習および試験後の振り返り学習、個別指導月の模擬試験の平均点を120点以上採ることが出来る。										
教科書 参考 図書等	書籍名				著者			出版社		
	『言語聴覚士テキスト 第3版』				廣瀬肇 監修			医歯薬出版		
	『言語聴覚士国家試験 過去問題3年間の解答と解説』							大揚社		
	『言語聴覚士国家試験必修チェック』							文光堂		
	『言語聴覚士国家試験必修ポイント ST基礎科目』							医歯薬出版		
	『言語聴覚士国家試験必修ポイント ST専門科目』							医歯薬出版		
成績評価 方法	『言語聴覚士国家試験マスターノート』				上月正博 監修			MEDICAL VIEW		
	5択形式での試験・・・100%				履修上の 注意		指導されての学習のみならず、主体的に積極的に自己学習を進めること。			
					実務経験 紹介		言語聴覚士として医療機関で5年、通所介護施設で2年の実務経験。補聴器販売店で1年の経験がある(平野)。			

科目 区分	専門	履修形態	選択	科目名	臨床実習Ⅱ					
単位数	8	時間数	320	学年/学科	4年	言語	学期	前期	授業形態	実習
担当	ST学科教員						教員の 実務経験	有	企業等 との連携	有
【授業の概要】 医療機関において実習指導者の指導管理のもとで言語聴覚士業務を体験する。 言語聴覚障害の検査評価・訓練立案・訓練の実施・言語聴覚障害児・者への心理的サポートなどを実習指導者の指導管理のもとで行う。 臨床実習症例報告書を作成し、発表を行い議論する。					【到達目標】 情報収集及び検査測定、訓練、再評価を行い、典型的な言語症状への言語聴覚療法が指導のもと実施できる。また、社会人としての礼儀を学び、対象者や職員に対して適切な関係作りができる。					
回数	授業内容					学習目標				
8週間、学外の医療機関である臨床実習地において、臨床実習指導者のもとで言語聴覚士の業務を学ぶ										
【授業内容】 ・言語聴覚士の業務内容を理解する ・対象者の観察や評価結果より、症状を分析し障害の全体像を把握する ・評価・診断結果より、目標設定と訓練計画の立案を行う ・訓練計画に沿い、訓練を実施する ・訓練実施後再評価を実施する ・実習記録を作成する ・臨床での関連職種との連携や対象者とご家族とのかかわり方を学ぶ ・経験した症例の報告をまとめる（症例報告書の作成） ・症例報告会で発表する										
【学習目標】 ・症例の情報収集及び検査測定が行える ・検査測定後の総合的な評価を通じて対象者（児）の問題に気付く ・検査測定の結果から問題点を分析し、言語聴覚療法の計画を立てる ・計画に沿って、基本的な言語聴覚療法が実施できる ・症例の記録と報告ができる ・医療、福祉機関の組織、リハビリテーション部門及び言語聴覚療法部門の運営管理について基本的事項を学ぶ										
教科書 参考 図書等	書籍名					著者			出版社	
	特に定めない									
成績評価 方法	症例報告書の内容と報告会での発表にて評価する					履修上の 注意	臨床実習までに受講した科目の単位を全て習得していること			
						実務経験 紹介				